

---

HONEY\*POISON

甘い蜜には毒がある

滝沢美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HONEY\*POISON 甘い蜜には毒がある

### 【Nコード】

N6321T

### 【作者名】

滝沢美月

### 【あらすじ】

大学生の葵生は、“食事つき”という条件に惹かれて飲食店の事務のアルバイトを始める。ワンルームの事務所で社長と二人きりだけど社長はとてもいい人で、仕事も簡単だし、シフトの融通もきいて、とても条件のいいバイトだったんだけど……バイトを始めて二カ月、仕事に慣れ始めた頃に社長が病気で倒れてしまった!? 代理で来たのは社長の息子・翔真。イケメンだけど……仕事のことになると厳しくて、性格も悪くて……葵生のバイト生活はどうなっちやうの!?

## 第1話 おいしい話には裏がある

部屋……間違っただけよ？

そう思って自分の席に座っている私は、部屋の中をぐるりと見回す。机の位置も棚の位置も机の上に置かれた文具も、何もかもが一日前見た事務所のままだった。社長の席に座る人物を除けば。

昨日はずっと大学の講義があつてバイトは休みで、一日ぶりにバイトに来たら、事務所に知らない人がいたのだ。

歳は二十代前半くらい、きりつとした二重、通った鼻梁、薄く形の良い唇、そして一番目を引くのは、蜂蜜色の羨ましいくらいサラサラの髪。芸能人にも負けなくらいのイケメンが、一昨日までは社長がいた席。私の斜め横の席に座っている。

あまりにもじいーと見すぎていたからか、イケメンが手は動かしながら、机の上の書類から視線だけを私に向けた。

「なんですか？ なにか分からないことでも？」

「いえ、あの……」

口ごもった私の机の上には、どっさりとよくわからない書類が山積みにされている。

「社長は……今日はいらっしやらないのですか？」

そう言った私を、中指で鼻に当たる眼鏡を押し上げながらジロリと見据えた。

キーン。音を立てながら椅子の向きを変えて立ちあがったイケメンは、細身の黒いパンツに白いシャツを着て、スーツじゃないのに洗礼された美しさが漂っている。

「自己紹介がまだでしたね。僕は久我 翔真（ひが しょうま）といいます。社長 久我 銀司（ひが ぎんじ）の長男です。社長は体調を崩して入院することになったので、しばらくは僕が社長代理を務めます。よろしく」

にこりと、天使も逃げ出すような妖しく麗しい微笑みで手を差しのべられて、不覚にもドキリとってしまった。

社長、そーいえば血糖値が高めだからって、いつも薬飲んでたな。そんなことを思い出しながら立ちあがり、出された手を握って挨拶する。

「はじめまして、バイトの長田 葵生（おくだ あおい）といます。よろしくお願ひします」

「長田さんのことは社長から聞いています。いつも社長と二人で大変だったでしょう?」

くすりと笑って久我さんが言う。

「いえ、そんなことは。社長にはとてもよくして頂いています」

「そう……」

首をかしげながら私を見る久我さんは、なんだか目が笑ってなくて……怖い。

「じゃあ、早速で悪いんだけど、その机に置いてある書類整理よろしくね」

言いながら席に戻り、時間が惜しいというようにてきぱきと仕事を再開する久我さんに、私は言われたことの意味が分からなくて目を見開く。

「あの……」

「なんですか？」

うるさい　言葉にしてないけど、そう久我さんの周りの空気が語ってて、私の方を見ずに聞き返した。

私はゴクリと唾を飲み込み、自分の机の上に置かれた書類を一つ持ち上げて言う。

「この書類ってどうしたらいいんですか……？」

その瞬間　バキンって、何かが壊れるような音が室内に響く。書類に視線を向けたままだった久我さんが立ちつくした私をゆっくりと見上げ……がぱつと勢いよく立ち上がると私に近づき、持っていた書類をひったくった。素早く目を通し、机の上にはんつと置いて私を見た久我さんは、笑顔だけどやっぱり目は笑ってなくて、すごく怖い。

こんなことも出来ないのか　そう、目が皮肉気に語っている。

「これは、先月の各店の在庫一覧表です。パソコンのここに在庫データがあるので、数字を入力して、在庫の金額を出して下さい」

言いながら私のパソコンのマウスを動かして、在庫データを開く。

「いいですか？」

聞かれているはずなのに。

出来ないなんて言わないよな、あ？

そんな威圧感があつて、私は慌てて頷いた。

「はっ、はい……」

「それならば、早く仕事にとりかかつて。出来た書類はココに置いて下さい」

そう言つて久我さんは、社長の机の上に置かれた一つのボックスを指さして、すぐに席に戻つていった。

私は言われたとおりに、パソコンのデータを開き数字を入力し始めた。

だけどさ、私は一言、物申したい！

こんな在庫データなんて、今までやったことないんだもの、わかなくて当然でしょ。それなのに、なに？ こんなことも出来ないのかつて、鼻で笑つて人のこと見下して馬鹿にして。ちよつとイケメンだからつてなによ、偉そうに。

怒りにまかせて、すごいスピードでデータを入力していく。自慢じゃないけど、タイピングのスピードには自信があるのよね。まあ、普段の仕事は食材の発注かけて、あとは雑用だもんね。机にパソコンがあつても滅多に使わないし、ましてタイピングのスピードが役に立つ仕事なんてなかつたけど。

入力し終わったデータを印刷し、言われたボックスに入れる。

久我さんはそんな私を、ちらりとも見ずに仕事に集中している。

私は次の仕事に取り掛かるべく、書類の山に手を伸ばす。掴んだ書類にはこう書かれている　　××五月シフト票。つまり、店舗の社員、アルバイト全員のシフト票が束ねてあるんだけど……これを一体どうしろと？

謎の物体に首を傾げ、仕方なく、久我さんに声をかける。

「すみません。コレなんですけど……」

そう言った私を、久我さんは人も殺せるんじゃないかってくらい凶悪な目つきでギロリと見上げる。

「君は、仕事の度にいちいち聞かないと何もできないのか？」

吐き出された冷たい声。

さつきだつて目こそ笑つてなかったけど、声だけ聞いたらとても柔らかい雰囲気ですごく立っているのなんか分からないくらいだったのに、今は違う。あきらかに声に怒気をはらんでいる

なんで？　なんで、私が初対面の人にここまで怒られないといけないの！？

私はカーと頭に血がのぼって、立ち上がりながらばんっと机を叩いて叫んでいた。

「そんなこと言われても、やったこともない仕事をいきなり説明もなしにやれって言われても、出来ま　　」

「出来ない？」

私の言葉が言い終わる前に久我さんが言った。

「君、いくら時給もらっているの？」

「千円ですけど」

質問の意図が読めなくて、渋々答える。

「それで？　千円でどんな仕事をしているわけ？　部屋の掃除？　在庫データも入力出来ず、シフト管理も出来ない。それで時給に見

合った仕事をしてると思ってるの？」

確かに部屋の掃除もしてるけど、それだけじゃないし……！　そう言いたかったのに、言えなかった。

悔しいけど、久我さんの言っていることが正論に聞こえて、ギリりと唇をかみしめた。

バイト情報誌で見つけた“食事付き”という条件に引かれて始めた飲食店の事務のバイト。

事務とは名ばかりで、食材の発注をして後は事務所に待機。電話を受けたり掃除したり、そんな雑用をこなすだけで仕事内容はとても簡単。大学の講義との兼ね合いでシフトの自由はきくし、ご飯代は出るし、狭いワンルームで父親と同年の社長と二人つきりつてのは多少……最初は気まづかったけど、社長は気さくな人で慣れるといろんなことを教えてくれて楽しいし。

そのことを友達に話したら。

「葵生、そんなうまい話あるわけないじゃん、ぜったいなんか落とし穴があるんだよ。気をつけな！」

そう言われたけど。

「世の中、おいしい話もあるんだよー」

って、樂觀していたの、昨日までは。それなのに、この状況

優しい社長は入院しちゃって、代わりに来たのはイケメンだけど  
仕事には厳しい人。

今までやったことのない仕事を押し付けられて、私のバイト生活  
はどーなっちゃうのお!?

## 第2話 イケメンⅡ インケン・メンス

「それで？ 千円でどんな仕事をしているわけ？ 部屋の掃除？ 在庫データも入力出来ず、シフト管理も出来ない。それで時給に見合ったを仕事してると思っているの？」

久我さんは冷たい視線を向け、私を一瞥する。

私は喉まで込み上げてきた気持ちをぐっと我慢して、頭を下げた。

「すみません。分からないので……教えてください」

膝の前で手のひらをぎゅっと握りしめる。

あんな言われ方して、悔しかった。だけど、もっと悔しいのは言い返せない私。

電話番して、雑用して、ご飯代まで出してもらって、それで時給千円。その甘い環境にどっぷりつかって甘えていた。確かに、私は時給に見合う仕事をしていたのかと聞かれれば、胸を張って答えることができない。

頭を下げたまま、私は久我さんの出方を待つ。

それなのに、何も言わずに床に見えていた久我さんの足は社長の机へと向きを変える。

えっ……、なにも言わないの？

その行動の意味を計りかねて、恐る恐る顔を上げると、久我さんは立ったまま何かを書いている。

私はどうしていいか分からなくて、首をかしげる。すると、何か書いてたメモを私の方に差し出した。

受け取っていいのか迷っていると、久我さんは私の机の上にそのメモを置いて、背中を向けながら言った。

「シフト票のやり方を書いたから、それ見てやって」

そう言ったつきり、また仕事を再開する久我さん。

私はそんな久我さんを呆然と見つめ、座ってメモに目を通す。そこには丁寧な文字でシフト票の攻略方が記されていた。

私はマウスを握り、メモに書かれている通りにファイルを開き、作業に取り掛かる。

カチ、カチ、カチ……

キーボードを打つ音と、時々めくれる紙の音だけが静寂した室内に響く。

夢中になってシフト票の四分の三ほどを入力し終えた頃、ふつと指を止めると、さつき喉まで込み上げてきたモノが急激に込み上げてくる。

うっ……

さつきは我慢できたのに。自分の不甲斐なさに涙が込み上げ、視界がぼやける。

やだ、こんなところで泣きたくない。たださえ、仕事ができないダメバイトだって久我さんに思われているのに、こんなところで泣いたら、呆れられる……そんなのは、嫌だ！

私は必死に涙をこらえて、シフト票の続きにとりかかったんだけど。

一度溢れたモノはそうそう簡単には止まらなくて、自分の意志を無視し、勝手にポロポロと涙がこぼれおちる。

どうにか泣いていることに気づかれないように、嗚咽を飲み込み、流れる涙を手の甲で拭う。どうせ久我さんは私の方なんか見ずに仕事に集中してる。声を押し殺せば、気付かれない自信はあった。

負けず嫌いだけど、ちょっとしたことですぐに泣いてしまうのは

私の悪いところだと思ってる。だけど、自分の意志とは関係なく込み上げてくるんだもの。どうしようもないでしょ。

「うっ……」

堪え切れなくて声が出て、慌てて口元に手を当てた。その時。

目の前に差し出された、ブルーのストライプのハンカチ。

見上げると、私の机の横に久我さんが立ってて、私から視線をそらしたその表情は、不愉快そうに眉間に深い皺を刻んでいた。

仕事ができない上に泣くなら、帰れ！

そんなことを言われるかと思ったのに……

「ここに、他の書類のやり方も書きました……さっきはすみませんでした、言いすぎました。確かに、長田さんの言う通り、やったことのない仕事をいきなりやれというのは無茶苦茶でした、反省しています」

そう言っ て頭を下げた久我さんの頬は僅かにピンク色で。

あんなに無茶苦茶なこと言っ て怖かったのに、そんな素直に謝られたら、私の方がどうしていいか分からなくなってしまう。

こんな風に謝れてしまうなんて、久我さんって大人なんだな  
そう実感した。

それがなんだか悔しくて

「で、どーなのよバイトは？」

大学の学食で昼食を食べながら、親友のミチルが聞く。

「どーもこーもないわよ……」

あの謝罪の後、久我さんも私も何事もなかったように仕事をして帰った。だけど……

「今までの仕事とはぜんぜん違うことやらされて、大変よー」

私はテーブルに突っ伏しながら言っつて、横を向いて窓から見える空を見つめる。空は、あの時久我さんが差し出したハンカチのように透き通るブルー。その色を思い出すと、なんだか胸がくすぐったくて。

「事務とは名ばかり。食材の発注から店舗との連絡係、在庫管理、従業員のシフト管理、給料計算、社長（代理）のスケジュール管理、事務所の掃除エトセトラ……なんでもやります、雑用係！ から経理、社長秘書！ ってカンジ？」

私は苦笑しながら言っつ。

「大変そうね」

「大変だよ……」

最初はやったことのない仕事を押し付けられて腹立たしかったけど、今はいろんな仕事をする事で、自分のスキルアップにもなるし、将来のことを考えるいい機会にもなっていると思う。

「ふーん、そう言う割には、顔がにやついてるけど？」

ミチルに言われて、慌てて顔を隠すように手のひらを頬にあてる。

「そんなことないよ。ほんとに大変なんだから。社長代理は、インケンだし……」

そう。あの謝罪の後、少しは優しくなったかと思っただら全然！

インケンなのは相変わらずで、ちょっとしたミスも目ざとく見つけてズタボロにけなされ……私の心は傷だらけよ。

「あんな奴、顔がいいだけで性格は最悪なんだから！」

「ふーん。じゃあ、そんなバイトはさっさとやめて、もっと割のいいバイトにすれば？」

「そつ、それは……」

「だって、食事つきに惹かれて始めたのに、社長代理になってから、食事出なくなっただってばやいてたじゃん？」

「それは……」

そーなのだ！ 社長代理になってから、食事代がでなくなっちゃっただよね……

私はなによりも食べることが好きで、“食事つき” その甘い誘惑に惹かれて始めたバイトだ。飲食店の事務っていうくらいだから、レストランの賄い食とかを期待していたんだけど、実態は、レストランと事務所の場所が離れてるからそんなことはなくて、食事の時間になると社長がポケットマネーでご飯代をくれて、お弁当を買いに行くのだ。それでも実家を出て一人暮らししてる貧乏学生にとっては食事代が出るだけありがたかったのだ。それなのに……

久我さんは食事代を出してくれないどころか、食事も摂らない人なんだよ！ ご飯食べないで平気なんて、ほんと信じられない！

仕方ないから私は、一人、自腹切って安いコンビニ弁当さ。

社長代理がインケン男の上に、食事代が出ないなんて、このバイ

トの魅力は半減だけど……私、社長のこと好きなんだよね。だから、社長が入院中に辞めるなんて、考えられない。早く社長がよくなることを祈って、社長が帰ってくるまで、絶対やめたりなんかしないんだから！

そう決心したのは今日の昼間だけど……

私、この仕事、続ける自信なくなって来ちゃった……

「聞いているんですか？」

ぴしゃんつと言いつ放った声に、びくりと体を震わせる。

「あつ、はい。聞いてます……」

そう言った私の声のトーンは下がりがくり。

「ここ、間違っているので訂正して下さい。それから、ここも、ここも。これはやり直し。ここはこの間、違つと言つたでしょ。何度も同じことを指摘させないで下さい」

すごい剣幕で、私の机の上に書類を置いていく久我さん。そのすべてが、私が今日のバイト時間をフルに使って仕上げた仕事でさつき、社長の机の“提出ボックス”に入れたばかりなのに……

私が入れると同時に、久我さんは作業していた手を止め素早く目を通し、私の机のどこまで来て、ミスを指摘し出したのだ。

「はい、わかりました……」

ぼそつと小さな声で返事をして、インケン……聞こえないくらい

の聲で囁いたのに。

「なんですか？」

ぴくりと米神を引きつらせ、久我さんが私を見つめる。その表情は極甘の眩しいほどの笑顔なんだけど、声は怒っているのがわかる。

「今、インケン……って言いました？」

ぴゃあっ。地獄耳……！

「今、地獄耳って思いましたね……？」

うつ……。私は体を縮込ませて目を閉じる。

なにかとんでもない反撃をされると思ったのに　久我さんの反応は予想外のものだった。

「はあー」

大きなため息をつく素早く席に戻り、てきぱきと仕事を片づけて行く。

「別にいいですけどね、あなたにどう思われようと」

呟くように言ったその言葉に、胸がちくりと痛む。

久我さん、怒っている時ってほんと分かりやすい。普段はちゃんと長田さんって名前で呼んでくれるのに、機嫌が悪いとあなたとか君とかなんだよね。

別にさ、私だって、久我さんと仲良しごっこがしたいわけじゃないけど、どうせなら、気持ち良く仕事したいじゃない？　一緒に事

務所で仕事するなら、仲良く、したいじゃない……

それなのに、いちいち言うことが嫌味くさいっていつか、ネチネチとインケンでさ。

なんなのよ、久我さんって……

### 第3話 シュガー×スパイス

土曜日は朝からバイトで、事務所に着くとまずはファックスを確認する。店舗から発注票が届いていれば、事務所にある食材を店舗に配送することになっているのだ。

この仕事は社長代理が来る前からやっていたことで、意外と楽しいんだ。

事務所には大型の業務用冷蔵庫が二台あって、その中にはこういう機会でもなければ見たり触ったりできないような食材が色々入っている。大きい食材もあって、その出し入れは力仕事だけど、飲食店のバイトってカンジがしてやりがいがある。

私は発注票と照らし合わせて漏れがないことを確認してからケースにしまい、入り口の近くに置いて、電話をかける。隣に運送会社があつて、そこで契約して食材を運んでもらっているの。

業者さんが取りに来るまで、デスクワークを片づけようと席に座つて、その時点でようやく、まだ久我さんが来てないことに気づく。めずらしいな、いつもは私より早く来ているのに。

そんなことを考えていると、開いたままの扉がノックされる。

「ちわー、集荷に来ましたー」

そうやって現れたのは、隣の運送会社でうちを担当する森垣君<sup>もりが</sup>、十九歳。彼とは同じ年ということ、バイトを始めてすぐに打ち解けて、こうして集荷で週に数回会って、親交を深めている。

「森垣君、おはよう」

「おはよう、葵生ちゃん。あれ、今日はあのイケメンの社長さんは

「？」

「んー、わかんない。まだ来てないんだ」

私は苦笑して答える。

「そーなんだ」

「今日は、コレをお願いします」

そう言っつて、さっきまとめた食材の入ったケースの前に立つ。森垣君は、持ってきていたカートにケースを乗せながら言っつ。

「了解しました。ねっ、ところでき……今日の夕飯、一緒に食べない？」

森垣君に夕食を誘われるのもだいたいいつものことで、時間さえあえば一緒に行くんだけど……

「あっ、今日はね……」

そう言っつて今日の夕方の予定を思いだし、自然と頬が緩んでしまっつ。

その時。森垣君の背後にすらっつと背が高く、黒い細身のパンツに青いシャツとベストを合わせた極上のイケメンが、扉にもたれかかっつてこっつちを見ていた。

「仕事中にナンパですか？ 集荷が終わっつたらさっつさとどいてくれないと、部屋に入れなんですけど？」

そう言っつた久我さんが、極上の笑みを浮かべている。

うっつ……怖い。

「おはようございます」

森垣君は久我の殺気に気づいてないのか、礼儀正しく挨拶をして、手早くケースを積むと脇によける。

「はい、おはよう」

言いながら久我さんは、すたすたと社長席に向かっていく。私はその姿を横目で見送り、こそつと、森垣君に耳打ちする。

「ごめんね。今日は予定があつて。また、今度行こ」

そう言つて、私はそそくさと席に戻る。久我さんの小言が始まる前に、さくさくと仕事をしなければ……

社長が入院してから、一週間。

どうにか、久我さんの無理難題な仕事内容と量には慣れてきたんだけど、久我さんには慣れないんだよね。

社長と二人きりの時は和気あいあいとした和やかな雰囲気だったのに、なんですか……久我さんと二人きりつて、沈黙が重い。私語厳禁、みたいに久我さんは要点以外は話さないし、話すと言えば小言が嫌味ばかり。

仕事は楽しいけど、この空気には未だに慣れない。

手を動かしながら、ちらりと視線を久我さんに向けると、たまたまこつちを見た久我さんと視線があつてしまった。

私が慌てて視線をそらすと、久我さんは大きなため息を一つ。

びくつ。これは始まる……

「なんですか、あなたは。ろくに仕事も出来もしないのに、ナンパなどされて浮かれて。仕事に集中出来ないのですたら、帰って頂い

て構いませんよ。そんな人に時給を払うだなんて、我が社の損益ですから」

ほらきた！　ねちねちインケンにいびるんだから……  
別に浮かれてなんかいないし、我が社の損益だなんて言い方……  
ひどすぎる。

はらわたが煮えくり返る思いだったけど、ぐっと言葉を飲み込んで無視を決め込む。

だって、言葉では久我さんに勝てないって、ここ一週間で学んだもの。言い返した瞬間は気分すつきりだけど、言い返すと、二倍三倍になって言葉の刃が飛んできて、私の心は修復不可能なくらいズタバ口にされるんだ……

だから、言い返さないことに決めたの。

それなのに……

「ふんっ」

って、鼻で笑うのよ!?

「言い返さないってことは、凶星ですか。それならば……」

久我さんが言いかけたけど、私の我慢は限界で。  
ばんっ！

立ち上がると同時に、思いっきり机を叩いた。

「わかりました……」

そう言った私を、なにが？　って顔で久我さんが見返してる。

「私、このバイト辞めます」

どんなにいびられたって、久我さんはそう言うだけの仕事もこなしているし、すごい立派な人だと思ってるから。

多少インケンで陰湿でも耐えてきたのに……なに？ ちよつと、ご飯に誘われたくらいで、ここまで言われなきゃならないの!?

仕事ができないのは認める。だから、仕事に関して怒られるのは我慢できるけど、なんでプライベートにまで口出されないといけないわけ!?

私は机の横に下げた鞆を掴み、一目散に扉に向かった、んだけど……

ぱしんっ!

入り口につく前に私の腕を、久我さんが勢いよく掴んだ。

「なんですか?」

振り返らずに、怒りにまかせて叫ぶ。その瞬間、ぎゅっと、掴まれた腕に力が込められて、眉間に皺を寄せる。

「痛っ、離して……」

久我さんは腕を離すでもなく、何か言うでもなく、そのまま黙り込んでしまった。しばらくして、掴まれた腕を離され、赤くなった手首をさする。

そのまま、事務所を出て行くこととしたんだけど……

「逃げるのか?」

そう言われて振り向くと、久我さんは無表情で、だけど怒りを宿した高圧的な瞳で、私を見据えている。

「なっ……」

その瞳に吸い込まれそうで、反論しかけた声を失う。

「本当のこと言われたくらいで、そうやって投げだすんですか、あなたは。そんなことをしては、いつまでたっても、一人前に仕事を出来るようにはなりませんよ」

私を見下す瞳が怖いのに、そらせなくて。

じつと私をしばらく見た後、くるりと背を向けた久我さんは席に戻り書類をより分けていく。

「まあ、あなたが辞めてくれる方が、我が社にとっては有益だ。どうぞ、ご自由に辞めてくれて結構」

そんな風に言われたら、言わずには言われなかった

「逃げないわよ。久我さんに一人前だって、辞めたら困るって言われるような仕事をしてみせるわよっ!」

夕方、都立病院の一室。

「社長! もう起き上がって大丈夫なんですか?」

「ああ、安静にしていれば問題ない。葵生ちゃんには迷惑かけたね」  
「いいえ、社長が入院したって聞いて、心配で心配で……」

そつと私の頭に触れて、優しく撫でてくれる社長に、涙が込み上げてくる。

「すまなかったね、葵生ちゃんには最初に連絡しなければならなかったのに、連絡が遅くなってしまって」

「いいえ、お元気そうな姿を見て安心しました」

昨晚、一通のメールが着たのだ。

アドレスを交換してても、滅多にメールをすることがなかった社長から、どこの病院に入院してるのか、心配をかけてすまない、事務所のことをよろしくという内容のメール。昨日で精密検査が終わり一般病棟に移ったので、携帯が使えるようになったらしい。

私はすぐに返信をして、今日の夕方病院にお見舞いに行つていいか聞いたのだ。

ベッドの横の椅子に座つて、社長が入院してから代理で来た久我さんのこと、事務所の様子など一週間にあったことを報告する。その話を聞いて、ベッドの背もたれに腰かけた社長が朗らかに大笑いした。

「はははっ、そうか、翔真とそんなことがあったか。あいつは、仕事熱心だが、人づきあいが苦手というか、物言いがはっきりしすぎて、付き合いくいだろう？」

「はい、それはもう……。だから、社長！ 早くよくなって、早く戻ってきてくださいよー！」

「ああ、葵生ちゃんにそんな心配そうな顔をさせるのは辛いからね。

今回は検査入院も兼ねてるから入院が長引いたが、来週には退院できると思つよ」

その言葉に、ほつと安堵の息をつく。そんな私を見て、社長は目を柔らかくして微笑む。

「どうだ、翔真は君に優しくしてくれてるかな？」

私はゴクリと唾を飲み込み、膝の上に組んだ手をぎゅっと握りしめる。

「優しくなんか……ぜんぜんないです。口を開けばお小言ばかり、インケンで嫌味なんです！ でも……尊敬できる人だとは、思いません」

「そうか。これからも、息子と仲良くしてくれよ」

にこりと微笑む社長が眩しいくらい良い顔してるから 嫌です、なんて言えなかった。

閑話 ため息の帳

お見舞いが済み、葵生が病室を出てから一時間後。  
社長の入院している病室で

翔真「なんですか、にやにやと締りのない顔をして」

社長「ん？ 見舞いで頂いた花を見てたんだよ」

翔真「また、仕事関係者の見舞いですか？ ちゃんと安静にしてないと、入院が長引きますよ」

社長「違う、違う、葵生ちゃんからだよ。今日、見舞いに来てくれたんだ」

銀司に背を向けていた翔真はぱつと振り返って、微妙な表情で銀司を見つめる。

社長「葵生ちゃんは、よく気のきく子だろう？ 仕事も熱心だし」  
翔真「まあ、仕事に向き合う姿勢は立派ですね。でも細かいミスが多いし、集中力が切れると、再び集中するのに時間がかかって……  
正直、今はあまり使えませぬね」

翔真の言葉に、はあーっと大きなため息をつき、額に手を当てる銀司。

社長「全く、お前は……」

言いながら、首を左右に振る。

社長「そんなんじゃない、好きな子に“好き”って言っても、信じてもらえないぞ？」

翔真「なっ……………」

真っ赤になって、瞠目する翔真。

社長「好きな子にはもっと優しくしてやらなければ、気持ちは伝わらない。全く、仕事熱心なのはいいが、そんなんじゃない恋人の一人もできないだろうに……………。葵生ちゃんはお前みたいに優しくない男はタイプじゃないそうだぞ？」

呆れた様なため息をつく銀司に、身を固くする翔真。

（全く、この人は……………どうして、そう痛いところを突くのだろうか……………）

翔真は病室の窓から漆黒の夜空を見上げ、そっと溜息をもらした。

閑話 ため息の帳（後書き）

シナリオ風、社長と翔真の二コマでした。

社長がいた頃は、ご飯の時間になると「はい」ってポケットマネーからご飯代を出してくれて、社長と自分の分のお弁当を買ってきていた。駅前のお弁当屋さんで買ったり、飲食店の前に出てる弁当販売で買ったり、時には美味しい出前を取ったり。

貧乏学生の分際では食べることもないような値段（と美味しさ）のお弁当を買う時もあったんだけど……それも九日前までの話。

社長代理になってから、食事代なんか出ないし。それどころか、久我さんは食事すら摂らない。仕方ないから私は、自腹切って安いコンビニ弁当またはおにぎりだけの日々。

親元を離れて一人暮らしして、大学の授業料も払って……貧乏学生には、満腹に食事にあてるお金もないんですよ。

だから惹かれた“食事つき”のバイトだったのに……  
はあー。

思わず大きなため息が出てしまい、久我さんに聞き咎められる。

「なんですか、集中力が切れましたか？ ……ああ、もうこんな時間か。少し、休憩してはどうですか？」

時計の針は昼の十二時を少し過ぎたと。

「いえ、休憩はいいです……」

私は覇気のない声で言う。休憩なんてとつたら、余計にご飯のこと考えちゃいそうで、やばいんだよ。

なんて言っても、月末給料日前。ここ数日、お米くらいしか食べ

てなかったのに、そのお米も底をつき……今日は朝から何も食べていない。

「休憩くらい取っていいですよ。いくら僕でも、休憩取ったくらいで怒らないですから」

久我さんがなんか的外れなこと言っていたけど、いつもだったらカチンとくる嫌味も右から左に素通りしていく。あまりにお腹が空きすぎて……そう思った時。

ググウ~~~~~

自分のお腹から出たとは信じられない様なすごい音に唾然とし、慌ててお腹に手を当てる。

キュルキュルキュル~~~~~

鳴り続けるお腹に、顔がどんどん赤くなっていくのが分かった。久我さんは、一瞬何の音か分からない様に首を傾げ、原因に思い当って、惚けた顔で私を見つめる。

「長田さん……？　もしかして、お腹空いているの？」

ただただ驚いたように私を見つめる久我さんに、私は渋々頷いた。

「はい……」

「いいよ、お昼休憩にしな？」

「いえ……その……」

説明するべきかどうか迷って、口をつぐむ。

こんな盛太にお腹の音を披露して、お金がなくてご飯が買えないんです　なんて、たかってるようにしか聞こえないよね……

どうしよう……言ったら絶対、鼻で笑うような人よ、この人は。そうこう悩んで黙り込んでいます。

「長田さん？」

その声にはっと顔を上げると、妖しく麗しい天使の笑顔の久我さん。でも声が威圧的で、ぶるりと背中を震わせる。

言いなさい 高圧的な視線に、蛇に睨まれた蛙のように縮みあがって、私は早口で説明する。

「あの、普段はご飯代を社長に出して頂いてて、それを当てにして先月の給料はすべて授業料にあててしまつて、その上お米も尽きてしまつて……ご飯を買うお金もないんですう……」

はぁー。

今度は、久我さんが大きなため息をつく。

「“ご飯つき”の条件のことですね、社長から伺っています。社長が入院してからの九日分は、一日五百円で給料と一緒に食事手当として出します。今日はとりあえず、これで何か買ってきなさい」

そう言つて久我さんが、明らかに私物と分かる財布から野口さんを一人、差し出した。

「えっ、あの……」

受け取つていいのか躊躇っていると。

「僕は普段食事を摂らないので、長田さんの食事情に気づけず、すみませんでした。これで好きな物を買つてきなさい。あっ、僕の方は結構ですからね」

私は道路をとぼとぼと歩きながら、久我さんから頂いた千円札を握り締める。駅前のおいしいお弁当屋さんに行こうかとも思ったけど、やめて、近くのコンビニに入る。

結局、私はおにぎりを一つだけ買って、お釣りを社長の机の上にそっと置いた。

仕事をしていた久我さんが、ぱつと顔を上げて、置かれたお釣りと私の顔を数度見比べる。

「何を買ったんですか？」

「えっ……と、おにぎりを……」

「遠慮せずに、もっとましな物を食べなさい」

ましな物……私はその単語を口の中で反芻して。

「いえ、これで十分なので。お金、貸して頂いてありがとうございます。お給料が入った暁にはきっちり返しますので」

そう言っただけで自分の席に戻ったんだけど、久我さんは立ちあがって、目を見開いて呆然と机を見つめている。不自然な行動に首を傾げると。

「僕からの施しを受けないと……？」

その声は静かな怒りを表している

私が口を開いて何か言う前に、久我さんはさっさと事務所を出て行ってしまった。

いつもいつも、久我さんの怒りポイントは私には理解できなくてだから追いかけるなんてことは思いつかず、そのうち帰って来るだろうと楽観的に考えて、おにぎりを頬張った。

空きっ腹にお米が沁みて、胃がジクジクする。

久我さんがいないだけで事務所の空気は清々しくて、昨日のお昼ぶりに食べた食事にお腹も満たされて、いつも以上に仕事のペースがはかどる。

机の上に置かれた山積みの書類が半分程に減った頃、久我さんが両手いっぱいスーパーのビニール袋を下げて戻ってきた。

「おかえりなさい、久我さん」

なんでスーパーの袋を持つてるのか疑問にも思わず、出て行った時に怒ってた事も忘れ、私は普通に声をかけた。

久我さんは何も言わずに私を一瞥するとキッチンに向かい、ガサゴソと何かを始めた。私はそれさえも気にならず、パソコンに向かい続ける。今日はなんだか調子が良くて、やっつけた書類を提出ボックスに入れ、机の上に残った書類　整理を頼まれたものを抱えて、棚に向かう。業者への発注伝票を日付ごとに並べ、業者ごとのファイルに入れて棚に戻していく。

しばらくして、キッチンからクリーミーな良い香りがして、ぐうぐうと小さく腹の虫が鳴った。

この事務所は、神田駅近くの商業ビルのワンフロアをいくつかの会社で間借りし、そのワンルームを事務所としている。室内にはキッチンが設備され、広々の二十坪。従業員が二人だけにしては広すぎるが、業務用の冷蔵庫二台がかなりの場所をとり、それ以外にも書類の入った棚がたくさんあって、広すぎるということにはなかった。

で、キッチン設備があるにも関わらず、私と社長は今まで一度も使ったことがない。時々シェフが来て試作品を作るらしいから、調理器具は揃っているものの、立ち入ることはなかった。その場所から良い匂いが漂ってきて、私の足はふらふらと導かれるようにキッチンに向かった。

久我さんはどこから取り出したのか、デニム地のブルーのエプロンを身につけ、何やら調理をしている様子。

そおーっと後ろから覗き込むと、コンロにかけられた鍋には白い液体がふつふつと湯気を出し、久我さんはそれをお玉で丁寧にかき混ぜている。

何作ってるんだろう……？

自然な疑問が湧いてくる。私といる時に、久我さんが食事を摂ったことは一度もない。だから、久我さんが食べるために作ってるという発想はなく、なんのために作っているのが疑問だった。

カチッと、コンロの火を止めると、どこから取り出したのか、フランスパンを切りトースターで焼き、皿に並べたその上に何かを乗せて、よそった白い液体と共に、キッチン横にあるダイニングテー

ブルにカタンと置く。

「どうぞ」

言いながらダイニングテーブルに手をついた久我さんは、得意満面の顔でふつと笑った。

えっと、私にどうしろと……

その行動の意味がわからなくて、私はおろおろとその場に踏みとどまる。その瞬間、久我さんの顔から笑顔が消え、すつと瞳に鋭い輝きが走る。

あまりに怖い表情にびくりと体を震わせ、ダイニングテーブルに近づくと、久我さんが椅子を引いたので、促されるまま席に座る。目の前には、パンとスूपカップに入った白い液体。

「どうぞ、召し上げれ」

その言葉でやっと、食べるってことだとは分かったんだけど……今はもうすぐ二時になるうとしている。小腹は空いてるけど、さっきお昼ご飯食べたばかりだし。そう思っただけ戸惑いがちにスプーンを握る。ちらつと横に立った久我さんに視線を向けると、じーっと、私の動作を一つも漏らさない様な鋭い視線で見つめられてて、慌てて白い液体を一口すくって口に運ぶ。

口の中でふわ〜つと広がる磯の薫り。一センチ角に切られた野菜が、ほくほくと口の中を転がっていく。

「わっ、おいしい……」

思わず言ってしまった、はっと口を押さえる。恐る恐る久我さんに視線を向けると、天使の様に美しくキラキラと輝く微笑みを浮かべていて、心臓が飛び出しそうなほどビックリした。

耳から零れるさらさらの蜂蜜色の髪が、よけいに久我さんの美しさを倍増させ、その笑顔が眩しすぎて目をそらす。

「これ……シチューじゃないですよね？」

話をそらすように白い液体を口に運びながら尋ねる。

「シチューじゃなくて、クラムチャウダーですよ」

「へえー、クラムチャウダー。なんかお洒落な名前……あつ、アサリまで入ってるんですね」

そう言った私の横で、はぁーっと盛大なため息とともに額に手を当ててうなだれる久我さんに視線を向ける。

なつ、なんのため息……？

床からわずかに顔を上げた久我さんと私の視線が合つと、久我さんはもう一度大きなため息をつくとともに、首を左右に振って腰に手を当てて肩を落とした。

「あさりが入っていて当然ですよ……。 “クラム”イコール“二枚貝”、つまりアサリやハマグリのことなんですから。アサリが入ってなければ、ただのチャウダーです」

いかにも呆れたというため息に苛立つよりも、自分の知識のなさに恥ずかしくなる。

「そんなんですか……」

ぱくりともう一口頬張って、スプーンを机に置き、私が食べている間、ずっと横で立ったままの久我さんを見上げる。

「あの、久我さんって、お料理とてもお上手なんですね。でも、どうしていきなり料理なんて始めたんですか？」

食べる前から思ってた疑問をぶつける。

すると久我さんはじーっと私の顔をしばらく見てから、こう言ったの。

「君が食事代をお金では受け取れないというから、作ったんだ」

へっ？ そんなこと、私、言っただけ？

「さっき僕が食事代を渡したのは、貸したわけじゃない」

ひょっとしなくても、久我さん……何か怒ってる？

「“これで買ってきなさい”って渡したんだ。それなのに、たったおにぎり一つだけしか買わずに、お金は後日返すだって？ そんなに君は……」

もしかしてあのお金は、貸すつもりじゃなくて、普通に“おごって”くれるつもりで……？

ぶつぶつ嫌味を言い続ける久我さんに、私は深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

いつもインケンだから、お金もただ貸してくれただけだと思ったのに、違かったんだ……

そのことに久我さんの優しさを感じて、私はお礼を言った。

「これからバイトの時は、長田さんの食事は僕が作るよ」

しばらく黙りこんでいた久我さんが、ぽつりと言い、その言葉に私はぽつと顔を上げる。

「ほつ、ほんとうですか……？」

“作ってくれる”という言葉に本当にびっくりしたから。それに久我さんの作ったクラムチャウダーはめっちゃくちゃ美味しくて、料理上手なのはすぐに分かった。こんなに美味しいご飯をバイトに来る度に味わえるなんて、夢のような幸せ……

“食事つき”の条件が消えて、このバイトに魅力をなくしかけていたけど、久我さんの美味しい手料理が食べられるなんて……

ごくりと唾を飲み込んで久我さんを見つめれば、いつもの厭味つたらしい笑いでもなく、天使の様な眩しすぎる笑顔でもなく、ほんのりと頬を染めた柔らかい笑みを浮かべていて、胸の奥がきゅっと驚掴みにされた

「どうしたのよ、機嫌いいじゃない？」

ミチルに言われ、何のことか分からずに首をかしげる。

「そうかな？」

「そうだよ、昨日のお昼は『お金ないから奢ってえ〜！』って言って泣きついてきたのに、どうしたのよ？ まだ給料日前だから、金欠なのは継続中なんでしょ？」

「実は……バイトの“食事つき”の条件が復活したの！」

私は拳を握りしめて、力強く言った。

「えっ？ 復活？」

その言葉にミチルは、眉根を寄せて私をみつめた。

「うん。あのインケン社長代理がね、手料理作ってくれたの、昨日。それでこれからも時間があれば社長代理が作ってくれるって言うの！ しかも、その料理がプロ並みにめっちゃう美味しくてね」

ほくほくとした笑顔で言った私をより一層眉間の皺を深くして、胡散臭いものでも見た様な顔になるミチル。

「ちょっと……数日前まではあんなバイト辞めるって言ったのに、いのように胃袋掴まれてるんじゃないの、そのインケン社長代理に？」

「えっ、そんなことないよ？ それに、社長は明日には退院するし、社長代理ももうしばらくの間だけでしょ」

そう思ったのに、私の苦難のバイト生活がまだまだ続くとは、この時の私は気づくすべもなく。

楽観主義の私は『今度は久我さん何作ってくれるのかなあ』とかご飯に想像をめぐらせ締りのない頬をして、ミチルにつねられることになる。



第6話　　ハニートースト　　1

社長が退院した翌日、今日から社長が復帰だと思つたと気分は浮かれ、遅刻しかけていたことも忘れてるんと鼻歌交じりにスキップして、事務所の入り口をくぐつた。

「社長、おつはよーございまーす！」

元気一杯に挨拶した私は、部屋の奥、社長席に座つて眉根に深い皺を刻んだ顔に睨まれて、その動きをびたりと止める。

だつて、社長が座っていると思つた席には　　久我さんが座つて、すごい機嫌の悪い顔でこっちを睨んでいるんだもの。

ギロツと私を一瞥した久我さんは立ち上がり、机の端に置いていた山積みの書類を抱えると、ドサツと私の机の上に置いて席に戻つて行つた。

えつと……、確か、今日から社長復帰するはずじゃ……

そう聞きたかつたけど、あまりの機嫌の悪さに、今は聞いてはいけないと本能で悟つた私は、口を開かずにタイムカードを押し、慌てて席について今日の仕事に取り掛かつた。

一旦仕事に集中し出すと、社長じゃなくてなんで久我さんが……とかいう考えも忘れて、目の前の作業に没頭する。

机の左側に山積みされた書類が半分くらいに減つた時、書類越しに見えた社長席に久我さんがいないことに気づく。

時々、久我さんは外回りに行くため事務所を開ける。その時、一応私に声をかけるらしいんだけど、集中している時の私にはその声

が届かないらしい。椅子から少し腰を浮かせて書類の向こう側を除きこむと、小さなメモ書きが置かれ、そこに外回りに行ってくる旨が書かれていた。

私はそのメモを机の真ん中の引き出しから取り出したクリアファイルにしまい、引き出しに戻す。ただの連絡事項だけど、なんとなく捨てられなくて、取っておいてしまっている。

壁にかけられた時計に視線を向けると五時を過ぎていて、お腹の虫がきゅるきゅると小さな悲鳴を上げ始めた。

今日のバイトは十三時から十九時までで、食事は出ない日だ。おまけに給料日前であまりちゃんとしたご飯を食べなくて、今日の朝兼お昼ご飯は、友達にもらったパンを食べるはずだったのに……不手際で食べ損ね、今日はまだ何も食べていなかった。

私は背伸びしながら立ち上がり社長席に近づくと、キョロキョロと辺りに視線をさまよわせる。久我さんはまだ帰ってこないよね。そう扉に向けた視線を、社長の机の上に移動させる。

社長の机は私の机より一回り大きく、その上には、例の“提出ボックス”以外にもさまざまな物が置かれている。その中央、グラスに入ったチョコレートに手を伸ばす。

社長は血糖値を気にしているからチョコなんて食べないだろうし、たぶんこれは久我さんが持ってきたものなんだと思う。一センチ大の丸いチョコが銀紙に包まれ左右を縛られてリボン形になっている。その一つを掴み、銀紙を開いて口に放り込む。

一個くらいわからないよね。という気持ちと、ほんととはこんなことダメだけど。という気持ちの狭間で、空腹を訴える腹の虫に負けてしまった。

舌の上で丁寧にチョコを転がし、噛まずにゆっくりと味わう。ふわっと甘やかな香りが口中に広がり、幸せな気分になる。その味はお徳用パックのチョコではなく、とても高級なチョコの味がして、思わず、ゴクリと飲み込んでしまった。

もしかして、久我さんって

甘党？

そんな疑問が頭をよぎり、すぐさま否定するように頭をふる。

最近では、私のご飯を作るついでに　　というか一人分作るのも二人分作るのも同じという久我さん理論で、久我さんの手料理と一緒に食べるようになったが、それ以前は昼も夜もご飯を食べている姿を見たことのない久我さんから、甘党というイメージはしっくりこなかった。

貧乏だから仕方なく、ご飯を抜いたり少量で我慢してるけど、ちゃんと食べられるなら食べたいと思うし、出された物は残さず食べるというポリシーを持った、私は食べるのが大好きな人間。

それに対して久我さんは、貧乏だから食べてない　　ってことはないと思う。でも、だからといって、年頃の乙女みたいにダイエットな訳ないし、空腹でお腹を鳴らしたりふらつく姿も見ることがない。思うに……久我さんの空腹中枢は麻痺してるのじゃないかしら。そんなことを考えながら、集中力の切れた私は鈍ったタイピングをしてなかなか仕事が進まない。

しばらくして、バサバサっという音に入り口を振り返ると久我さんがいた。

「ただいま戻りました。長田さん、タオル取ってもらえますか？」

そう言った久我さんの服は肩とズボンが濡れ、髪の毛からは水が滴っている。手に持っていた傘を入り口の傘立てに入れた久我さんに、私は棚から取り出したタオルを持って駆けつける。

「どうしたんですか？」

びしょびしょの姿で雨が降ってきたことは分かったけど、あまりに尋常じゃない濡れ方に思わず聞いてしまった。

タオルで、蜂蜜色の髪を拭きながら久我さんは、少し掠れた声で言う。

「季節外れの台風が近づいて来てるっていうニュース見てないですか？ どうやら予想外に早く関東に接近してるようで、外はすごい風と雨ですよ」

えっ………台風？

最近、課題が忙しくてあまりテレビ見てなかったから、台風が近づいてるなんて知らなかった。だから傘も持ってきてないし………つて、それよりも私には気がかりなことがある。

「まだ早いですが、今日はもう事務所も閉めましょう。大丈夫だとは思いますが、電車が止まったら困りますからね」

そう言った久我さんから離れ、鞆から取り出した携帯で乗り換え案内の情報を見た私は、顔が真っ青

「もう、遅いです………」

ぼつりと漏らした私の言葉に、久我さんがえっ？ と聞き返す。

「もう止まってるんです、電車………」

半泣きになって、久我さんを見つめる。

私ที่บ้านに帰るために乗る電車・京葉線は、海岸沿いを走るから風に非常に弱い。ちょっとした風でも間引き運転・一部区間運転見合わせるのだ。現に、手元の携帯の画面に真っ赤な文字で武蔵野線運転見合わせと書かれている。これでは家に帰れない………

呆然自失の私に近づいた久我さんは、携帯を除きこみ、顎に手を当てて考え込む。

どうしよう………明日提出の課題をやらなきゃいけないから、どう

しても家に帰らないといけないのに、他の電車で帰ることは難しい。家に帰れないなら

「あの、私、事務所に泊らせて頂いてもいいですか？」

「事務所に？」

「はい、あの、実は明日提出の課題をやらなければならなくて、パソコンを使いたいんです。家には帰れそうにもないので……」

私はダメもとで、手を握りしめて言ったのだけど。

「事務所には……泊らせる訳にはいかないな……」

久我さんは眉間に皺を寄せた、少し張りつめた空気を漂わせて言った。

「やっぱり、そうよね。でも、駅前のネットカフェに行くにもお金がないし、そう思った時。」

「女の子を一人で泊らせるなんて、心配で出来ないな。」

「思いもよらない久我さんの言葉に、ぱっと顔を上げて久我さんを見上げる。」

「えっ……？」

久我さんの声はいつもの皮肉気な声ではなく、本当に心配そうな声だったから。

「あのさ……」

「はいっ!?!?」

あまり聞いたことのない声に、ドキリとして、慌てて返事をする。

「それなら僕の部屋に来る？ 浜松町だからここからそんなに遠くないし、明日は学校まで車で送って行くよ？」

ふわりと微笑んだ久我さんは紳士的で、思わずその表情に見とれてしまう。

「ゲストルームがあるから、課題が終わったらそこで休んだらいいよ。俺もその方が安心だから」

そう言われて私は 思わず頷いていた。

## 第7話　　ハニートースト　2

「そうと決まれば、どこかで夕飯食べてから帰ろうか。長田さんは何が食べたいですか？」

言いながら社長席へ行き、荷物をまとめ出した久我さん。

はっと、我に返った私は、とんでもないことになってしまったと、その時気づく

久我さんの　　男性の家に一晩泊るなんて。

僕の部屋に来る？　　そう言った時の久我さんが、あまりにも紳士的で、思わず頷いてしまったけど、とんでもなく大胆なことをしようとしているのでは　　！？

だけど戸惑っている暇もなく、いつものインケンな口調で急かされて私は、手早くやりかけの仕事を切り上げ、荷物をまとめて、入り口で待つ久我さんの元に向かった。

神田駅高架下のレストランで早めの夕食を済ませ、電車で揺られて浜松町へ。

浜松町　　汐留ですか！？

久我さん、なんてリッチなところに住んでるんですか！？

案内されたのは、駅から徒歩二分　　ううん、駅前って言っている場所に建った見上げるほど高い高層マンションの一室。玄関を入り廊下を進むと、広々としたリビングにはアイランドキッチンがある。家具はごく最低限しか置かれていなくて、生活感が感じられないほど綺麗だった。

「適当にくつろいでいて」

そう言われて、リビングのソファアの置かれた場所のさらに奥の窓辺による。窓には激しく雨が打ち付け、あらゆる漆黒の闇が広がっている。

天気が良かったら、きつと夜景が綺麗なんだろうなあ……

そんなことを考えつつ、頭の片隅で、この雨風ではどうあがいても今日は家に帰ることができないと確信して、ため息をつく。

夕飯を食べたので、時刻は十九時四十分。今から課題をやるなら夜中までには終わるかな……。不幸中の幸いだったのは、課題の資料を持っていたから、家じゃなくても出来るということ。

久我さんは隣の部屋から持て来たノートパソコンをダイニングテーブルの上に置き、起動させていた。ダイニングテーブルはお洒落な黒塗りの二人掛け。久我さんに呼ばれて、窓辺からダイニングテーブルに向かう。

「このパソコンを使って下さい」

「ありがとうございます」

そう言った私の横で、久我さんがさりげなくパソコンの置かれた席の椅子を引いた。私は促されるままその椅子の前に行き、久我さんが座らせてくれた。

その好意がなんだか照れ臭くて、久我さんの顔が見られなかった。雑念を払うように顔を思いつき左右に振って、私は、目の前のパソコンに向かった。

しばらくして、カタツツと音がして顔を上げると、久我さんがミニノートパソコンをダイニングテーブルに置き、私の向かいの席に座った。その様子を呆然と見つめていると。

「僕のことは気にしなくていいですから、課題を続けて下さい」

そう言われて、口から出かかった言葉を飲み込む。

一人暮らしでノートパソコンを二台も持っていることが、まず驚きだった。仕事で見かける書類を見つめつつパソコンに向かう久我さん。明らかに仕事をしているのはわかるのに、私の方が画面の大きなパソコンを使って申し訳ないと思って　久我さんが使ってるミニノートパソコンが、普段事務所でも使っているものだと気づいて、何も言えなくなってしまった。

私は再び課題に集中するべく、目の前のパソコン以外を視界と思考から断ち切った

「終わったあー！」

もうすぐ日付が変わろうとしている時刻。やっと課題が終わって、雄たけびを上げた。

「お疲れ様です。どうしますか、すぐに寝ますか？　お風呂も使いたければ使ってくださいですよ？」

「久我さんはまだ寝ないんですか？」

「僕はもう少し、切りのいいところまでやるつもりです。長田さんは先に休んでいて結構ですよ」

そう言われて、どうしようかと考える。着替えはないけど、入れるならお風呂は入りたい。でもでも、年頃の娘が男性の部屋でお風呂を借りるって　どうなの!？

そんな葛藤を頭の中で繰り広げると

ぐう~~~~~きゅるきゅるきゅるう……

私にとって一番の欲求である腹の虫が、猛烈な叫びを上げた。あまりの恥ずかしさに、私はぱっとお腹に手を当てて縮こまる。

「もしかして、お腹すいたの？」

当然の反応といえば、そうなんだけど、久我さんが目を見開いてほんとに驚いた顔をしてるから、余計に恥ずかしい。

「すつ、すみません。今日は朝も昼も食べてなくてっ」

慌てて言い訳して、ぺこぺこ頭を下げる。あっ、穴があったら入りたいっ。

絶対久我さんは呆れた顔してる、そう思ったのに。

「じゃあ、何か食べる？」

予想外のことを言われ、きょとんと見返してしまっ。

「お腹すいてるなら、何か作るよ？」

そう言っただけだとパソコンの画面を閉じた久我さんは、キツチンに向かっていく。慌ててその後を追いかけたら、急に立ち止まった久我さんの背中にドンっどぶつかってしまった。

「大丈夫ですか、長田さん？何が食べたいですか？」

くるりと振り返った久我さんに真上から覗きこまれて、なんだか恥ずかしくなる。久我さんの瞳の中に写ってる自分が見えるくらい距離で、しばらく見つめてくる久我さん。

何が食べたいか　　そう聞かれて、朝から食べたかったアレを思い出したんだけど　　その瞬間。  
ふわっ。

久我さんに覆いかぶさるように抱きしめられ、思考回路がテンパる。

なっ、なっ、なにになになに　　!?

急になにい　　!?

体を硬直させ、久我さんの出方を待っていると、さらりと耳元に久我さんの髪が当たり、唇が触れる

イヤあ　　っ

「長田さん、さ　　」

耳元で囁かれた声は、いつもインケンな久我さんからは想像できなくらい艶っぽく、ほんとに久我さん!?!　　って思っくらい甘く響いて、体中、毒がまわったように痺れが走る。

「はっ、はい!?!」

ドギマギして、声が裏返ってしまっ。

「いい匂いするね。甘くて　　食べちゃいたくなるな」

そう言っって、耳元から顔の正面に移動した久我さんが、ふわりと笑う。その瞳は、獲物を狙う獣のように鋭く、魅惑的な笑みで真っ正面から見据えられ……かぁーっと自分でも分かるくらい顔が真っ赤になっっていく。

「あっ、あの……」

今にも噛みつかれそうで、私はどうしたら久我さんの行動を止められるか頭をフル回転で考えたんだけど、何も思いつかなくて。

どんとどんと、久我さんの顔が迫って来て、私はぎゅっと目を瞑った

第8話　ハニートースト　3

「やっぱり、蜂蜜だ」

その声に、噛みつかれると思ってぎゅっと瞑ってた目を恐る恐る開ける。

息も掛かりそうなほど間近にあった久我さんの顔は普通の距離になつてて、久我さんは私の髪の毛を一房掴んで、にこりと笑っていた。

> i 2 5 1 5 7 | 3 2 8 5 <

「どうしたんですか、これ？」

そう聞かれても、さっきまでの行動に思考が囚われ、固まったようにただただ久我さんを見つめた。

さっきの久我さんはなんだったの　！？

いつものインケンなカンジでも、不機嫌な時に出る極甘な笑顔で

もなく、妖しく艶めかしい微笑みで

ドクンッ、ドクンッ　　って聞こえてしまっんじゃないかってくらいい臓の音が大きく耳に響く。

「長田さん？」

呆然としてる私の目の前に、久我さんの手が翳されて、はっと我に返る。

「えっ、わっ……」

「……、髪の毛に蜂蜜ついてるみたいだけど、どうしたんですか？」

さっきの妖艶な久我さんはどこへやら、いつもの久我さんに戻ってて、目を瞬かせる。

「えっ、蜂蜜……？」

蜂蜜　　その言葉に、思わず久我さんの髪の毛を見てしまう。部屋に着いた時は僅かに濡れて透けるようにキラキラと輝いていた蜂蜜色の髪はすっかり乾き、さらさらと顔の横を揺れている。

「あっ、あのですね　　」

やっと思考が正常に機能し始め、今朝の出来事を思い出して話す。

「お米がないって言ったら友達が食パンをくれて、ハニートーストが食べたくなっただんです」

「ハニートースト、ってあの一斤まるごと使って上にアイスとか生クリームとかが乗ってる　　？」

「はいっ　　」

私はハニートーストを想像し、うつとりと瞳を細める。

「それで、上に蜂蜜をかけようと思ったんですけど、すっかり冷蔵してカチコチに固まってしまった」

蜂蜜つて、冷蔵保存っばいけど実は常温保存なんだよね。だから冷蔵庫に入れた日には、カチコチに固まって押しても叩いても出てこないんだ……

「ああ……」

固まった蜂蜜を想像したのか、久我さんが苦笑する。

「でも、どうしてもハニートーストが食べたくて、仕方なく鍋で火をかけて湯せんしたんです。蜂蜜はちゃんと溶けたんですけど……容器がもろくて鍋の中で爆発して……あちこちに蜂蜜をぶちまけてしまつて……きつとその時についたんだと思います」

「なるほど、よく見ると服にもついてるし……」

言いながら久我さんは私の腕を掴んで上に向け、肘が久我さんの顔に近づき　ペロリ、肘をなめられてしまった

「肘にもついてる。んー、甘い」

恥ずかしがりもせず、さらりとやってのけた久我さんを呆然と見つめつつ、私はある確信を抱く

「久我さんって実は　甘党なんですな」

「ああ、そうだね。よく、わかりましたね」

首を傾げてにこりと笑った久我さんはキッチンに向かう。

「じゃ、夜食はハニートーストで決まりだね」

そう言っつて冷蔵庫を開ける久我さんの後ろ姿を見て　私は確信する。

久我さんつて普段は真面目くさいのに、実は　遊び人なんだ！  
だつて、抱きしめられて、あんな妖しい瞳で見つめて、耳元で息かけられて、食べちゃいたいとか言っつておいた後で　すごく普通に接してきて、普段遊び慣れてないとあんな変貌ぶりはできないはずよ！

そうよ、あんなことを言っつたのも私をからかって　なんてインケンなの！

私はぎゅつと締め付けられる胸を押さえて、心の中で悪態をついた。

その後、食パンを前にあーでもないこーでもないと四苦八苦する久我さんに、私がハニートーストの作り方を伝授し、二人で美味しく頂いて、時刻は深夜二時を過ぎていた。

食べたすぐ後に寝るのもどうかと思っただけど、明日は　もう今日だけど、一限から講義があるから、少しでも多く寝るために、案内されたゲストルームのベッドに入った。

翌朝。

身支度を整えてゲストルームを出ると、ダイニングテーブルの上には美味しそうな朝ごはんが用意されていた。

色とりどりのグリーンサラダ、オムレツ、トースト、ミネストローネ……

「簡単な物しか作ってないですけど、どうぞ」

久我さんは謙遜して言うけど、豪華な朝食に、数時間前にハニートーストを食べたばかりなのに腹の虫が暴れ出す。

「泊めて頂いた上に、朝食まで用意させてしまって、すみません……」

そう言いながらも、すでに席に座ってサラダを頼張る私を見て、久我さんがくすつと笑う。

「いいですよ、長田さんはよく食べるところがいいところですから」

えっと、それは褒め言葉ですか……？

「はあ……」

「食べたら学校まで送りますからね、支度ができたら声をかけて下さい」

私より先に朝食を食べ終えた久我さんは、空になった皿をキッチンに戻しながら言って、寝室に消えて行った。

私は久我さんの手作り朝食を味わって食べ、キッチンに皿を運ぶ時計を見るとまだ時間に余裕があったから、朝食を作ってもらったお礼として皿洗いをすることにした。

久しぶりに朝からちゃんとした物を食べて気分が良くて、鼻歌交

じりにお皿洗いをしていると、久我さんが寢室から出てきたから、私は慌てて最後の一枚の泡を落とし、食器乾燥機に皿を置いた。

「すみません、お待たせしました」

そう言った私を見て、久我さんがふつと甘やかな笑みを浮かべた。あまりに綺麗な顔に驚いて瞬いた。次の瞬間には、久我さんは普段の澄ました顔で玄関に向かって歩き出していた。

だからその笑みは見間違えだと思って、すぐに久我さんの後を追った。

学校に向かう車の中。男性の誰かが運転する車の助手席に乗ること自体初めてで、異常に緊張してしまい、視線のやり場に困る。胸元にあたるシートベルトを握りしめて、早く学校に着いてほしいと願う。

久我さんはそんな私の緊張に気づいていないようで、時々世間話を振ってくるから、私はそれにただ相槌を返すのがやっとだった。

「いつてらっしやい」

駅から学校に向かう通りで降ろしてもらった私に、久我さんがわざわざ車から降りてきてそう言った。

「はい。本当にいろいろとお世話になりました」

一言じゃ言い表せないほど、この半日でお世話になったのは本当で、私は深々と頭を下げる。

その時。ぽんつと肩を叩かれて振り返ると。

「おはよ、葵生」

後ろに立っていたのは、ミチルだった。

「あつ、おはよ……」

突然現れたミチルに呆然としてみると、ミチルは私から横にいる久我さんに視線を移す。その瞳の色がゆっくりと揺れる。

「どうも」

軽く頭を下げながら、視線を久我さんに向けたままミチルが言う。私は慌てて、久我さんにミチルを紹介した。

「彼女は同じ学科の豊橋とよはしミチルさん。ミチル、バイト先でお世話になってる久我さん」

久我さんを紹介するとミチルは、ああ、例の社長代理ね　そう言うように首を動かす。

「いつも長田さんにはお世話になってます」

ふわりと笑顔で言った久我さんに、ミチルはぺこりと挨拶する。

「葵生、そろそろ行かないと講義に遅れるよ」

「あつ、うん。久我さん、送って頂いてありがとうございます」

「どういたしまして、じゃあ」

「はい、ありがとうございました」

歩道から運転席に周り車に乗り込む久我さんに、もう一度頭を下げ、発進音を響かせて走りだした車を見送った。

去っていく車を見ていると、横から視線を感じてミチルを振り向く。ミチルは、じーっと私の顔を意味深な瞳で見つめていた。

「なっ、なに？」

「あの人が、葵生が言ってた“社長代理”でしょ？」

「あー……」

私はミチルから視線をそらして頬をかく。

「蜂蜜色の髪　そう言ってたんだから、すぐに分かるわよ」

「そっか……そうだよね」

「それにしても、朝から車で送ってもらうなんて、どうゆう急展開があつたわけ？」

にやりと口の端を持ち上げたミチルに、この後、私は質問責めにあうことになる

第8話 ハニートースト 3 (後書き)

イラストはyunekko様に描いて頂きました。

イケメンの翔真、戸惑ってる葵生がナイスです(^^)b

感謝です！

閑話 蜂蜜王子

「ふーん、じゃあ、台風で家に帰れなくなったから社長代理の家に泊らせてもらったんだ？」

学食で昼食を食べながら、葵生から昨夜の出来事を聞く。

なんでも昨日の台風で家に帰れなくなり、今日提出の課題をやるために事務所に泊らせてほしいと言ったら、女の子を一人で事務所に泊らせる訳にはいかないからうちにおいでって言われて、社長代理の家で課題して夜食食べて、泊って 送ってもらったという。私は顎に手を当て。

「それにしても……葵生から聞いてたイメージとぜんぜん違った。優しそうな雰囲気を見た目も申し分なくイケメンだし、何と違ってあのサラサラの蜂蜜色の髪！ 白馬に乗った王子様みたいに完璧じゃない」

「そうかな？」

首を傾げてご飯を頬張る葵生。

以前聞いた葵生の話では、社長代理は普段は澄ました顔でインケンでネチネチと小言を言ってくる と言ってた。だからもっと、お堅いカンジをイメージしてたのに、全然違うじゃないか。

ふわりと笑った社長代理は春の日差しのようなようだった。それに、別れの社長代理の葵生を見つめる瞳は

そう考えて、私は一つの可能性に辿り着く。

「はーん、そういうことね」

にやりと笑った私に、葵生が小首をかしげる。

「えっ、何がそういうことなの？」

「社長代理ってさ、葵生のこと好きなんだね」

頬杖をついて言った私の言葉に、葵生が目を見開き、持っていたお箸を落とした。

「まつ……さか、そんなこと絶対ないからっ！」

立ち上がって机越しに顔を近づけてすごい剣幕で言い募る葵生。興奮する葵生を見て、これは何かあるな、ついたら何か出てきそう　とか考えながら、冷静に聞き返す。

「なんで、そう言い切れるの？」

「なんでって……」

ぐっと言葉に詰まり、席についた葵生の顔は僅かに紅潮してる。

「だって、ほんとうに久我さんは……優しくなんてないもの。インケンでネチネチで、人のことからかって遊んだりする、最低な人なんだから！」

ぼそぼそ言いながら、葵生は再びご飯を食べるために箸を捨てた。

ふーん、葵生は本当に気づいていないんだ。社長代理がどんな顔して自分のこと見つめてるか

普通、何とも思っていない子を学校まで送ったりしないでしょ。それが性格インケンならなおさら、自分に向けられた優しさだって

気づかないものかな？

葵生の鈍さに、ため息をつく。

「まっ、気付いてないならいいけど」

あの社長代理なら、きっとそう遠くない時期に、革命的な行動を起こすんじゃないか　そんな気がして、他人事ながら葵生の未来を思っ、苦笑を漏らした。

閑話 蜂蜜王子（後書き）

第8話直後のミチル視点でした。

## 第9話 紅茶テイスター

ミチルが変なこと言うから

私は憤慨しながら、床に置いた資料を順番に棚に戻して行く。今日は、久我さんが仕事で使った資料を棚に戻す仕事。山積みのファイルに囲まれ、さっきまで集中してやってたんだけど、ふっとあることを思い出して完全に集中力が切れてしまったのだ。

『社長代理つてさ、葵生のこと好きなんだね』

ミチルの言葉を思い出して頭を振って、あの夜のことを思い出してしまう。

『いい匂いするね。甘くて 食べちゃいたくなるな』

突然抱きしめられ、耳元で囁かれた甘い声。

獲物を狙う獣のように瞳を妖艶に輝かせ、魅惑的な笑みで真っ正面から見据えられ……あわやキスされそうになって

思い出したくないことを自分で思い出して、かぁーっと顔が赤くなってくる。

その時の胸の高鳴りを思い出して、そっと胸に手を当てる。

あんな艶めかしい顔であんなことされたら、誰だってドキドキするわよ。

自分に言い聞かせるようにそう言って、鼓動を落ち着かせるように瞳を閉じた。その瞬間。

「長田さん」

急に肩に手を置かれて、私はあからさまにビクッと体を震わせて振り返る。

「あつ、ごめん、驚かせちゃった？」

事務所には私達しかいないんだから当たり前だけど、後ろには久我さんが立ってて、思わず視線をそらしてしまった。

だって、色々と思い出してただでさえドキドキしてるのに、その元凶が目の前に現れて平常心を保つことができなかったの。

「いえ……どうしたんですか？」

「少し、休憩しませんか。今日はずっと書類整理して立ちっぱなしで疲れたでしょう？」

気遣わしげに見てくる久我さん。

なんだか久我さんと顔を合わせているのが耐えられなくて、書類整理を理由に今日は棚が置かれた事務所の奥に籠っていた。だって、ここからは棚を隔てて社長席が見えないから。

だけど、ずっと立ちっぱなしで疲れたのは確かで、こうやって久我さんを避け続ける訳にもいかず……

「はい、そうします……」

そう言った私は久我さんに促され、キッチンに置かれたダイニングテーブルの席に座る。

「はい、好きな方をどうぞ」

久我さんが机の上に二本のペットボトルを置いて、そう言った。

一本はマンゴーティー、もう一本は甘いココア。  
なんとも甘党の久我さんらしいチョイスに苦笑が漏れる。

「じゃあ、こっち頂きます」

そう言っただけ私にはマンゴーティーを手に取り、蓋を開けて口をつけた。

実はココアって、苦手……なんだよね。

だけど……マンゴーも苦手なんだよね……私。

基本的に好き嫌いはないんだけど、南国フルーツ系って苦手で。

マンゴーもあのぐにゅっとした感触と甘みと苦みが……

そう思いながらも、せっかく買ってきてくれた久我さんにどっちも苦手ですとは言えなくて、一気にマンゴーティーを飲み干した。

久我さんの“あの”言動に含みはないと分かっているけど、どうしても、久我さんを意識してしまって、いつも以上に気まずい雰囲気のまま一週間が過ぎる。

久我さんはいつも通り澄ました顔で大量の仕事を押し付けてくるし、ちよつとのミスも目ざとく指摘してくる厳しさは相変わらずで、だけど、時折、じっと私を見る視線を感じて体が強張った。

そんな私と久我さんの間に流れたギクシャクとした空気をほぐすためか、バイトに行くと必ず久我さんがマンゴーティーを買ってくれるようになった。

たぶん、迷わずマンゴーティーを選んだことと一気に飲みしただけから、私がマンゴーティー好きと誤解したみたい。

初めて飲んだマンゴーティーは想像と違って苦味はなくて、マン

ゴーというよりも桃のようなさわやかな味わいだっただけ、所詮マンゴーはマンゴー……

ここははつきりと、実は好きじゃないと告げようと思ったんだけど、私よりも先に、久我さんから衝撃の真実が告げられる

「社長は明後日から復帰することになりました。退院後、念のため自宅で療養していましたが、いい加減復帰したいと言うので、月曜日から戻ることになりました」

社長が復帰すると聞いて、私はぱつと顔を輝かせた。

「……それで私が社長代理を務めるのは明日までとなりますが」

そこで一旦言葉を切った久我さんは、あからさまにつきつきしている私に、冷たい一瞥を投げかける。

「明日行われる赤坂店の一周年感謝パーティーの受付を私とあなたがすることになっています。明日はスーツで来て下さいね」

そう言えば、先週そんな話聞いたな……っていうか、久我さん、また不機嫌？

言葉に含まれる棘に気づいて、首をかしげる。

ついさつき、笑顔でマンゴーティーを渡してきたばかりなのに。ほんとに感情の起伏が激しいというか、久我さんの怒りポイントは最後まで謎だ。

そう思いながら、今日で久我さんと事務所で過ごすのは最後なんだから言わなければよかったのに、またまた私は余計な事を言ってしまった。

「はい、わかりました。ところで、久我さん。買って頂いてこんなこと言うのもあれなんですけど、私、マンゴーティーって苦手なんですよね……」

手元を見ながら言って、久我さんの顔を見上げると、怒っている時に見せる極甘の眩しいほどの笑顔を浮かべていて　私は体を凍りつかせた。

「そうですか、それは気が効かなくてすみませんでした」

久我さんの周りには怒りオーラが全開なのに、言い方がやたら丁寧なのが余計怖い。

私もしかして、地雷を踏んでしまった　！？

第10話 危険地帯××

ひどく殺気立った久我さんの瞳に、一瞬、切なげな光を見た気がして、胸が締め付けられるように痛んだ。

だから、苦手だけど、飲んだら美味しかったです。そう弁解しようとしたのに、久我さんは手早く荷物をまとめると。

「僕は、明日の打ち合わせをレストランとしてきますので、遅くなると思いますが。なので、君は定時になったら上がって先に帰って下さい」

そう言って、事務所を出て行ってしまった。

打ち合わせがあるのは本当だろうけど、まるで私とはこれ以上話したくないというように、背中が私の存在を拒絶していた。

もやもやした気持ちのまま翌日の夜。

赤坂店の一周年記念パーティーの受付をやるために、直接レストランへと向かう。赤坂店は以前にも皿洗いに何度か言ったことがある。

スーツを着てこいと言われて……大学の入学式のとりに着たスーツしか持っていなかった私は、昨日の夜慌てて、少しお洒落なシャツを買ってきた。パーティーだもの、受付と言っても、大学の入学式の格好そのままで行くわけにはいかないでしょ。

言われた時間よりも少し早くお店に着いたけど、すでに久我さんは来ててキッチンでシェフと話していた。

昨晚、気まずい雰囲気のまま別れて、どんな顔をして話しかけた

らしいのか分からなかったけど、とにかく挨拶しようと思って近づくと、私に気づいた久我さんがこっちを見た。

「長田さん、おはよう」

そう言った久我さんは何事もなかったように普段の澄ました顔で、怒っている様子もなかった。

私は昨日から一晩中、どうして久我さんが怒ったのか悩んで、分からなくて、あまりよく眠れなかったっていうのに、いつも通りの久我さんにちくと胸が痛んだ。

あんなに悩んで馬鹿みたい。

入り口に置かれたテーブルの前で一通り受け付けの説明をした久我さんは店の奥に行ってしまった。

受付の時間までまだあつたし、私はキッチンに顔を覗かせる。

「あの、何か手伝うことありますか？」

「おっ、葵生ちゃん。おはよう」

「おはようございます、シェフ」

シェフとは会議で事務所に来た時など何度か顔を合している。三十半ばですらっとしたシェフは、社長の影響か たぶんそうだと思うけど、私のことを“葵生ちゃん”と呼ぶ。

「じゃあ、この料理を、あそこのテーブルに並べてくれるか？」

「わかりました」

キッチンのカウンターに置かれた楕円の大皿料理を、指示されたテーブルに運ぶ途中、店内でホーススタッフの女性数人と久我さんが話している姿が視線の端をかすめる。

その久我さんの表情は、私には決して見せない毒も棘もない笑顔

で、顔を顰めた。

なによ、あんなににこにこしちゃって

久我さん、私以外の女性にはあんな顔で笑うのね。私って本当に恋愛対象外なのね。

ブツブツと文句を言っつて、自分の中に渦巻く気持ちに気づいてしまっつ。

これじゃまるで、嫉妬しているみたい

みたいじゃなくてそうなのかもしれないけど認められなくて、思考から無理やり久我さんのことを押し出して、黙々と料理を運んだ。だけど受付の時間になると右隣には久我さんが立っつて、嫌でも意識してしまっつて、体の右側に全神経があるんじゃないかっつていうくらい右側だけが火照る。

今日のお客様は、食品を取引している業者様、賃貸契約を結んでいる不動産会社など会社関係の人を招待して、料理でおもてなしをする。もちろん、日時が日曜日の夜だから、仕事を切り上げて来る方もいらしてパーティー開始時間をすぎてもぱらぱらとお客様が来るから、しばらく立ちっぱなし。おまけに、横には美味しそうな料理が並び、芳しいいい香りが漂っつてきて、お腹が空いてくる。

ああ、こんなことなら早めの夕飯を食べてから来れば良かったなあ。パーティーが終わっつたら残り物を貰えるかもしれないけど、もうお腹はペコペコで……

「マツクのポテト食べたい……」

欲求を思わず声に出してしまっつ、隣にいた久我さんが呆れた声で言っつ。

「横にはご馳走があるというのに、食べたいのはマツクですか」

「悪かっつたですね。私は庶民だから、あんな豪華な料理は食べ慣れっつてないんです。それよりもあの塩味のきいたポテトが……」

揚げたてのポテトを想像しながら手を震わせていると、久我さんの忍び笑う声が聞こえて仰ぎ見る。

「あつ、笑ってないですよ」

そう言って口元を押さえた久我さんは明らかに笑ってて　でも、馬鹿にしたような顔でも呆れたような顔でもなくて、瞳を細めて笑ったその顔は魅力的で、胸がきゅっとなる。

まるであの日見た久我さんの笑顔みたいで、私は視線をそらした。

その後、取引先の社長さんが来て、久我さんは挨拶にホールへ行ってしまった。

招待客もほぼ揃った頃、料理を作り終えたシェフに呼ばれてキッチンに行くと、私用にと言って取り分けてくれていた料理を包んでもらい、先に帰っていいと言われた。

今日の仕事は受付だけだし、シェフが帰っていいって言うなら、いいよね。

私は久我さんに挨拶しようかと思ったけど、まだ話し込んでたので、シェフと近くにいたスタッフに挨拶をして帰ることにした。

そう、たとえ今日が、久我さんと一緒に仕事する最後の日だとしても

久我さんが社長代理として来て、約一カ月。

初日は、いきなり普段やってない仕事を押し付けられて頭にきたし、仕事のことになるとちょっととしたミスもネチネチと指摘してくるし、インケンだし　だけど、仕事は迅速正確で、仕事のことを抜くと優しいところもあって、料理が上手で　この一カ月、それなりに充実した日々だった。

もう久我さんと会うこともないと思うと寂しく感じるけど、久我さんが社長代理として事務所にいたことが、非日常だったんだ。久我さんのマンションで抱きしめられたこと、昨日、一瞬見せた切なそうな顔思い出して　頭を大きく左右に振る。明日からは社長が復帰する。もう久我さんのことを考えるのはやめよう。

翌日から社長が復帰して、私の日常が戻ってきた。

社長と和気あいあいとしやべったり、一緒に昼食を食べたり、一カ月前の楽しかったバイトそのものだった。

だけど、心は何か無くしたみたいに満たされなくて街を歩いていて視界の端を蜂蜜色の物が霞めると、思わず振り向いてしまい、それが思い描いていたものと違って、がっくりと肩を落として。

なんだか上の空で覇気なく、時間は過ぎて行って

日曜日。事務所に行くと社長がにこやかな顔で告げた。

「葵生ちゃん、今日は赤坂店のヘルプに行って来てくれるかな？急にバイトの子が休みになったらしくて」  
「はい、わかりました」

以前にも赤坂店にはヘルプに行ったことがあるから、私も笑顔で答える。

「では、行ってきます」

事務所に着いてそうそう荷物をまとめて、社長にそう言い、私は駅に向かった。

「おはようございませう」

キッチンやホールにいるスタッフに挨拶しながら奥の従業員用のロッカールームに向かう。

いちおそれなりのお値段のイタリアン料理のお店だからホールに出る訳に行かず、ヘルプと行ってもキッチンでの皿洗いのみ。だけど、これが次から次に洗い物が出てくるし、ずっと同じ場所に立ちっぱなしだから、それなりに重労働なんだよね。

まあ、単純作業は好きだし、集中しだすとあつという間なんだけどね。

そんなことを考えながら、ロッカールームに用意された白いシャツを羽織りキッチンに向かう。キッチンにはシェフの他にキッチンスタッフが三人。みんな忙しそうにしているから、会釈だけして洗い場に向かう。

すでに洗い場は洗い物だらけで、私は早速、作業に取り掛かる。

まず、流しにバケツを置きそこに水を張る。次にスポンジで一枚洗い、汚れを落とすようにバケツにつけてから、横の自動食器洗い乾燥機　ウォッシャーに入れるトレーに並べて行く。トレーの中が食器で一杯になったら、ウォッシャーに押し込み、扉を閉めてスイッチを押す。ウォッシャーが動いている間も、次々と皿を洗い、他のトレーに置いていく。ウォッシャーが止まると、入れた場所とは反対側からトレーを取り出し、次のトレーを入れる。その繰り返し。

しばらくすると、シェフが洗い場に来た。

「葵生ちゃん、来てくれて助かるよ」

「いえ、皿洗いしか手伝えなくて申し訳ないです」

「そんなことないよ。じゃ、よろしくね」

「はい。わかりました」

シェフがそう言ってキッチンの持ち場に戻る。その後ろ姿を見ていたら、一人のキッチンスタッフの人と目があつた様な気がした。

その人は、長身で眼鏡をかけて、距離が少しあつてよく顔は見えないけど、私を見てた？

顔に見覚えがあるような気がするの、きつと以前にもこのお店に来たことがあるからで、でもシェフ以外のキッチンスタッフの人とは話したことがなくて、どうして見られているのか分からなくて首をかしげる。

「お願いします」

ホールスタッフが下げてきた食器を洗い場のカウンターに置いていったので、キッチンから視線を外して、もう一度見た時には、その人はもうこつちを見ていなかった。

やっぱり、気のせい？

私は首を何度か傾げながら、置かれた食器を引き寄せて流しに置いた。

## 第11話　ココロの扉をたたいて

社長が戻って来てから　久我さんが事務所に来ないようになってから　三週間が経つ。

いつも通りのはずなのに、何かが変わった私の生活。バイトの仕事内容は社長が入院する前からがらりと変わって、久我さんが来なくなっただけから久我さんから教わった経理などの仕事をしている。だけど社長は、ねちねちインケンつけたり細かいミスを指摘したりはしない。

久我さんにされていた時はあんなに厭味つたらしく感じて嫌だったのに　それさえもコミュニケーションだったように物足りなく感じて、心の中にぽっかりと穴が空いたような、虚無感に襲われた。その時になって　インケンで仕事のことになるとネチネチと容赦なくて、時には怒りが隠された天使も逃げ出すほど極上の笑みを見せたり、ほんのりと頬を染めた柔らかい笑みを浮かべたり、時には妖艶に囁いたり、実はすごく料理の上手な久我さんが　いつの間にか、激しく私の心の扉を叩いて居座っていたことに気づく。

それなのに

久我さんは今はどこにもいない

最後に見た久我さんはパーティーで招待客と話している後ろ姿  
今頃になって気づくなんて、なんて私は鈍いんだろう

“久我さんが好き”

たったそれだけのことに気づくのに、久我さんと離れて、久我さ

んの存在の大きさを思い知って、それでようやく気づくなんて。

伝票整理していた手を止め、ぱたりとファイルを閉じる。

だけど、今頃気づいた私は、どうしたらいいのだろうか？

久我さんはきつと、私のことなんてなんとも思っていない。むしろ嫌われているかもしれない。それでも

久我さんに会いたい　それが、私の気持ちだった。

連絡先は知らなくて、でも知っているからと久我さんの家に行く  
勇氣はさすがになくて。

社長に連絡先を聞こうか。でも連絡して会って、それから私はどうするつもり……どうしたいのだろう……

いまいち自分の気持ちの整理もつかなくて。

あー、やめよ、やめよ。

私に恋なんて似合わないし、今は大学生活とバイトでいっぱい  
っぱいはずよ。それに、どうせ実らない恋だって分かっているな  
ら、早めに諦めた方が傷つくことも少ないはず。

久我さんのことなんて、すぐに忘れられる　そう思ったのに。

仕事に集中することができなくて、頭の中から久我さんのことが  
離れなくて。

久我さんってまるで、美しい花にある毒みたい。見た目は本当に  
花にも負けないくらい美しい。きりつとした二重、通った鼻梁、薄  
く形の良い唇、そして一番目を引くのは、蜂蜜色の羨ましいくらい  
サラサラの髪。

あまりに美しいから、ついほいほいと近寄っちゃって、その花か  
ら出てる毒に知らずにどんどん感染しちゃったのよ。

だって、そうでしょ!?

あんな艶めかしい声と表情で、耳元で囁かれて、あの時ドキドキ  
したり胸が締め付けられるように痛んだのは、仕方がないことだっ  
たのよ。誰でもあんな目にあつたら、同じく鼓動が破裂するんじゃない  
かかってくらいドキドキするのよ!

だから　そう、私の久我さんに対する気持ちは恋なんかじゃな

い。久我さんの毒にあてられただけなのよ。

ゆっくり時間をかければ、毒は体から抜けて、いつかは久我さんのことを考えてもドキドキなんてしなくなるのよ。

そう、だから忘れるのよ、私！

胸元をかき合わせ、そう自分に言い聞かせた。

夕方、レストランの新作の試食に行く社長と一緒に行くとうと誘われ、やりかけの仕事を脇によけ、ファイルを棚に戻しに行く。

今日は途中、なんだか余計な考え事をしてしまい、仕事がぜんぜんはかどらなかつた。そんな中途半端な仕事しかできないのにレストランで夕食を食べるのは気が引けたが、一人で行くのはつまらないからと社長に言われたら、ついていくしかない。

実際、新作料理にはすごく興味があるし、行くと決めたらさっきまでの雑念はすっ飛んでしまった。

赤坂店に着いたのは八時過ぎ。店内は半分ほどの席が埋まっていて、私と社長はシェフに挨拶してからキッチンに近い席に座った。

しばらくすると、次々と料理が運ばれてくる。私はデジカメを持っていてることを思い出し、鞆から取り出して一皿ずつ写真を撮ってから料理を味わった。

社長はメモ帳を出し、料理の見た目、味、感想などを書きとめて、私にも感想を聞いてきた。私はそんなに舌が超えているわけじゃないから、美味しいか美味しくない、ちょっととした気づいたことを言った。こんな時、もっと気の効いたことを言えればいいけど、普段家でもあまり料理しないからたいしたことは言えなくて、なんて役

に立たないだろうとへこんでしまう。

すべての料理を食べ終わると、社長はメモ帳を持ってキッチンに行ってしまった。

時刻はすでに九時半をすぎ、店内のお客様もまばらになっている。一人席に取り残された私は、することがなくてなんとなく店内を眺めていた。

「お飲み物のお代わりはいかがですか？」

そう声をかけられて顔を上げると、そこにはキッチンスタッフの一人が立っていた。確か……そうだ、お皿洗いの手伝いに来た時、私のことを見てた人だ。

ホールスタッフは何人か名前も知ってるし、手伝いに来た時に話すこともあるけど、キッチンスタッフとは話す機会がなかった。だから、会ったことはあっても話すのは初めてで。

「大丈夫ですよ、もうお腹一杯なので。あの、はじめまして。私、以前に何度かお皿洗いに来たことがある長田と言います」

そう自己紹介したら、キッチンスタッフの彼は黒ぶち眼鏡の奥で一瞬眉を顰めた。その表情に違和感を覚えたんだけど。

「はじめまして……」

掠れた声で言い、じーっと見つめられて、私は首をかしげる。この間もそうだったけど、この人、私の顔をずっと見てて……私の顔に何かついているのかしら？

そんなことを考えて、あることに気づく。

眼鏡の奥のきりつとした二重、通った鼻梁、薄く形の良い唇、そして コック帽の脇から微かに見えるのは蜂蜜色の

「じ……が、さん……？」

そうだ！　こんなに美しい顔を見間違えるはずがない。何よりも蜂蜜色の髪の人がそうそう他にいるはずがないんだ。どうして今まで気づかなかったんだろう！？

久我さんがレストランのキッチンにいるはずがないという先入観？　だって、久我さんって、スーツ着てオフィスでバリバリ働いているっていうイメージで　そう考えて、事務所に久我さんが一度もスーツを着て来たことがないこと、料理がすごく上手だったことを思い出す。

その瞬間、なにかもの辻褄が合う。

事務所で初めて久我さんに会った時、あの時も私が「はじめまして」って言ったらさつきみたいに一瞬眉を顰めたんだ。

あれより前にレストランで会ったことがあるのに「はじめまして」なんて私が言ったから

久我さんが社長代理を辞めた後のレストランでも、久我さんに挨拶の一つもしない私を久我さんは見ていたんだ。

「やっと気づいたんだね」

呆れ気味に言いながらコック帽を脱いだ久我さんのさらさらの蜂蜜色の髪が頬の横で揺れる。

「レストランに来た時もまったく僕に気づかないで、約一カ月一緒に働いた仲なのに、君は本当に薄情だな」

“君”ってという言葉から久我さんが怒っているって分かるのに、そんな嫌味も久しぶりに聞くと懐かしくて頬が緩む。

「まったく、君は……」

その後もぐちぐちと久我さんが言っていたけどその言葉は耳まで届かなくて、胸がいつぱいになって　ぽろり、瞳から涙がこぼれ落ちた。

## 第12話 甘い蜜には毒がある

「葵生ちゃんお待ちせ」

社長とシェフが席に戻って来て、泣いている姿を見られてしまった。社長は、私から横に立つ久我さんに視線を移す。

「翔真 お前が泣かしたのか？」

その言葉に、私は慌てて目元を拭いながら言った。

「ちっ、違うんです。久我さんは関係なくて……あの、ただ、目にゴミが入っただけなんです」

なんで泣いたのか そんなこと、自分にも分からないのに説明できない。だからゴミが入ったと言って誤魔化す。

「そうかい？ 待たせて悪かったね。まだ少しシェフと話すことがあるから、先に帰っていていいよ」

ゴミが入ったということ信じただ訳ではなさそうだったけど、社長はそのことにはそれ以上触れずに言う。

「はい……」

私は、まだ溢れてくる涙を隠すために俯いて返事する。

「久我君も今日は上がってくれて構わないよ」

「翔真、遅いから葵生ちゃんを送ってあげなさい」

シエフが言い、社長が言って、私は思わず顔を上げてしまった。

「えっ、い……」

いいです　　そう言おうとしたのに。

「わかりました、お先に失礼します。長田さん、支度してくるから少し待ってて」

社長とシエフに頭を下げた久我さんは、私が言葉を挟む間もなく奥へ消えて行ってしまった。

社長に言っても無駄だと分かりつつも、言ってみる。

「あの、社長。私、一人で帰れますから大丈夫ですよ？」

でもやっぱり返ってきた答えは予想通りのもので、社長はにこやかな笑顔で言ったのだ。

「送ってもらいなさい」

そう言われたら、もう頷くしかなかった。

「はい」

あんなに会いたいと思っていた人物がいきなり目の前に現れて、溢れる感情と共に、逃げ出したいような気持になったのは、どうし

てだろう。

社長とシェフは再びキッチンへ行つてしまい、私は一人、ソファ一席に深く腰掛け、背もたれに全体重を預けて天井をあおいだ。

しばらくして奥から現れたのは、細身の黒いズボンにグレーのＴシャツを着た久我さんで、その姿は眼鏡をかけている以外は事務所に来ていた時と同じような雰囲気を漂わせていて、なんだか自分の知っている久我さんで、少し安心した。

「長田さん、お待たせしました。車まで少し歩くけどいい？」

私は立ち上がって久我さんの方に歩きながら、頷く。

あっ、長田さんになっている。機嫌は直ったみたい。そんなことを考える余裕もあった。

街灯の明かりだけの薄暗い夜道を、私と久我さんはゆっくりと並んで歩いた。私は右手に持った鞆をぶらぶらと大きな弧を描くように振って白線の上を歩き、半歩前、斜め横を歩く久我さんは少し空を見上げている。

久我さんに会ったら、言いたいこととか聞きたいこととかたくさんあったはずなのに、何も言えなくてただ黙って前を歩く久我さんについて行った。

もしも、私が久我さんを好きだと言ったら、久我さんはどんな反応をすだろうか？

驚く？

呆れた顔をする？

鼻で笑う？

きつとどんな反応だったにせよ、振られるのは確実に、でも、終

わりにするなら振られた方がすっきりしていいよね。  
そう思った時、ミチルの言葉が脳裏をよぎる。

『社長代理ってさ、葵生のこと好きなんだね』

そんなことはない　って頭で否定しても、心のどこかで、そう  
だったらいいと思っっている私がついて、振られる覚悟も気持ちも伝える  
勇氣も持てなかった。

はあー。

情けない自分のため息をついた時、振り返った久我さんと視線が  
あった。

「長田さん、さっき……の？」

躊躇いがちな小さな声で聞かれたから、聞き取れなくて。

「えっ？」

私は首を傾げた。

「レストランで会った時、本当に僕のこと気づいてなかったの？」

ああ、そのことが……

「はい、すみません。本当に全然気づかなくて」

私は俯いて言った。

「ひどいな、長田さんは。そういえば、社長が復帰するって聞いた  
時、すごい嬉しそうにしてたよね。社長が戻ってきたら、僕のこと

なんか忘れちゃった？」

あれ……？ ちゃんと名前と呼ばれているのに、言葉に棘があるような……

「そんなに僕のが嫌い？」

「えっ……」

私はそう聞かれて戸惑ったんだけど。

「そういえば、僕のことインケンとか言っていたね？」

久我さんがふんつて鼻で笑って言うから、私はカチンときて開き直る。

「言いましたね、そんなこと。でも本当のことじゃないですか、今だってネチネチネチネチ、私のこといびって……」

私は腕を組んでそっぽを向いて、今まで心にとめてきた文句をこぞとばかり言ったのに。

「くっ……くっくっ……」

って、いきなり久我さんが笑いだすんだもの……驚いてしまう。しかも、片手でお腹を抱えてもう一方で口元を押さえて、目に涙さえ浮かべているから、私は呆然とその姿を見つめる。

なんでこの状況で笑うの……やっぱり久我さんって謎すぎる……

「あははっ……ごめん。笑ってないよ？」

思いつきり笑われた後で、そんなこと笑顔で言われても……

「めちゃくちゃ、笑ってるじゃないですか。ほんと、久我さんって謎ですね」

ぼろりと本音が漏れてしまう。

「謎？」

その言葉を、久我さんが反芻する。

「そうですよ、突然機嫌が悪くなったり、そうかと思えば良くなったりするし、突然笑いだすし」

「くすくす」

言ってるそばから笑ってるし。

「ごめん、長田さんのことを笑ったわけじゃないよ。長田さんの言う通りだと思って。俺ってなんて、性格悪いんだろうと思ってね」

あっ、久我さんが俺って言った……

いつもは“僕”って言うのに、もしかして、これが素顔なのかな

……

私はそんなことを考えながら、じーっと久我さんを見つめた。

「こんな俺のこと……」

言いながら久我さんが首を傾げ、その瞬間さらさらと蜂蜜色の髪が揺れる。その仕草一つ一つが色っぽくて。

「……嫌い？」

すっと瞳に妖しい光が瞬いて、魅惑的な声で聞いてくるから、鼓動が早鐘のようにドクンドクンいつている。

あまりにも綺麗な顔で笑うから、ぱつと久我さんの顔から視線をそらした。

どうしてそんなこと聞くの……？

私のこと嫌いなのは久我さんの方じゃないの……？

いつもインケンで、私のことなんて仕事ができないダメバイトと  
か思ってたそうだし、他の人にはあんなに優しく笑いかけてるのに、  
私にはぜんぜん優しくなくて

そう考えて、嫌いつて聞いた時の久我さんの妖艶な笑みを思い出して顔がかぁーっと赤くなり、胸がぎゅっと締め付けられる。

あつ、あれは、毒なのよ。人のことを好きにさせる甘くて魅惑的  
だけど、でも決して見返りのない罠

「長田さん？」

黙り込んでしまった私の顔を久我さんが覗き込んで来る。

私はうまく声が出せなくて、思考が上手く働かなくて、呆然と久  
我さんを見つめ返した。

『もしも、私が久我さんを好きだと言ったら、久我さんはどんな反  
応をするだろうか？』

さっき考えていたことを思い出し、ぎゅっと拳を握りしめる。

「嫌いなのは……私のこと嫌いなのは、久我さんの方じゃないです  
か？」

分かっているのに 返ってくる答えが怖くて、声が震えてしま  
う。

「長田さん……？」

「いつも言うことは厳しいし、笑ったところは見たことないし、笑  
ったかと思うとそういう時は怒ってるし……」

喋っているうちに感情が高ぶってきて、泣きたいわけじゃないの  
に涙が溢れてくる。滲む視界、ぼろぼろと頬を伝う涙を無視して、  
私は久我さんをまっすぐ見つめた。

「でも、時々すごく、優しく、され……る、から……」

嗚咽が漏れて上手く喋れない。

「私、は、久、我さんの、こと、きつ……嫌い、じゃ、ない……で  
す」

そう言った瞬間。

久我さんの腕の中にいて、ぎゅうっと、優しく、でも力強く抱き  
しめられていた。

「ごめん……優しく出来なくて……ごめん。自分でもこんな感情は  
初めてで戸惑っているんです。自分がこんな風になるなんて……」

言いながら空を仰いだ久我さんは、そのまま黙ってしまった。抱  
きしめられていた腕が緩められ、久我さんの逞し胸にあたっていた  
顔を離し、私は久我さんを見上げる。

こっちを見た久我さんは怒りを隠した笑顔でも、妖艶な笑みでも

なく　ほんのりと頬を染めて照れたような顔で、ふわりと笑った。

「好きです、あなたにだけなんです。こんな自分で自分の感情をコントロールできなくなったり、感情と態度がちぐはぐになってしまふのは。初めて会った瞬間から、長田さん、あなたに惹かれていました」

「それって……私を好きってことですか？」

私は思わず聞き返してしまった。

その瞬間、天使も慌てて逃げ出すような妖しく麗しい微笑みを久我さんが浮かべていて、びくりと肩を震わせる。

なっ、なにか、まずいこと言ったかな、私……

「そう、言いましたよ、最初に」

言葉に棘がたくさんあって、怒りを隠した嘘つき笑顔に、一步後ずさる。

身長差のせいだろうけど、上から見下ろしてくる視線が馬鹿にされているようで、とても好きって言った態度には思えなくて、頬を膨らませて反論する。

「うっ、嘘ですね。だって、そんな風には見えないじゃないですか。もう、私のことからかうのはやめてください。そーゆうことは他の人にしてください」

ぶんぶん怒りを露わにそっぽを向く。

「久我さんのそーゆう態度は毒です！　公害です！　毒にやられるこっちの身にもなっ　」

なっってください、そう言おうとしたのに。

その口は久我さんの口に塞がれてて

あまりの衝撃に、目が落ちちゃうんじゃなかったくらい見開いて久我さんを見つめる。

その一方で、間近にある久我さんの端正な顔に見とれ、閉じられた瞳と長い睫毛に惚れぼれしてしまう。

ゆっくりと顔が離れ、久我さんがじーっと私を見つめて　そして、にやりと笑ったの。

「好きですよ、長田さん」

嫌あ　　っ！

目が笑ってない

どこかでこんな言葉を聞いたことがある

“美しい花には棘があり、甘い蜜には毒がある”

初めから棘があることも毒があることも分かっていたのに、完全に甘い毒にやられ、もう引き返せないところまで来てしまったようです。

天使のように微笑むインケン男を好きになってしまった私の苦難は、まだまだ始まったばかりだった



## 第12話 甘い蜜には毒がある（後書き）

これにて、葵生視点のお話は完結です！

ここまで読んでくださってありがとうございます。

感想や1ポイントでもいいので評価頂けると今後の励みになります。

次話からは、翔真視点のお話をUPする予定です。

内容はほぼ葵生視点のものと同じですが、葵生を好きになった時のエピソードを入れてあります。

興味のある方は、そちらもよかったら読んでみて下さい。

誤字などありましたら、お知らせください>m(\_\_\_\_\_)m<

### 第13話 出会った瞬間、打ち抜かれて

あれは四月、桜の花びらが青空を隠すように満開になった頃。  
レストランに見慣れない子が現れた。

父が経営するレストラン クル・ドゥ・ミエル Couleur du miel で働かないかと言われ、悩んだ結果 生まれ育った母の祖国であるフランスを後にし、去年の九月に日本に来た。

日本での生活は慣れないことばかりで戸惑ったが、やっと一人暮らしにも日本の生活にも慣れてきた そんな頃だった。

「おはようございます」

そう言ってキッチンに入って来た子はシェフとしばらく話した後、マネージャーが呼ばれ一緒に奥へと消えて行った。

身長は女性にしては低めだろうか、腰まで伸びたストレートの髪を後ろで一本に結わき、雪のように透ける肌にはくりっとした二重に桜色の唇が魅力的で、第一印象は正直、可愛い子だなと思った。

新しいホールスタッフのバイトの子だろうか？

そんなことを考えつつも、自分には関係ない存在だとすぐに思考を切り替えて、目の前の作業に取り掛かった。

経営の勉強をするためにフランスに来ていた父は、母方の祖父母の経営するレストランで母と出会い、恋に落ち 結婚した。



だから、父から日本へ来ないかと、三店舗目の赤坂店で働かないかと言われた時は嬉しかったが 果たして俺が役に立つのかという迷いもあった。

日本に来て七カ月、まだまだ力及ばない そう実感することが多くて、早く一人前になることだけに集中し、それだけで手一杯でその時感じた、胸のつかえるような僅かな痛みに、気付かないふりをしたんだ。

店内が混雑し慌ただしい昼時になって、皿がそろそろなくなりそうだと思った時、新入りのバイトの子が洗い終わった皿を運んで来て、その仕事はキッチンスタッフの仕事だから驚いた。てっきりホールスタッフだと思っていたし、キッチンスタッフに女性がいることは非常に珍しいからだ。

だけど、それからしばらくしてすぐに、彼女がキッチン“スタッフ”ではないことを知る。

ずっと洗い場に籠り、ひたすら下がってきた食器を洗い続けている。洗い物がない時は、洗い終わった食器を食器置き場に置きにきたり、洗い場の周りを掃除している。

そんなのは……キッチンスタッフの仕事ではない。洗い場は基本的にホールスタッフの仕事だが、ずっと洗い場に籠ることはありえない。

まるで、皿洗いをするためだけに来たような けども、彼女が洗った皿はどのホールスタッフが洗ったよりも丁寧に洗われ、だ

からといって作業ペースは遅くはなく、むしろ早い方で。

彼女の存在が謎過ぎて、彼女のことを考えずにはいられなくて。

でも、ランチ営業が終わってから洗い場を覗くと、そこにはすでに彼女の姿はなかった

遅いランチをスタッフで食べている時、“彼女”の話題がでる。

シェフが言うには 長田<sup>おきた</sup> 葵生<sup>あおい</sup>、十八歳、今月から本社の事務

スタッフとしてバイトを始めたらしい。今日は、ホールスタッフが一人朝に休みという連絡があり、助っ人として呼んだらしい。あと、レストランの見学も兼ねていたらしいが。

シェフは何度か事務所であっているらしく、彼女のことを“葵生ちゃん”と親しそうに呼んでいる。

助っ人つといても、いきなりホールの仕事を任すわけにはいかず、皿洗いだけを任せたらしい。

それにしても

「それにしても、ずっと皿洗いばかりやらされても、文句一つ言わずずっと笑顔で、長田さんならホールもすぐにできそうですね」

俺の考えに被さって、マネージャーがシェフに話しかける。

「そうか？」

「それに、仕事の覚えも早くて、作業は丁寧かつ迅速！ 皿洗いだけさせるなんてもったいない気がします」

キッチンスタッフの一人が言う。

「じゃあ、また何かあった時は葵生ちゃんに助っ人として来てもらうか」

シェフはほくほくとした笑顔で、スタッフの話に相づちを打つ。

「長田さん、可愛かったしなあ〜」

そう言ったホールスタッフの言葉に、男性陣は頷き、女性陣は笑ったり、文句を言ったりしていた。

その後、スタッフが足りない時は彼女が呼ばれるようになる。月に数度だったが、彼女がレストランに来ると 大げさかもしれないが、世界が溢れんばかりの輝きに満ち、心が温まる そんな不思議な気持ちになった。

それが恋のはじまりだと まだ、俺は気づいていなかった。

第13話 出会った瞬間、打ち抜かれて（後書き）

この話から翔真視点です。

翔真の一人称が“俺”になってますが、普段は“俺”で他人の前では“僕”と使い分けています。

## 第14話　かわいくて憎らしい彼女

六月の二週目に入って、父が倒れて運ばれたと病院から連絡があった。慌てて駆けつける。

父は　俺にとって尊敬する存在であると同時に遠い存在でもあった。母が亡くなってから、その寂しさを埋めるように仕事に没頭した父。子供である自分を省みてくれないことはなかったが、一緒にいられる時間は少なかった。

父が日本で経営を始めてからは年に一度か二度会うだけで、俺が日本に来てからは同じアパートで住めばよかったのかもしれないが……別々に住み、仕事で会うか、時々夕食を一緒に食べるくらいだった。糖尿病だということすら　病院に駆け付けるまで、知らなかったんだ。

「翔真、心配かけて悪かったね」

病室に入ると、起き上がっていた父が穏やかな表情で言う。

病院に向かう途中、命にかかわることだったらどうしようかと胸のつぶれる思いでいたが、今回は過労で風邪をこじらせたのが原因だと聞いて、少し安心した。父の表情からも辛さは感じ取れず、ほっと安堵の吐息を漏らす。

「驚かせないでくださいよ」

そう言って、強がるのがやっとだった。

父はふっと微笑をもらし、ベッドに横になる。

「ああ……」

「先生が入院ついでに検査すると言っていました。父さんは働き過ぎですよ。事務所も大学生のバイトと二人きりでは大変でしょう？折角ですから、この機会にゆっくり休んでください」

「その言葉に甘えるよ。翔真にもいい機会だろう？ 明日からしばらく事務所と葵生ちゃんのこと頼むよ」

そう言った後しばらくして、静かな寝息が聞こえてきた。俺がいのに寝てしまうなんて、本当に疲れているんだなと痛感する。

翌日、父から預かった鍵を持って事務所に向かう。レストランには、父が入院したこと、しばらく代理として事務所勤務することを伝えた。

事務所には日本に来たばかりの頃に数回来ただけだったから、改めて事務所の中をじっくりと見回した。

仕事内容は、昨日父からだいたいの流れを聞き、スケジュールなど詳しく書かれた手帳を渡されたから、それでなんとか出来るだろうと思う。大学で勉強したことを初めて実践で活かす機会に恵まれ、仕事に対する期待と不安でいっぱい、事務所に“彼女”がいることを思い出したのは、彼女が来る直前のことだった。

「おはようございます」

元氣一杯に事務所に入ってきた彼女は、社長席に座った俺を見て

瞳が落ちそうなほど目を見開き、何度も瞬きする。

「おはようございます」

俺は顔を上げて彼女を見て言う。彼女はそんな俺の顔をじーっと見つめ、振り返り一旦事務所の外に顔を出してから、室内を見回して首をかしげながら席に着いた。席に着いてからも、しばらくは茫然と何かを考えるようにしている。

「なんだ、この反応は？」

挙動不審というか、まるでこれでは　あなたは誰ですか　そんな不安そうな顔で座っているから、彼女に声をかける。

「なんですか？　なにか分からないことでも？」

まさか、レストランで会ったことを覚えていない　？  
俺は少しの動揺を隠して、平静を装って言う。

「いえ、あの……」

そこで言葉を切り、彼女は自分の机の上に置かれた山積みの書類に視線を移した。その書類は、彼女が来る直前に彼女の存在を思い出した俺が置いたものだった。

事務所のバイトだというから、きっと経理とかそうゆう関係のことを大学で専攻しているのだと勝手に決め付けて

「社長は……今日はいらっしやらないのですか？」

そう言った彼女を見て、俺のことを覚えていない　と確信し、僅かに胸がチリチリと痛む。

椅子の向きを変えて立ちあがり、彼女の机の前に行く。

「自己紹介がまだでしたね。僕は久我 翔真といます。社長久我 銀司の長男です。社長は体調を崩して入院することになったので、しばらくは僕が社長代理を務めます。よろしく」

彼女が俺のことを覚えていないなら、彼女にとっての第一印象が良くなるようにと、極上の笑みを浮かべて手を差し伸べる。

彼女は慌てて立ち上がり、俺の手を軽く掴んだ。

「はじめまして、バイトの長田 葵生といます。よろしく願います」

その彼女の言葉を聞いて、俺のことを覚えていないんじゃないかとさつき確信していたのに 決定打を打たれ、さらに胸が痛んだ。だけど、そんなことは顔に出せなくてプライドで平静を装い、彼女との会話を早々に切り上げ、仕事に戻った。それなのに

「あの……」

彼女が声をかけるから、つい苛立つままに“長田さん”を見もせずと言う。

「なんですか？」

「この書類ってどうしたらいいんですか……？」

その言葉に 手にしていたペンを折ってしまった。ペンをそつと机の端に置いてから顔をあげて長田さんを見る。長田さんは書類の一つを手を持ち、呆然と俺の方を見ていた。

俺は勢いよく立ち上がり、その勢いのまま近づいて書類をひったくる。そんな行動、大人げないと思いつつも、さっと目を通して閉

じた書類を机の上にはんつと置いて、俺は長田さんを見た。

なぜ、この書類を見て どうしたらいいんですか？ という質問になるんだ？

理解できなくて苛立ちつつも、俺はその気持ちを抑えるように笑顔を貼りつかせる。

「これは、先月の各店の在庫一覧表です。パソコンのここに在庫データがあるので、数字を入力して、在庫の金額を出して下さい」

話しながら長田さんの机に左手をつき、右手でマウスを操作する。パソコンの画面上でマウスを動かし、在庫データを開く。

「いいですか？」

そうやって俺は仕事のやり方を指示した。

彼女の中では“初対面”という状況で、俺は気持ちをなるべくオブラートに包んで行動しようと思ったのだ。

だが、父から彼女は事務のアルバイトと聞いている。在庫管理くらい出来るはずだ。出来ないはずがないんだ。

レストランで見た彼女は、本当に仕事熱心で、細かいところまで気配りができ、迅速かつ丁寧な仕事ぶりは惚れればれるものがあった。そんな姿を見ていたから、事務所での彼女は父を支える立派な右腕なのだろうと想像して、そんな彼女を少し羨望していた。

いつか、父の側で働く

そう夢見ていた俺の、その場所に、彼女がいるから

それなのに

在庫管理は出来ない。シフト整理も出来ない。なら一体、何が出来るというのか？ 彼女は一体、ここで 父の側で どんな仕事をしているというのか

「それで時給に見合った仕事をしてると思ってるの？」

半分は八つ当たりだったかもしれない。それでもこれが、その時点の彼女に対する俺の気持ちだった。

俺は冷ややかな視線を長田さんに向ける。そんな俺に対し、彼女は深々と頭を下げてきた。

「すみません。分からないので……教えてください」

そう言った長田さんの表情は見えなかったが、声は微かに震え、膝の前で握られた手も震えている。

その姿を見て、自分が大人げない態度を取ったことに気づく。

俺が言ったのはただの八つ当たりだ。長田さんがどんな仕事をするといふ条件でバイトしているのかは、社長と長田さんの間の話で、たとえ社長代理の立場であろうと俺が口出し出来ることではなかった。それなのに感情的に長田さんを非難した俺に、彼女は怒って詰つても良かったんだ。

心の内では悔しいと思っっていることは震える手から伝わってくる。でも彼女は俺に頭を下げ、自分に非があると認めたのだ。

それは、仕事に対して真摯に向き合っている証拠ではないではないだろうか

なんだか胸がざわついて、俺は何も言えなくなってしまった。

だから机に向かい、メモ帳にシフト票のやり方を書き出し、それを長田さんに差し出す。

長田さんは呆然と机の前に立ち尽くし、メモと俺の顔とを何度も視線が行き交い、メモを受け取るうとはしなかった。

俺は仕方なくメモを長田さんの机の上に置き。

「シフト票のやり方を書いたから、それ見てやって」

そう言いながら席に戻って、仕事を再開した。しばらくして、彼女の机の方からキーボードを打つ音が聞こえ、ちゃんとメモを見て仕事をしていることが分かり、自分の仕事に集中した。

それから二時間ほど経った頃、微かな声が聞こえて、手を止める。顔を上げると、彼女が口に手を当て涙ぐんでいるのがはっきりと見えて、俺は動揺しつつも、鞆に入れていたハンカチを取り出して彼女に差し出した。

彼女が泣いている　その原因は、おそらく俺。

俺が彼女をひどく傷つけるようなことを言ったから

そんな自分に苛立ち、眉間に皺を寄せた。

長田さんと話したのはもう何時間も前なのに　きっとあの時は必死に涙をこらえて、仕事をして、ふっと緊張の糸が切れて思わず涙が溢れてしまったのだろう。

そんなふうには彼女を追い詰めるような言い方をした俺は、なんて最低なんだろうか。

「ここに、他の書類のやり方も書きました……さっきはすみませんでした、言いすぎました。確かに、長田さんの言う通り、やったことのない仕事をいきなりやれというのは無茶苦茶でした、反省しています」

俺はそう言って、誠意をこめて頭を下げる。

どうか、最低な俺を嫌いにならないでほしい　そう心の内で思  
いながら。

だけど、どうしても仕事のことになると容赦が出来ない俺。細か

いミスを指摘し、仕事のチェックをする。長田さんが今まではやったことがない仕事だと分かっているながらも、彼女ならば出来るそんな期待と信頼を寄せて。

だけどそんな心の内は知られたくなくて、なるべく感情を言葉に乗せない様に喋るのが精一杯だった。

たった今も、長田さんが提出ボックスに入れたばかりの書類にすぐ目を通し、ミスをチェックしてつき返したところだ。

やや唇を尖らせて斜め横に視線を向けた長田さんの唇が微かに動いたのを見逃さず、俺はぴくりと片眉を上げる。

「なんですか？」

聞こえないほど小さな声だったが、俺の耳には確かに届いた言葉に、俺はさっきまでの無表情から極上の笑顔を張り付けさせる。もちろん、心の内を隠すために

「今、インケン……って言いました？」

ぴくりと肩を震わせた長田さんが、なんで分かったの　そんな風に驚いた視線を一瞬俺に向ける。

「今、地獄耳って思いましたね……？」

問いかける俺に対して、長田さんは蛇に睨まれた蛙のように小さくなり体を震わせている。

なんだろうな……笑顔で誤魔化しているつもりなのに、長田さんは怯えきっている。

でもその姿が可愛くて、緩みそうになった頬を引きしめて、わざとらしく大きなため息をついた。

「はあー」

俺は素早く席に戻り、やりかけの書類をぱらぱらと捲りながら。

「別にいいですけどね、あなたにどう思われようと」

長田さんの方を見ずに、独り言のように呟く。

その言葉は、半分は本心で、半分は

そんな考えを頭の片隅に追いやり、仕事に集中した。

第16話 コロコロのうちにくもり 2

社長代理を務めて事務所に来るようになってから一週間が経った。長田さんは、俺が来る前まではやったことなかった仕事も、この一週間でやり方を覚え、彼女なりに一生懸命やっているのを感じる。まだまだミスはあるが、たった一週間でここまで出来れば大したものだ。俺の見込みに、間違いはなかった。

長田さんと過ごす時間は充実し、彼女も俺に対して最初の緊張感も解けたように見えた。と思っていた。朝、事務所の入り口で、隣の運送会社の従業員に向ける笑顔を見るまでは。

「今日の夕飯、一緒に食べない？」

そう誘われて長田さんは嬉しそうに微笑んでいる。俺には一度も向けてくれたことのない可愛い笑顔で。

なんだかそれが無性に腹立たしくて、長田さんの返事の言葉を遮るように俺は声をかけた。

「仕事中にナンパですか？ 集荷が終わったらさっさとどいてくれないと、部屋に入れなんですけど？」

イラつく心の内を隠すように極上の笑みを浮かべて。

扉にもたれかかりながら言った俺に、振り返った運送会社の彼は爽やかな笑みを浮かべ、帽子を脱ぎながら元気に挨拶をしてくれる。入り口の前に置かれていたカートをどけたので、俺は挨拶を返しながら席に向かった。

鞆を机に置きながら横目で入口の方を見ると、彼女は何か運送会社の彼に話しかけ、笑顔で手を振りその後ろ姿を見送った。

仕事に取り掛かりながら、よく彼がレストランに食材を運びに来ることを思い出し、うちの会社を担当しているんだと思い至る。

それにしても、あんな眩しい笑顔を向けるなんて、彼女はあの男のことが好きなのだろうか

そんなことを考えてしまつて、手が止まっていたことにはっとし、こつちを見た長田さんと視線が合う。

俺ははあーつと大きなため息をついて、視線を横に向ける。

彼女が誰が好きだろうと俺には関係ないことだ。そう思いながらも、イラつく感情を抑えられなくて、そらした視線を彼女に戻し、言わなくていい様な事を言ってしまった。

「なんですか、あなたは。ろくに仕事も出来もしないのに、ナンパなどされて浮かれて。仕事に集中出来ないのですたら、帰って頂いて構いませんよ。そんな人に時給を払うだなんて、我が社の損益ですから」

仕事に集中出来ていないのは、俺の方だが……

そう思いながらも、すぐに彼女の反論が返つてくると予想していた。それなのに、彼女は俺のことを一瞬睨み、俺の言葉が聞こえなかったというように机に向き直ったから、わざと。

「ふんっ」

鼻で笑ってやった。言い返してこないなら、言い返してくるようにするまでだ。

「言い返さないってことは、凶星ですか。それならば……」

そう言いかけた時、ばんつと音を立てて長田さんが立ち上がる。机に両手をつき、思い切り叩いたのだろう。顔は俯き、ぼそりと声を漏らしたから、俺は何と言ったのか聞こえなくて、ただ彼女を見つめた。

「私、このバイト辞めます」

そう言うなり鞆を掴んで入り口に早足で歩きだした長田さんを、俺は反射的に追いかけて腕を掴んでいた。

「なんですか？」

振り返らずに感情を乗せて叫ぶ彼女が、俺のことを全身で拒絶しているのが分かって、肌が震え、胸がジクジクと痛み、彼女の腕を掴む手に無意識に力がこもる。

「痛っ、離して……」

長田さんが悲痛な声を漏らしたのに、俺は何も言えなくて、ただそのまま腕を掴んでいた。

俺はなんで彼女を追ったのか

この胸の痛みは何なのか

その答えに辿り着いてしまって、俺はその答えを打ち消すように、慌てて彼女の手を離れた。

だけでも、口から出た言葉は自分でも予想外のもので

「逃げるのか？」

もう十分嫌われているというのに、更に嫌われるようなことを言

う自分に苦笑が漏れる。

嫌われるなら、彼女ともう会うことさえなくなるのならば 彼  
女に憎まれるほど嫌われた方がいい そう頭の片隅で考えて。

だから俺は、振り返った長田さんを睨み据える。

俺の手の届かないところに行ってしまうのならば

「なっ……」

「本当のこと言われたくらいで、そうやって投げだすんですか、あなた。そんなことをしては、いつまでたっても、一人前に仕事を出来るようにはなりませんよ」

反論しかけた長田さんの言葉を遮るように言い、くるりと背を向けて席に戻り書類をより分けながら。

「まあ、あなたが辞めてくれる方が、我が社にとっては有益だ。どうぞ、ご自由に辞めてくれて結構」

心にも思っていないことを平静を装って言った。

胸の痛みはどんどん増してくる。それでも、彼女が去るならば、彼女が自分で去るのではなく、俺が追い出す形にしたかったから  
それなのに

「逃げないわよ。久我さんに一人前だって、辞めたら困るって言われるような仕事をしてみせるわよっ！」

そう叫んだ彼女は、僅かに潤ませた挑戦的な瞳を俺に向けていた。

第17話 言葉だけでは・・・

女性に接する時は硝子細工を扱うように優しく　それが父や祖父から教わったことで、俺は今までそうしてきた　つもりだった。それなのに長田さんを前にすると、感情を態度に露わにしましうし、抑えきれない感情を笑顔で取り繕おうとか考えてしまう。女性には当たり前のように優しく接してきたし、女性を前にしてコントロールできない感情にヤキモキすることもなかった。

彼女だけが　俺を狂わせて、ダメな人間にしている。それは俺が彼女のことを好きだから

自分の心の内で見つけた答えに、どう彼女に向き合うべきか、真剣に悩んだ。

まずは今までの自分の態度を振り返ってみて、俺ってなんて嫌な奴なんだと自分で思ってしまった。彼女が一生懸命仕上げた仕事を、一瞬でミスチャックしてつき返し、彼女と話すことは仕事の話ばかり、しかも俺が一方的に叱る感じで。

こんな俺を彼女が嫌うのはもちろん、笑顔を見せられないのも仕方がないことに思える。

病院での父の言葉を思い出す

『好きな子にはもっと優しくしてやらなければ、気持ちは伝わらない。全く、仕事熱心なのはいいが、そんなんじゃ恋人の一人もできないだろうに……。葵生ちゃんはお前みたいに優しくない男はタイプじゃないそうだぞ？』

俺自身、やっと気づいた気持ちに、父はあの時点ですでに気づいていたのだろうか

そう考えるとため息が漏れたが、とにかく俺は彼女ともっと仕事以外の話をして、優しく接しようと思ったのだ。

いや、こんなことを決めること自体、俺にとっては初めてのことだが、彼女を前にするとどうしても頭でごちゃごちゃ考えてしまうから、あらかじめ考えておけば、今までよりも少しはマシな態度が取れるんじゃないだろうか。

もしも、少しでも彼女と友好的関係を築けるならば

だから、お腹の音を鳴らして縮こまり、頬を染めた長田さんが。

「あの、普段はご飯代を社長に出して頂いてて、それを当てにして先月の給料はすべて授業料にあててしまって、その上お米も尽きてしまって……ご飯を買うお金もないんです……」

そう言ったことに対してというよりも、そのことに気づかなかつた至らない自分のため息を漏らす。

「“ご飯つき”の条件のことですね、社長から伺っています。社長が入院してからの九日分は、一日五百円で給料と一緒に食事手当として出します。今日はとりあえず、これで何か買ってきなさい」

親から独立し、自分の稼いだお金で生活していけるくらいは稼いでいる。だから長田さんに一食分くらい奢っても問題はなく、そのつもりで俺はお金を渡したのに、昼食を買って戻ってきた長田さんが、俺の机の上にそおっと小銭を置いたのを視界の端に認めて、顔を上げた。

机の上に置かれた小銭は八百七十円。お金がほとんど減っていない

い

小銭から彼女に視線を移すと、気まずそうに視線をそらされた。

「何を買ったんですか？」

俺は怒りを抑えて、静かな声で聞く。

「えっ……と、おにぎりを……」

「遠慮せずに、もっとましな物を食べなさい」

「いえ、これで十分なので。お金、貸して頂いてありがとうございます。お給料が入った暁にはきっちり返しますので」

その言葉が胸に突き刺さる。

長田さんが話は終わったとばかりに俺を見ずに席に戻るから、俺は無意識に立ち上がり彼女を見つめた。

「僕からの施しを受けないと……？」

さっきの言葉だけじゃ、俺の誠意は伝わらなかったのだろうか。決して、貸すために渡したお金ではない。それなのに彼女がそう受け止めたのは、俺が今まで取ってきた行動のせいだろうか？

俺は、切ない気持ちと苛立つ感情に動かされ、事務所を後にした。言葉だけで伝わらないのならば、行動に示すまでだ。俺は食材を求めて、その辺のスーパーではなくて、無農薬野菜や高級な食材を扱うスーパーに向かい、なんとなくクラムチャウダーを作ると決めて食材を買いそろえ、事務所に戻るとすぐに調理に取り掛かった。鞆の中に入れていたブルーのストライプのエプロンを身につけ、まず食材を切る。久しぶりに自分以外のために作る料理に少し緊張したが、料理を始めるとそんなものはすぐに吹き飛んでいた。

煮込みはじめ、もう少して出来上がるという頃、長田さんがキッ

チンに現れる。

俺はクラムチャウダーを混ぜるために握っていたお玉を離し、コン口の火を止めて皿を出して一杯よそい、キッチン横に置かれたダイニングテーブルに置く。

椅子を引き、長田さんに座るように促す。席に座った長田さんは最初は恐る恐るといった様子でスプーンを持ち、クラムチャウダーを一口すくって口に運ぶ。

「わっ、おいしい……」

思わずといったように言い、長田さんが口元に手を当てる。その言葉に、自然と頬が緩む。

「あの、久我さんって、お料理とてもお上手なんですね。でも、どうしていきなり料理なんて始めたんですか？」

スプーンを置き、こっちを見上げて長田さんがそんなことを聞く上手ですねって……一応、料理のプロを目指してるわけだから美味しく当然だと思っけど。本当にレストランのキッチンで会ったことがあるって気づいてないんだと、改めて実感し苦笑が漏れそうになったから、つい、誤魔化すように言う。

「君が食事代をお金では受け取れないというから、作ったんだ」

そう言った俺に、長田さんは首をかしげる。

「さっき僕が食事代を渡したのは、貸したわけじゃない。“これで買ってきなさい”って渡したんだ。それなのに、たったおにぎり一つだけしか買わずに、お金は後日返すだって？ そんなに君は……」

心の中で思っていたことではあるけど、本当に怒っていた訳ではない。なぜだか照れ臭くて、それを誤魔化すために、そんな態度しか取れなかったんだ。  
それなのに

「ありがとうございます」

そう言っただけで長田さんが頭を下げるから、胸がぎゅうっと締め付けられる。

なぜだろうか……自分でも嫌味だとわかることを言ったのに、その後もぱくぱくと口にスプーンを運び、本当に美味しそうに食べるから、その姿に見とれてしまう。  
だから、思わず言っていたのだ。

「これからバイトの時は、長田さんの食事は僕が作るよ」

見上げた長田さんは、眩しいほど輝いた満面の笑みを俺に向ける。

「ほっ、ほんとうですか……？」

もしかしたら断られるかも　一瞬、頭によぎった考えを打ち消すように、長田さんの表情が柔らかいから。

彼女の笑顔が嬉しくて、俺はにこりと微笑んでいた。

父が退院した翌日、レストランとの打ち合わせから事務所に帰る途中で、行きは小雨だった雨粒は大きくなり、強い風が吹き荒れ雨

を地面と体に叩きつけてくる。傘をさしてもあまり意味がなく、髪や服がぬれてしまった。

季節外れの台風が予想よりも早く接近してきたようだ。

「まだ早いですが、今日はもう事務所も閉めましょう。大丈夫だとは思いますが、電車が止まったら困りますからね」

事務所に着いてそう言った俺に、長田さんは青ざめた顔で携帯を見つめている。

「もう、遅いです……もう止まってるんです、電車……」

半泣きになって俺を見つめる長田さんの手元の携帯を覗きこむと、画面に赤い文字で“運転見合わせ”と書かれていて、長田さんが帰れなくなってしまったことを悟る。

明日提出の課題をやるために事務所に泊りたいと涙目で訴える長田さんに、俺は事務所に一人で泊らせるのは心配だからと、自分の部屋に誘う。もちろん課題をやるためで、それ以外に含みはなかったんだ

ただ困っている長田さんのために言った言葉で。

俺の部屋に着いてからもリビングでお互いパソコンに向かい、長田さんは課題を、俺は仕事をした。

自分の部屋に好きな子と二人きりという魅力的な状況だけでも、彼女に手を出すつもりはないし、仕事に集中することで、煩惱を叩きだした。

「終わったあー！」

日付が変わろうとする頃、課題が終わった長田さんが両手を上に

挙げて言った。

「お疲れ様です。どうしますか、すぐに寝ますか？ お風呂も使いたければ使ってくださいですよ？」

そう言った俺に、長田さんがちらつと視線を向けてすぐにそらす。

「久我さんはまだ寝ないんですか？」

「僕はもう少し、切りのいいところまでやるつもりです。長田さんは先に休んでいて結構ですよ」

俺もすぐに長田さんから目の前のパソコンに視線を戻し、ただ事務的に言う。

長田さんと二人きりだということを 考えてはいけないことを、考えないようにするために。

ぐう~~~~~きゆるきゆるきゆる~~~~…

緊張感を破るように、部屋にいつかも聞いた奇怪な音が響き長田さんの方を見ると、お腹を押さえて丸くなっていた。

「もしかして、お腹すいたの？」

夕食を食べてから結構経つけど、普通この時間にお腹が空くものだろうか？

俺はただ驚いて、自分の耳に聞こえたのが本当に長田さんのお腹の音なのかと見つめる。

「すつ、すみません。今日は朝も昼も食べてなくてっ」

「じゃあ、何か食べる？ お腹すいてるなら、何か作るよ？」

そうやって俺はキッチンに向かって歩き出し、ふっと何がいいか

なと思つて立ち止まると、背中にドンつと衝撃が走る。振り返るとすぐ後ろで長田さんが鼻を押さえているから。

「大丈夫ですか、長田さん？ 何が食べたいですか？」

大丈夫かと顔を覗きこむと、長田さんの僅かに桃色に染まった頬と吸い込まれそうな程澄んだ瞳が間近にあつて、ドクンドクンと胸が高鳴りだす。

こんなにくすぐ側で彼女の温もりを感じ、ふわりと彼女から漂う甘い香りに誘われて 気がついたら彼女を抱きしめていた。

## 第18話 誘惑フレグランス

初めて抱きしめた彼女の体は想像以上に細く柔らかくて、体の中心がざわつく。軽く手を回したただけなのに、すっばりと包みこんでしまえる存在に愛おしさを感じ、彼女の体からは甘く芳しい匂いがして、長田さんの耳元に口を寄せる。

「長田さん、さ」

自分が今どんな行動を取っているのか考えもせず、ただ感情のまま言葉にする。

「はっ、はい!?!」

「いい匂いするね。甘くて 食べちゃいたくなるな」

本気に食べるつもりはなかった。それは本当。  
ただ、そう言って覗きこんだ長田さんの表情が真っ赤になって、慌ててる様子があまりにも可愛くて、しどろもどろに言葉を呟き目を瞑ったのを見て 現実の状況に引き戻される。

この状況で目を瞑るのは、反則じゃないだろうか？  
押さえていた理性がすごい勢いで吹っ飛びそうになりながらも、そんな行動を取った後長田さんが拒絶するだろうことにすぐに思い至り、理性を慌てて連れ戻す。

最近、やっと俺に笑顔を見せてくれるようになった長田さん。  
家に誘った時も、即答で頷いてくれた。

その信頼を裏切りたくなくて近づけた顔を離し、さっきの行動を誤魔化すために長田さんの髪の毛の一房を掴んで顔の近くに持っていく。

「やっぱり、蜂蜜だ」

平静を装い言う。掴んだ長田さんの髪は僅かに光り、そこから甘い匂いがしている。

「どうしたんですか、これ？」

笑顔を作りながら聞いた俺を、長田さんは大きな目をぱちぱちと瞬かせる。

「長田さん？」

いつまで経っても何も言わない長田さんの顔の前に手をかざすと、ぱつと顔を上げる。

「えっ、わっ……」

「ここ、髪の毛に蜂蜜ついてるみたいだけど、どうしたんですか？」

「えっ、蜂蜜……？ あっ、あのですね、お米がないって言ったら友達が食パンをくれて、ハニートーストが食べなくなっただけです」

「ハニートースト、ってあの一斤まるごと使って上にアイスとか生クリームとかが乗ってる？」

「はいっ」

言いながらハニートーストを思い浮かべているのか、長田さんがうつと目をとるかせている。その顔を見て、気付かれないように笑みを漏らす。

「それで、上に蜂蜜をかけようと思ったんですけど、うっかり冷蔵してカチコチに固まってしまった」

「ああ……」

冷蔵して固まった蜂蜜　それは大変だと苦笑する。

「でも、どうしてもハニートーストが食べたくて、仕方なく鍋で火をかけて湯せんしたんです。蜂蜜はちゃんと溶けたんですけど……容器がもろくて鍋の中で爆発して……あちこちに蜂蜜をぶちまけてしまつて……きっとその時についたんだと思います」

「なるほど、よく見ると服にもついてるし……」

長田さんの服や髪や腕が所々光っている。そこに蜂蜜がついているのだろ。俺は長田さんの手を掴み上に向ける。

「肘にもついてる」

言いながら、顔の目の前にある肘をぺろんと舐める。

「んー、甘い」

そんな俺の行動を呆然と眺めていた長田さんは、少し唇を尖らせてふてくされたように言う。

「久我さんって実は　甘党なんですね」

「ああ、そうだね。よく、わかりましたね」

ふてくされた顔も可愛く思えてしまつて、首を傾げて笑う。

「じゃ、夜食はハニートーストで決まりだね」

そう言って、改めてキッチンに向かった。

先にお風呂に入った長田さんが、おやすみなさいと言ってゲストルーム入ってから一時間ほど仕事をして一段落ついた俺は、寝室に着替えを取りに行つて風呂場に向かう途中、ゲストルームの前で立ち止まった。

扉一枚隔てた向こう側で、彼女が寝ていると思うと胸がざわつく。扉の横の壁にもたれかかり天井を仰ぐ。

今頃になつて、自分のした行動が十分大胆だったという気がしてきて、ため息をつく。

すぐ側に彼女がいると思うと触れずにはいられなくて、理性と感情の狭間で揺さぶられて 感情に負けた自分に、もう一度ため息をつく。それでも気分は浮かれて、風呂場に向かつて歩き出した。

翌朝、学校まで送つて行つた時の長田さんの様子は普通だったから、あの時のことを長田さんは気にしていないと思つていた。

それなのに、夕方バイトに来た長田さんは、事務所に入ってきた時にちらりと俺の顔を見た以外は俺の方を見ようとはせずに、棚に戻す資料を持って棚のある場所にそそくさと行つてしまった。

その場所は、ちょうど机が置かれている場所からは棚で隔てられた場所で、同じ事務所にいるにも関わらず、ずっとお互いの姿を見

ないままで時間が流れていった。

俺は話しかける口実にお茶のペットボトルを二本買い、長田さんがいる事務所の奥に向かった。

「長田さん」

資料の整理はほとんど終わったのか、床にはもう資料が置かれてなくて、長田さんが握りしめているのが最後のようだった。

ただ、長田さんはネジの切れたねじまき人形のようにぴたりと動きを止めていて、その肩に手を置いて声をかけると、あからさまに驚いたようにビクツと体を震わせて振り返るから、俺の胸はちくりと痛む。

「あつ、ごめん、驚かせちゃった？」

「いえ……どうしたんですか？」

「少し、休憩しませんか。今日はずっと書類整理して立ちっぱなしで疲れたでしょう？」

そんなあからさまに困った顔をされると、俺もどうしたらいいかわからなくなってしまう。

「はい、そうします……」

小さな声で長田さんが言ったから、俺はキッチンに置かれたダイニングテーブルの方へ歩き、机の上にペットボトルのお茶を置いた。

「じゃあ、こっち頂きます」

買ってきたのはココアとマンゴーティー。長田さんがどんなものが好きなのか分からなかったけど、ハニートーストが好きだと言っ

ていたのを思い出し、甘い飲み物を選んでみた。

長田さんは迷わずマンゴーティーを取ったから、それが好きなのだろうと勝手に思い込んでしまった。

まさか、嫌いだとは知らずに

俺の気のせいではなくあの日から、俺と長田さんの間には微妙な空気が流れていた。

挨拶もする、仕事もいつも通り手際がいい　それなのに、俺とは目を合わせないし、話しかけようとすると逃げられる。

だから、せめてもの繋がりにと、長田さんの好きなマンゴーティーを毎日買うようにした。お茶を渡す瞬間だけは、俺の方をちゃんと見てくれるから。

だけど時間は無情に流れ、父が退院してから一週間。いい加減仕事復帰すると決めた父に、明後日の月曜から事務所に戻ると告げられ、明日の赤坂店の一周年パーティーが長田さんと一緒に仕事をする最後の日となる。

俺はお茶を渡しながら、長田さんに言う。

「社長は明後日から復帰することになりました。退院後、念のため自宅で療養していましたが、いい加減復帰したいと言うので、月曜日から戻ることになりました」

その瞬間、最近では見ることのなかった、輝くばかりの笑顔を見せるから　　なんだか胸が切なくなる。

社長が復帰すると聞くと、そんな嬉しそうな顔をするんですね

そういえば、社長が退院した次の日も、満面の笑みで事務所に出勤してきたな……あれはもしかして、社長がいると思ったから……？

そう思うと胸が苦しくて、いつものように嫌みも言えなくなってしまう。ただ、沈んだ気持ちを悟られないように、強がるのが精一杯だった。

「……それで私が社長代理を務めるのは明日までとなりますが、明日行われる赤坂店の一周年感謝パーティーの受付を私とあなたがすることになっています。明日はスーツで来て下さいね」

「はい、わかりました。ところで、久我さん……」

長田さんが手元を持ったマンゴーティーを見つめて。

「買って頂いてこんなこと言うのもあれなんですけど、私、マンゴーティーって苦手なんですよね……」

その言葉が、とどめの一撃とばかりに胸に突き刺さる。

「そうですか、それは気が効かなくてすみませんでした」

怒りを隠すように笑顔を貼りつかせ、だけど、言葉に棘を含ませずにはいられなかった

胸が痛む

恋とはなんとも恐ろしい病のようだ。

自分がこんなに長田さんの言葉に一喜一憂して、切なくなるなんて

もう取り繕うのも誤魔化すのも限界で、それ以上長田さんと顔を合わせているのが辛くて

「僕は、明日の打ち合わせをレストランとしてきますので、遅くな

ると思います。なので、君は定時になったら上がって先に帰って  
て下さい」

そう言って、逃げるように事務所を後にした。

## 第19話 出会わない運命

言葉では伝わらず、行動を起こせば拒絶される

近くなったと思ったら、遠ざかる

胸にざわつく気持ちを抱え、それでも、平静を装って仕事に向かわなければならなかった。

昼間、いつもだったら長田さんもいる事務所に今日は一人きり。

夜に赤坂店の一周年パーティーがあり、今日はその手伝いだけを頼んでいるから長田さんは事務所には来ないのだ。

だけどそのおかげで気が散らずに集中して仕事ができている。今日で社長代理の仕事も終わり、今日中にやっておきたい仕事は山ほどある。

それに、まだ、長田さんと顔を合わせて平静でいられる自信がなかったから

夕方、少し早めに事務所を出て赤坂店に向かう。

今日でもう長田さんと普通に会うのが最後だと思つと、どこか冷静になれる自分がいた。

キッチンでシェフとパーティーの最終打ち合わせをしていると、店の入り口から長田さんが入ってきたのが見えて、声をかける。

「長田さん、おはよう」

姿を見ただけで、心が温まる

今はそれだけで十分だったから、いつもどおりに笑いかけた。

「おはようございます……」

長田さんが体の前でぎゅっと手を握りしめているのを見て、苦笑が漏れる。

「シェフ、受付の説明をして来るので、また後でもいいですか？  
長田さん、こっちに」

前半はシェフに、後半は長田さんに言って店の入り口に置かれた長テーブルに移動する。初めて見る長田さんのスーツ姿は新鮮だった。

一通り受け付けの説明をした後、その場を長田さんに任せて、テーブルの配置や今日の段取りを確認するためにマネージャーに声をかける。

「準備はどうですか？」

「あつ、久我君、久しぶり。テーブルの配置はこんな感じにしてみただけど」

「ええ、いいと思いますよ」

「今日の段取りはスタッフにちゃんとやってあるから大丈夫よ。あとは料理を中央のテーブルに運んで……」

そう言ったマネージャーの視線の先を追って振り返ると、受付に  
いるはずの長田さんがせつせとキッチンから大皿料理を運んでいる。

「葵生ちゃん、本当に働き者ね」

マネージャーの言葉に微笑む。

「それに比べてうちのスタッフは……こら、お喋りしないで料理運ぶの手伝って！」

マネージャーは腰に手を当てて、奥で話し込んでいるホールスタッフに声をかける。マネージャーに怒られ慌ててキッチンに向かうスタッフを見送って、振り返ったマネージャーがため息をつく。

「まったく……事務所の方は大変じゃない？ まあ、葵生ちゃんがいるから大丈夫か」

長田さんがいるから

「ええ、なんとか。明日からはまたレストランに復帰するのでよろしく願いますね」

そう言って、にこりと微笑む。

長田さんが相手じゃなければ、こんなにスマートに対応できるのに。長田さんがいるから心中穏やかに事務所で仕事出来なかったと思いつつも、平気で気持ちを隠せるんだ。

それなのに、長田さんが目の前にいると、こんなにも自分が自分でなくなってしまう

そのことに改めて気づいて、情けなくなる。

パーティーの始まる少し前から受付に立ち、招待客の受付をし、名札を渡していく。招待客は取引先の業者様などで、時間通りに来る人もいれば、仕事終わりに来るため遅くなる人もいる。そのため一時間程立っただけ。

受付に来るお客様もまばらになり、そろそろ受付を終えていいか

なと思った時。

「マツクのポテト食べたい……」

隣に立っている長田さんがぼつりと小さな声で言うから、苦笑が漏れる。

「横にはご馳走があるというのに、食べたいのはマツクですか」

「悪かったですね。私は庶民だから、あんな豪華な料理は食べ慣れていないんです。それよりもあの塩味のきいたポテトが……」

言いながら、何を想像したのか妖しげに指先を動かすから、その姿が可愛くて笑みがこぼれる。

「あつ、笑ってないですよ」

長田さんがぱつと俺の方を仰ぎ見るから、慌てて口を押さえただけで、笑いをこらえられなくて笑ってしまった。

その後、取引先の社長が来て俺は挨拶をしながらホールまで案内し、受付に戻ってきた時には　もう長田さんの姿はそこにはなかった。

一カ月一緒に働いた仲なのだ、それも今日で終わりです。  
せめて帰る前に一言くらい挨拶する義理はあるんじゃないか

そう心で詰りつつも、俺と長田さんは出会わない運命だったんだ  
そんな風に運命のせいにして投げやりになっている自分がいた。  
もう嫌だったんだ。自分の感情を上手く操れなくて、感情に翻弄  
されるのは

だから今日で、長田さんへの気持ちを諦めようと思った

レストランに戻ってから一週間。

事務所にいた間のプランクを取り戻すためにがむしゃらに働き、  
レストランと家の往復だけ、料理以外のことを頭から締めだして、  
ただただ仕事に打ち込んだ。

ふっと、店内に聞きなれた懐かしい声が聞こえた気がして顔を上げると、ホールを横切る見覚えのある後ろ姿、揺れる長い髪に目が釘付けになる。

長田、さん

そうか、皿洗いのヘルプで来たのか。そう思うと、頬が緩んでしまったけど、状況は何も変わっていなかった。

ちょうど手を止めた時、洗い場にいる長田さんと目が合ったが  
長田さんは瞳はキョトンとさせて首を傾げる。

あっ、気づいて いないのか!?

なんで ?

どうして、気付かないんだ !?

気持ちは焦って苛立ったが、今は仕事で話しかけることは出来ない。だから、長田さんを視界から追い出し、仕事に集中するしか

なかった。

もちろん、いつもの傾向で長田さんがランチタイム終了前には事務所に戻ることも分かっていた。それでも話しかけられなかったんだ

その後もヘルプで来る長田さんは俺に気づかない。誰かと似ているとすら思わないのか、話しかけても来ないし。

一度は諦めようと思った、けど

そんなに簡単に諦められるほどの気持ちではなくて。

もしも出会わない運命だというならば　そんな運命なんてこの手でぶち壊してやる。

自分から会いに行くまでだ

## 第20話 君が華なら、僕は蜜という名の毒

俺が社長代理を辞めてから三週間が経った日、新作メニューの試食に社長と一緒に長田さんがやってきた。

その時も、キッチンにいる俺達スタッフに会釈をした長田さん。目が合ったのに、全く気付いていない様子だった。

だから、料理をすべて食べ終わりキッチンにいるシェフと社長が意見交換をしているのを確認して、俺はホールへと出た。

店内、キッチンに近いソファ一席に長田さんが時間をもてあましたように座っているのを見つけて、声をかける。

「お飲み物のお代わりはいかがですか？」

何と声をかけるか迷って 無難に、そう言った。

俺だと気づいていないと分かっているけど、普通に話しかけて、誰ですかとか言われたら傷つきそうだったから

顔を上げた長田さんは、じーっと俺の顔を見た後、ふわりと微笑む。

「大丈夫ですよ、もうお腹一杯なので。あの、はじめまして。私、以前に何度かお皿洗いに来たことがある長田と言います」

そう言われて 予想通りの反応だったけど、ここの度も“はじめまして”と言われると、ほんと傷つく。俺って、そんなに長田さんにとって印象が薄いのだろうか？

俺は痛む胸にぎゅっと眉根を寄せ、それから仕方なく言う。

「はじめまして……」

じゃないけど……

心の中で呟いた時、長田さんの瞳が揺れて。

「こ……が、さん……?」

桃色の艶やかな唇から摘むがれた言葉に嬉しくて、切なくて苦笑する。

「やっと気づいたんだね」

言いながらコック帽を脱いで、脇に抱える。

「レストランに来た時もまったく僕に気づかないで、約一カ月一緒に働いた仲なのに、君は本当に薄情だな」

本当はそんなことを言いたいわけじゃないのに、つい嫌味な言い方になってしまう。

「まったく、君は……」

そう言った時

はらりと、長田さんの頬を綺麗な雫が伝ったのを見て、俺は声を失った。

その時、社長とシェフがホールに現れる。社長は長田さんが泣いているのを見て片眉を上げ、俺を見る。

「翔真　お前が泣かしたのか？」

その口調は静かだったけれど責められているようで、眉間に皺を刻む。でも反論できなくて。

すると長田さんが俺を庇うような発言をする。

「久我君も今日は上がってくれて構わないよ」

「翔真、遅いから葵生ちゃんを送ってあげなさい」

「わかりました、お先に失礼します。長田さん、支度してくるから少し待ってて」

社長とシェフに頭を下げ、俺は着替えるためにロッカールームに向かった。

やっと勇気を持って話しかけたのに泣かせてしまって、そのまま別れるのは嫌だったから、社長に言われなくても送っていくつもりだった。

手早く着替えてホールで待つ長田さんの元に行く。

「長田さん、お待たせしました。車まで少し歩くけどいい？」

街灯の明かりだけの薄暗い夜道を、俺は長田さんの斜め前をゆっくりと歩く。

店を出てから長田さんは一言も話さなくて、俺も、なんて切り出そうかと迷ってなかなか言葉にできなくて。

後ろで長田さんのため息が聞こえて振り返ると、視線があつてしまった。

俺は勇気を振り絞って、話しかける。

「長田さん、さっきどうして泣いていたの？」

こんなこと聞いていいのかと戸惑いながら言うと、聞き返されてしまったから言葉を変える。

「レストランで会った時、本当に僕のこと気づいてなかったの？」

「はい、すみません。本当に全然気づかなくて」

言いながら長田さんは俯く。

「ひどいな、長田さんは。そういえば、社長が復帰するって聞いた時、すごい嬉しそうにしてたよね。社長が戻ってきたら、僕のことなんか忘れちゃった？」

長田さんの言葉で直接聞くと、より一層鋭い切れ味で、俺は傷つきながらも平静を保つために、皮肉気味に言う。

こんなこと言って傷つくのは、俺自身なのに

「そんなに僕のが嫌い？」

そう言ったことに自分で驚く。だけど、長田さんはもっと驚いたように戸惑った顔をしていて。

「えっ……」

答えてくれないから、俺はわざとらしくふんって鼻で笑って斜め

に見おろす。

「そういえば、僕のことインケンとか言っていたね？」

「言いましたね、そんなこと。でも本当のことじゃないですか、今だってネチネチネチネチ、私のこといびって……」

腕を組んでそっばを向いて言う長田さんの言葉に、思わず笑ってしまった。

「くっ……くっくっ……」

俺って、好きな子にはこんな意地悪だったんだな。こんな自分の性格、初めて知った。

冷静に長田さんと話している自分を観察して、自分の新たな一面を知ってしまった。

好きな子に意地悪するって、小学生のガキじゃあるまいし……俺って、幼稚だな。

そんなことを考えて、笑いが込み上げてくる。笑いすぎてお腹は痛いし、目には涙も浮かんでいる。そんな俺を、長田さんはキョトンと見上げてくる。

「あははっ……ごめん。笑ってないよ？」

そう言いつと、長田さんはあからさまに唇をとがらせて言う。

「めちやくちや、笑ってるじゃないですか。ほんと、久我さんって謎ですね」

「謎？」

長田さんにとって、俺って謎なんだ……？

俺は長田さんの方が謎だけど……

「そうですね、突然機嫌が悪くなったり、そうかと思えば良くなったりするし、突然笑いだすし」

「くすくす」

そうなのか、俺。そんな態度を長田さんには取っているんだな。

「ごめん、長田さんのことを笑ったわけじゃないよ。長田さんの言う通りだと思って。俺ってなんて、性格悪いんだろうと思ってね」

笑いながらも、自分でそう言ったことで、新しい自分の一面を受け入れられた気がする。

俺のことをじーっと見つめる長田さんに一歩近づいて、顔を覗きこむ。母親譲りの蜂蜜色の髪が揺れる。

「こんな俺のこと……嫌い？」

首を傾げて長田さんに聞いたんだけど、長田さんは驚いたように目を見開いたまま、どこか遠くを見つめて、しばらくして俺から視線をそらした。

「長田さん？」

黙り込んだ長田さんの顔を再び覗きこみ、声をかける。

瞬き、俺を見つめた長田さんは、震える小さな声で言う。

「嫌いなのは……私のこと嫌いなのは、久我さんの方じゃないですか？」

「長田さん……?」

「いつも言うことは厳しいし、笑ったところは見たことないし、笑ったかと思うとそういう時は怒ってるし……」

言いながら瞳が潤み、ぼろぼろと頬を涙が伝う。それでも、長田さんは俺をまっすぐに見つめる。

「でも、時々すごく、優しく、され……る、から……私、は、久、  
我さんの、こと、きつ……嫌い、じゃ、ない……です」

その瞬間。

俺は長田さんを抱きしめていた。硝子でできた宝物のように大事に大事に、優しく包みこむように

「ごめん……優しく出来なくて……ごめん。自分でもこんな感情は初めてで戸惑っているんです。自分がこんな風になるなんて……」

言いながら夜空を仰ぎ、長田さんを抱きしめていた腕を緩める。視線を下げると、すぐ側で長田さんが俺を見上げていて、こんな情けない自分を見られていると思うと恥ずかしい。心なしか、顔も赤いような気がする。

それでも、俺は一番伝えたかった言葉を、ふわりと笑って言った。

「好きです、あなたにだけなんです。こんな自分で自分の感情をコントロールできなくなったり、感情と態度がちぐはぐになってしま  
うのは。初めて会った瞬間から、長田さん、あなたに惹かれていま  
した」

それなのに

「それって……私を好きってことですか？」

キョトンとした顔ですぐに聞き返され、苛立つ。

俺、今、確かに好きだって言ったのに。聞いていなかったのか…

…？

口角を上げ、にこりと微笑む。それは苛立つ気持ちを隠す極上の笑顔。

「そう、言いましたよ、最初に」

長田さんはびくりと肩を震わせて、一歩後ずさる。それでも、それ以上は逃げずに、きつと瞳を鋭くし反論してくる。

「うっ、嘘ですね。だって、そんな風には見えないじゃないですか。もう、私のことからかうのはやめてください。そーゆうことは他の人にしてください」

怒りを露わにふいつと横を向く長田さん。だけど、そんな怒った顔も可愛くて。

そんなことを冷静に考えていた俺は。

「久我さんのそーゆう態度は毒です！ 公害です！ 毒にやられるこっちの身にもなっ」

そう言った長田さんの腕を掴んで引き寄せて、文句を紡ぐその口にキスをした。

たった数秒の出来事だったが、ゆっくりと唇を離した俺は長田さんを見つめ にんまりと笑う。

「好きですよ、長田さん」

公害で結構。

毒で結構。

俺流の愛情たっぷり笑顔で、長田さんだけに向ける愛の言葉を、  
囁く

第20話 君が華なら、僕は蜜という名の毒（後書き）

これにて、翔真視点のお話は完結です！

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次話からは続編というかんじで…… side 2 を更新します。

6話ほどの予定ですので、よかったら読んでみてください。

誤字などありましたら、お知らせください。> m ( ) ( ) m <

事務所でパソコンに向かってしていると、机の横にかけた鞆の中で携帯が振動しているのに気づいて、キーボードに乗せた指を止める。

視線をパソコン画面に固定したまま右手だけでキーを押し、前かがみになって左手を鞆の中に突っ込んで、携帯を探り、携帯ストラップを握って引っ張り出す。

コイン大の猫のぬいぐるみのストラップには鈴がついていて、軽快な音色を響かせる。

私は相変わらずパソコンに視線を向けたままで携帯の画面をパチンと開き、ようやく視線を正面から左手に移す。

さっきの着信は思った通りメールで、私はため息を一つついてからメールを開く。

『 From : 久我さん

こんにちは。今日は早番で二十時には上がれます。家まで送るので、バイトが終わり次第レストランに来て下さい』

という久我さんからのメール……

うーん……、突っ込みどころが満載でどこから突っ込んでいいやら……

私のところになぜ久我さんからこんなメールが届いたかというところ

三日前

「好きですよ、長田さん」

天使も慌てて逃げ出すような妖しく麗しい微笑みの久我さんがそう言った。

だけどその笑顔は、いつも裏に怒りや嘘を隠している時に向ける笑顔だつて知っているから、怖くて信じられなくて

でも有無を言わせぬ鋭い視線で見つめられて。

わかるよね　そんな無言の威圧に怯えて、私は慌てて首を縦に振った。

それから車に乗った久我さんは鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌で、本当に家まで送ってくれた。その様子を見ていたら、とてもさっきの言葉が嘘だったとは思えなくて　でもあれが告白とも思えなくて

私は家に着くまでの間、ずっと頭が混乱しっぱなしだった。

家に着くと、車から降りてきた久我さんが小さなメモを渡してきた。

「これは？」

そこには携帯番号とアドレスが書かれていて、久我さんの連絡先だとは分かったんだけど、なんで渡されたのか疑問に思うと。

「なにかあったら連絡して下さい。僕からも連絡しますから」

そう言われたけど

久我さんは、私の連絡先を知ってるの？

その疑問が頭から離れなくて、私は家に帰ってからすぐに久我さんのアドレスを携帯に入力して、手ばやくメールを打つ。

『To: 久我さん

長田です。今日は送って頂きありがとうございます。気をつけて帰って下さいね。おやすみなさい』

そう送っただけだ。返事はなくて、音沙汰なしであれから三日が経った。

家に送ってくれるのは嬉しいけど、私の予定とか聞いてくれないのね……

まあ、予定なんて何にもないし、ちょうど今日のバイトは十九時までだから後片づけして電車に乗って赤坂に向かったらちょうどいい時間かもしれないけど、ずいぶん勝手じゃない？

私は返信をせずに携帯を閉じて、机の端に置く。

私にどうしろと？

っていうか、私と久我さんって、今どうゆう関係なの？

あの日、嫌いかって聞かれて、嫌いじゃないって答えて、好きって言われて、信じられなくて。

でも私は、インケンで嫌味で恐ろしいほど妖艶に笑う久我さんが好きで

信じていいのかな、久我さんの言葉……

久我さんが私のことを好きって言ってくれた　　ってことは、私達両思い！？

……

……

待って！ 私……言っ……

私は久我さんに好きって言っ……ないじゃない……！  
その事実初めて気付いた私は、愕然する。

だめじゃん！ ちゃんと言わなきゃ ってか、この際、はつきりさせるべきでしょ！？

顔を上げ壁掛け時計の時間を確認すると、時刻は十二時少し前だった。私は顎に手を当てて。

うーん……

しばらく悩んだ後、決意を込めた瞳で一人頷き、立ち上がった社長席に近づいて静かに声をかけた。

「あの、社長。お願いしたいことがあるのですが」

壁掛け時計の時刻は十六時を過ぎたと。

「それでは、行ってきますっ！」

私は今日中にやらなければいけない仕事をすべて終えて手早く机の上を片づけ立ち上がる。肩にかけた鞆の持ち手を握りしめ、正面に座る社長に言う。

「はい、気をつけて行ってらっしゃい」

社長は穏やかな笑顔で私を見送る。

「はいっ！」

私は意気込んで言い、外に駆けだした

五十分後、事務所に戻ってきた私は社長に声をかけ、事務所の奥に籠り、それから更に一時間三十分後。

「コレ、社長用に砂糖少なめで作りました。今日、我が儘を聞いて頂いたお礼です」

そう言っつて私は社長の机の上に小さな箱を置く。

「私の分も作っつてくれたんですか？　ありがとうございます」

社長がにこりと笑うから、私もつられて照れ笑いする。

社長が喜んでくれて良かった。社長つて　お父さんみたいなんだよね。うちはずつとお父さんと二人で暮らして、私はお父さんのことがすつごく好きでべたべたに甘えて。でもお父さんは、私が十四歳の時に事故で亡くなった

事務所で初めて会つた社長は、柔らかい雰囲気とか話し方とかどことなくお父さんに似てて、聞いたら年齢も一緒だし、お父さんのように慕っている。社長も、私くらいの子供がいるからつて、ただのバイトとしてじゃなく、葵生ちゃんつて名前で呼んですごく良くしてくれて。まあ、あの時はその子供つてというのが、久我さんのことだとは知らなかつたけど

そう考えて、あんなお父さんのいる久我さんが羨ましくなる。いな、久我さんはお父さんが側にいて。

まだまだ先だけど　いつか、私が結婚する時は、お父さんと一緒に教会のバージンロードを歩くのが夢だつたのに　そんな私の夢は、もう叶うことはない。

じわり……視界がにじみ、慌てて目元を拭う。

私はあの後事務所を出て、今は電車の座席に座って赤坂に向かっている途中。こんな電車の中で泣くなんて恥ずかしいでも、お父さんのことを思い出したら急に寂しくなって、涙が溢れる。

大きく左右に揺れ、電車が減速していく。

「赤坂ー、赤坂ー」

扉が開き、ホームに放送が流れ、私は慌てて立ち上がり電車を降りた。手にはしっかりと鞆と小さな紙袋を持って。

赤坂駅を出て赤坂見附方面に歩いて十分くらい、そこにクル・ドゥ Cour  
e u r d u m i e l 赤坂店がある。

お店の前に着いて、お店に入るかどうか迷う。

なんとなく、久我さんと待ち合わせてるっていうのを、シェフと他のスタッフの人に見られたくなくて躊躇する。その時、鞆の中で携帯が鳴りだす。

取り出すと久我さんからの電話で、慌てて通話ボタンを押した。

「はいっ……………」

『あつ、長田さん？』

そう言った久我さんの声は戸惑っているように聞こえた。

「はい」

『今どこ？』

「今？ お店の前に着いたところです」

言って、携帯を耳から離して携帯画面を見ると二十時十二分。

『そうですか。メールの返事がないから、来ないのかと思いました』  
「あっ……」

その言葉には少し棘が含まれているのを感じつつ、メールの返事をしてなかったことを思い出して、口に手を当てる。

「すみません……忘れていました」

『そう……ですか。で、今、店の前なんですね？ 僕は今終わったところなのでこれから着替ええますから、店の中で待って下さい』

「えっ、店の中で……ですか？」

『そうですよ、外で待たせる訳には行きませんからね』

「はい、わかりました」

そう言われたら従うしかなくて、電話を切ってそおっとお店を覗き、それから店内に足を踏み入れた。

「いらっしやいます」

人の気配に奥からマネージャーが現れて、私はお辞儀する。

「こんばんは、あの……」

なんて説明すればいいのか……そう頭の中で必死に考えていると。

「ああ、久我君のこと待ってるのよね。彼から聞いてるよ、渡す書類があるんですってね。葵生ちゃんも大変ね、あっ、そっちの席に座ってていいからね」

「えっ、あっ、はい。ありがとうございます」

なに？ 仕事の用事があるってこと……なってる？？

わー、久我さんらしい。さすが、インケンでそつがない！

インケンは関係ないけど、私の中で久我さんっていったらまず“インケン”が最初に思い浮かぶんだもの……

席に座って待っているとすぐに久我さんが現れて、私をじろりと見下ろす。

なっ、なに……もしかしてインケンっとか考えてたのバレてる！？  
怯える私に向けられた久我さんの鋭い視線が、ふっと和らぎ。

「お待たせしました。じゃ、行きますか？ お疲れ様です」

そう言っただ店の入り口に向かい、シェフや他のスタッフに挨拶する久我さん。

気づくと、すでに入り口の所で扉を開けて私に来るのを待っているから、慌てて後を追った。

第22話     i n   y o u r   h e a r t   2

店の外に出て三日前にも歩いた駐車場に向かう道を歩く。斜め前を歩く久我さん、その後ろをついていく私、そして流れる沈黙。

三日前の状況がそのまま、ここに……

確かあの時は……

そう考えて、無意識に人差し指を下から上に動かし、その先を視線で追って顔を上げると、振り返った久我さんと視線が合う。

その顔は無表情で、どんなことを考えているのか読みとることが出来ない。そう思うと、嘘つき笑顔でも感情が読みとれるだけマシかも……なんて思えてくる。

「長田さん……」

久我さんが何か言おうとして口を開いて、躊躇いがちに言葉を切る。なんだかその先を聞くのが怖くて、私はぱつと視線をそらして斜め下を見て、手に持っていた紙袋を前に突き出す。

先手必勝っ！

「コレ……受け取ってくださいっ」

そう言うのが精一杯だった。

「なに？」

って聞かれても答えられなくて。

だって、この方法しか思いつかなくて……

プロを目指している料理人相手にこの方法はどうかだなんて、あの時は全く考えなかったんだもの。今になって、なんて失敗したんだろうと思うと、恐ろしくて久我さんの方を見られない。私はびくびくしながらただ紙袋を差し出す。

「貰っていいの？」

そう聞かれて、視線をそらしたまま勢いよく頷く。それでようやく、久我さんが紙袋を受け取ってくれた。

私はぎゅっと瞑っていた目を恐る恐る開けて、斜めに久我さんを見上げたら、今受け取ったばかりなのに、紙袋の中に入ってた箱を取り出して開けてみているから

ぎゃっ！

体を震え上がらせて、久我さんの反応を待つ。

「コレは……？」

私は覚悟を決めて、久我さんにまっすぐ向き合う。

「あの、チョコレートケーキを作ってみたんです……」

そう言いながらも、やっぱり目を合わせているのが恥ずかしくて、体の前で合わせた手を揉み、視線をだんだんと下へ下げる。

実はあの時

「あの、社長。お願いしたいことがあるのですが」

「ん？ なあに、葵生ちゃん」

「はい、今日の休憩を最後に回して、出来れば少し早めに上がったいのと……事務所のキッチンを使わせてもらえませんか？」

ダメもとで、そう言う。

好きって伝えてないって気づいて  
どうやって伝えようかと考えて

思いついたのが、ケーキを作って渡そう　ということだった。  
私にも一つだけ作れるケーキがあるから、そのケーキと一緒に気持ち  
を伝えようと思ったの。

じーっと私を見ている社長にもう一度声をかける。

「あの、ダメでしょうか？　ちゃんと今日中にやらないといけない  
仕事はやるので、お願いします」

私は頭を下げようとしたんだけど、それよりも先に社長がにこり  
と笑う。

「いいですよ。その代わりに、一つ、聞いてもいいですか？」

「えっ……と、なんですか？」

「それは、翔真に関係することですか？」

そう聞かれて、私はドキリとする。

えっ、なんで？　社長はなにか、気づいてるの………？

「えっ、あの……」

社長は私の顔をにこにこことほころばせて見ている。

ばれている……そう思ったら、かぁーつと顔が赤くなるのが自分でも分かった。私は俯いて。

「はい……久我さんに関係、あります……」

「ふふっ、そうか。じゃあ、今日の報告は今度聞けるかな？」

そう言って笑った社長の笑顔は、久我さんが笑った顔と似てて、今更だけど親子なんだなと実感した。

もちろん、社長の笑顔は癒し系で、久我さんの嘘つき笑顔とは全然違うけど、初めて私の中で二人が親子だと繋がった瞬間だった。

それから私は必死で今日の仕事をして、十六時頃事務所の近くのスーパーにケーキの材料を買いに行き、事務所の奥にあるキッチンでフォンダンシヨコラを作ったの。

唯一、頭の中にレシピが入っているケーキだから、手際良く作る。それで、久我さんの分と一緒に社長用に甘さ控えめのを作って、事務所を出る前に渡したのだった

チヨコレートケーキを渡して一緒に気持ちを伝えて、はつきりさせるんだ　って決めたの。

「久我さんに食べてほしくて作ってみたんです、けど……好きじゃないですか？」

そう言って久我さんを仰ぎ見る。

久我さんは手に持ったチヨコケーキの入った箱を見つめているんだけど、そんなに見られたら、恥ずかしい……

だって、買出しに行った時にハート形の型が売っていたから、ついそれを選んでしまったんだもの。

ハート形の手作りケーキなんて……あからさまに好きだって言っているようなものだから、恥ずかしくて顔が赤くなる。

それでも、自分で言っってはつきりさせなくちゃ

「……好きだよ、ありがとう」

チョコケーキを　　って意味だとは分かるけど、はつきり確かめたくて。

「私も好きなんです……久我さんのこと、が……」

久我さんはその言葉を聞いてどう思っているのか、目をゆっくりと瞬く。

こんな言い方ずるいとは思ったけど、なんだか素直になれなくて。

「久我さんは私のこと、嫌いですか……？」

久我さんのあの日の言葉を使ってしまった。

でも、私がそう言った瞬間、久我さんの瞳にすっと妖しい光が瞬いて、にこりと笑うの　　天使も慌てて逃げ出すような妖しく麗しい微笑みで。

どうして、ここで嘘つき笑顔なんですかあ　　！？

夜でもわかるサラサラの蜂蜜色の髪が街灯に照らされて輝いている。久我さんの端正な顔でそんな風に笑われると、より一層美しさが際立って……とつても怖いんですよー！

だってだって、怒っている時の笑顔だって、私は知ってるから。

私、何かまずいこと言った？

怒らせるようなこと言った???

私が久我さんのことを好きだなんて言ったから……？

じり……一歩後ろに後ずさる。

その瞬間、久我さんが私よりも長い足で一歩私に近づいて、その距離が一気に縮まる。その顔はキラキラの笑顔で、でも目が怒ってるんだ。

嫌あ！

なんで私、こつ地雷ばっかり踏んじゃうの！？

「あつ、あの……」

私はとにかく久我さんの怒りを鎮めようと、なにかいい訳しようと思ったのに、怖すぎて言葉が出てこなくて。

「長田さん……」

そう言った声も、いつも以上になんか甘くて、背筋が震えてしまう。久我さんが優しい時って、怖いんだものお

すつと、久我さんの大きな手が私に近づいてくるから、ビクツと肩を震わせる。やだっ、ぶたれるの！？

そう思っでぎゅっと目を瞑って、次に来る衝撃に備えたんだ  
けど。

ぼんって

頭を優しく撫でられる感触に、恐る恐る目を開けて久我さんを仰ぎ見ると、久我さんが困ったように見下ろしてくるから、強張らせてた体の力をすつと抜く。

「ごめん、怖がらせるつもりじゃなかったんだ。ただ俺が言ったこと、長田さんが信じてないみたいだから……」

そう言って口を押さえた久我さんはため息のような声を漏らす。

「あー……」

僅かに頬を染めて、まるで照れているみたいな久我さんをきよとんと見つめる。

「俺は長田さんのこと嫌いじゃないよ？　好きだって、前に言ったでしょ？」

「はい、言われましたけど……」

なんだかそんな久我さんが可愛くて、さっきまでの怖さが吹っ飛んでいつもどおりに返事をしてしまう。

「でも、信じられなくて……だって、あの時の久我さん、とっても目が怖くて……」

そう言って、あつと口を押さえる。

わあー、またこんなこと言ったら、怒られるっ！

そう思ったのに、久我さんは。

「くっ……くっくっ」

って、笑っているから呆気に取られて。

なんだかこの展開も三日前と同じような……

「ごめん、そうだね、確かにちよっと怒っていたかも」

ちよっと？

ちょっとっていうレベルじゃなかったような……

「でも、それは長田さんが悪いんだよ？ 俺のことイラつかせるから」

「それってつまり、久我さんは私のことが嫌いだということ……」

思わず心の声を漏らしちゃって、でももう慌てることはなく、久我さんをまっすぐに見つめる。

「違うよ」

そう言った久我さんの瞳は真摯で、とても嘘を言っているようには思えなくて。

「言ったでしょ？ 俺は長田さんが好きだよ。長田さんは？ さっきの言葉は、そのまま受け取っていい？」

私はゆっくりと、でもしつかりと頷く。

「はい……私も久我さんのことが好きです」

ちゃんと言葉にした瞬間、私の心の中でその言葉が呪文のように広がって、胸がぎゅんつと締め付けられる。

頬を染めた久我さんが少し皮肉気に笑って、私の頬に触れそつと私の唇に久我さんの唇を重ねたの。

私はまさかキスされるとは思わなくて目を大きく見開いて、端正な久我さんの顔のアップを見つめ、自分の唇に触れるやさしい久我さんの唇の感触に、呆然とする。

「そんなに見つめられると、照れるな……」

唇を離した久我さんはそう言って、極まりが悪そうに斜め横に視線をそらす。

そんな久我さんの表情は新鮮で、ただただ眺めていると。

「長田さん、俺とつきあってくれますか？」

そう聞かれて、返事をしようとしたんだけど。

「ただ……長田さんを前にすると俺は緊張して、優しくしてあげられない時もある。感情に任せて怒る時もあるかもしれない……」

緊張……？ あの妖艶な嘘つき笑顔は緊張……していたから？

そう思うと、なんだか久我さんが可愛く思えてしまう。

あー、私も久我さんも素直じゃないんだな。そう感じて愛おしくて。

「いい訳に聞こえるかもしれないけど、これだけは信じてほしい。俺は長田さんのことを心から愛しているよ」

その言葉に、ぎゅーっと胸が締め付けられる。

そんな風に言われたら、信じるしかないでしょ

「はいっ」

私はたくさんさんの愛をこめて、最高級の笑顔で答える。

「いちちらいぞ、よろしくお願いします」

久我さんってまだまだ謎なところが多いし怒ると半端なく怖いけど、でもそんなところもすべてひっくるめて久我さんで、そんな久我さんを私は好きになったのだから

もっともつと久我さんのことを知っていきたいと、心の底から思ったの。

## 第23話 いつか訪れる日の二人

「美味しいね、葵生ちゃん」

向かいの席で本当に美味しそうに食べる社長は、机の上に手帳を広げて色々メモしている。

社長とはよくこうしてご飯を食べに行くんだけど、その時はいつも社長は手帳にお店の名前や食べたメニューや感想などをメモしている。きっと職業柄、どんな料理があるのかとか気になるんだろうな。

しかし、社長に報告しないといけないことがあるからこうして一緒にご飯を食べに来たわけだけど……なんて切り出したらいいのかわからなくて、なかなか言い出せない。

だって、本当のお父さんにも好きな人の話なんてしたことないのに……

二日前、私が久我さんに“好き”とまだ伝えていなかったことに気づいて、バイトの時間を融通してもらった時。

「ふふっ、そうか。じゃあ、今日の報告は今度聞けるかな？」

久我さんとそっくりな笑顔で社長が言って

その報告をしなければと思って、近くに美味しいお店を見つけたという口実でご飯に誘ったのだ。

「社長、あの……この間のことなんですけど……」

もう、どうしてもいいか分からない時は直球で言うしかないよねっ！

「私、久我さんとお付き合ひさせて頂くことになりましたっ」

一息に言い切り、ふうーと息をはく。

目の前に座った社長は、目を丸くし、それからふわりと柔らかい笑みを浮かべる。

「そうか、おめでとう。翔真は優しくしてくれる？」

いつかも聞かれた問いかけに、私は照れた笑いを浮かべる。

優しい　そう言ったら嘘だけど、嫌味でインケンなだけじゃなく、本当は優しいところもあるって今は知っているから。

「えへへ……」

私は笑って誤魔化する。

「二人、仲良くしなさい。翔真は不器用なところがあるからね、何かあったら私に相談してもいいんだよ、葵生ちゃん」

「はい」

社長の優しい言葉に、私は心が温まる。

もしもお父さんが生きていたら、お父さんもこんな風に言ってくれたかな　そんなことを考えて。

「それにしても、息子の交際宣言を葵生ちゃんから聞くとはね……  
ふふっ」

社長が苦笑するから、私は首を傾げて。

「社長と久我さんって一緒に住んでないんですよね……？」

確か、社長の奥さんは昔亡くなったっていうのは聞いたことがあるけど、それ以外はあんまり知らないんだよね。

「そうだね、もうかれこれ五年になるかな……」

「えっ、そんなに!？」

「ああ、別々に住んでいるのは、翔真が十八歳の時、私が日本に来てからだからね」

日本に来てからって……どこから???

「えっ、社長は日本人ですよね……？」

私がキョトンとして聞き返すから、社長も驚いた顔をしている。それから苦笑して。

「そうだけど。あれ、言っただけでなかったかな? 以前はフランスに住んでいたんだよ。妻 翔真の母はフランス人でね、翔真はフランスで生まれ育ったんだよ」

「えっ!？」

つまり、それって……フランス人とのハーフってこと……?

じゃあ、あの蜂蜜色の髪は染めてるんじゃないやなくて地毛ってことで……

「翔真から聞いていない? 翔真は日本には何度か来たことはある

けど、こんなに長期間留まるのは初めてだからね。私はなかなか一  
緒に過ごす時間を持ってなくて、翔真には寂しい思いをさせているか  
もしれないから、葵生ちゃんが力になってくれると嬉しいよ」

フランス生まれ、フランス育ち……

「……のくせに、あんなに日本語が上手なんて、詐欺ですっ！」

思わず心の声が漏れてしまって、力強く言うと、社長がくっくつ  
……で笑いだして。

わぁー、そんな笑い方まで久我さんと似ている。

そう思いながら、ついむきになってしまったことが恥ずかしくて、  
興奮していた気持ちがしゅーっと急激に覚める。

「くっ、くっ、くっ、翔真が葵生ちゃんに構いたくなる気持ちがわ  
かるね」

社長ったら癒し系のふわふわした笑顔でそんなこと言うから、な  
んだか照れてしまう。

「んー、これで翔真が葵生ちゃんと結婚してくれたら、葵生ちゃん  
が本当の娘になってくれて嬉しいなあ」

わっ、それって、なんて素敵なアイデアなんだろう！

社長が本当のお父さんになるなんて、すごい嬉しい！

「いいですね、それ」

久我さんとはやっと気持ちを伝えて付き合いたしたばかりで結婚  
なんてまだまだ現実味がなくて、“久我さんと結婚”ということに

ドキワクするよりも、“社長と親子になる”ということの方が魅力的で、私はにこりと笑い返した。

第23話 いつか訪れる日の二人（後書き）

「彼氏のお父さんに交際報告」ってカンジで（^^）  
葵生と社長の2人のシーンです。

## 第24話 ラビリンス×ラビリンス

社長代理を務めてから一カ月と少しが経った。あれ以来、時間がある時は事務所の仕事を手伝い、俺は本格的な経営の勉強を始めた。そのせいで、俺は仕事と経営の勉強、長田さんは大学とバイト、お互い忙しくて付き合いはじめたというのになかなか会う時間がなく、電話やメールは慣れなくてあまりせず。大抵の場合は夕飯を一緒に食べるか俺の家に遊びに来るかで、デートらしいデートもしていなかった。

まあ、俺の家に遊びに来るというのも問題なのだが会えるのが仕事上がりの遅い時間だから俺の家以外に行くところがないというのも理由の一つだが、付き合い前に事情があつて長田さんを俺の家に泊めたことがあつて、そのせいか長田さんは警戒心なく俺の家に来るし泊るのも平気そうで……俺は正直、いつまで自分の理性を保てるか自信がなかった。

でも部屋で、お互い課題や仕事をしたり一緒に映画を見たり、そんな風に過ごすだけなのに長田さんが嬉しそうにするから、余計に吹っ飛びそうになる理性を繋ぎとめることに必死になった。

そんな時、珍しく長田さんの方から食事に誘うから、嬉々として仕事を終わらせて待ち合わせの場所に行ったんだが

「どつして父さんがここに……」

案内された席には父さんが座っていて、俺は眉間に皺を寄せる。父さんとは月に一、二回一緒に食事をするし、最近では事務所で

も顔を合わせて、以前よりも会うこと多くなっただが 今日、父さんも一緒だとは聞いていなかった。

「やあ、翔真。葵生ちゃんに誘われてね」

「長田さんに……」

どうして……そう疑問に思って呆然と席の前に佇んでいると、お手洗いに行っていたのか、長田さんが席に戻ってきた。

「あつ、久我さん、こんばんは」

言って頭を下げながら長田さんが迷わず父の隣の席に座るから、胸がざわつく。だけど、父がいる手前、なんとなくいつものように笑顔で誤魔化すことも出来なくて、渋々、二人の向かい側の席に座った。

長田さんと父は一緒に一つにメニューを広げて、これが美味しそうとか、これ頼もうとか楽しそうに話している。その様子を俺はメニューを見る振りをして横目で見つめる。

「久我さん、今日は車ですか？」

メニュー表を机に立てて顔を少し隠して言う長田さんに、俺は視線を向ける。

「いや、違っけど……？」

「そうですね、よかったです。あの、社長から久我さんはお酒が好きって聞いてて、でも今まで私と一緒にの時はお酒飲んでいるとこ見たことがなくて、遠慮させてしまっているのかと思って……それで今

日は居酒屋さんを選んでみました。私と社長はお酒のお供は出来ないので、久我さんは遠慮せずに飲んで下さいね」

にこりと、メニュー表に隠れて頬を染めて笑う長田さんが可愛くて、その気遣いも嬉しくて、俺は頷く。

「わかったよ、ありがとう」

今いるのは大手チェーン店の居酒屋。店に入る時、長田さんがどうして居酒屋を選んだのか疑問に思っていたが、そうゆうことだったのか。

しかし……父さん、余計なことを……

確かに、俺は酒は好きだし、人よりも飲む方だと思う。だけど俺が今まで長田さんの前で飲まなかったのは、理由があるんだよ……でも長田さんが気を使ってくれたのに飲まない訳にもいかず、俺は適当にアルコールを頼んだ。

料理が運ばれてくると、長田さんは取り分けたり食器をまとめたりと手際よくて、そんな姿に呆然としてしまう。

なぜって？

俺と二人の時はそんなことしないから……

それに心なしか、いつもより長田さんは笑顔だし、よく喋るよう  
な……

「葵生ちゃん、この明太子入り卵焼きは美味しいね」

「はい、社長。あっ、こっちのギョウザ鍋もおいしいですよ。あつ、隠し味はポン酢ですかね……？ 食べて見て下さい！」

二人はにこにここと美味しそうに料理を食べながら、会話が弾んで

いく。

あまりに二人が仲さそうにしているから、実の父ながら……妬けてくる。

長田さんがギョウザ鍋を入れた器を父の方に置いた時、熱かったからか一瞬眉をひそめ、素早く手を離れたから器がカタカタと揺れて、汁がこぼれそうになる。

「長田さん、ゆっくり置かないとこぼしますよ」

俺は苛立つ気持ちを隠して、呆れ気味に言う。

「あつ……はい……」

その瞬間、長田さんがしゅんと悲しそうな顔になる。  
なっ、なんでそんな顔するんだ……

「葵生ちゃん、火傷はしなかったかい？」

「あつ、はい。大丈夫です」

父が長田さんの手を掴んで、長田さんは頬を染めてはにかむ。

「翔真、もう少し優しくしてあげなさい」

父が威厳のある声で俺をたしなめる。

確かに、俺の言い方がきつかったのは事実で、俺が悪かったのも分かっている、だけど……

俺はなんだか素直になれなくて、横を向く。

「翔真、女の子には優しくしなさいと、いつも言っているだろう？」

いつもだったら素直に聞ける父の言葉も、今日はなんだか癪に障って……

「していますよ。俺は俺なりに、ちゃんと」

「そうか？」

「あの、社長、私、大丈夫ですから。久我さんはいつもこんな感じですよ……」

そう言って、俺を上目づかいでちらりと長田さんが見る。

「だいたい、付き合っているのに“長田さん”“久我さん”ってお互い名字で呼ぶのはどうなんだ？ 翔真、ちゃんと名前で呼んであげなさい」

「父さんこそ、図々しいんじゃないですか？ 初対面の中から、娘くらいの歳の女の子を名前で呼ぶなんて」

初対面の中から呼んでいる　そう聞いたわけではないが、おそらくそうだと予想して俺は言う。

「いいじゃないか！ 娘くらいの歳なんだから、初対面から名前で呼んだって」

やっぱり……

いい年して父さんは、“女性”相手にはすごく優しくして、そんなだから今でもすごくもてるってというのは知っている。

「葵生ちゃんは嫌だったかい？」

捨てられた子犬のように目じりを下げていう父に、長田さんが顔の前で思い切り手を振って否定する。

「えっ……ぜんぜんそんなことないですよ？　むしろ嬉しいくらいで……」

って。いちお“上司”相手に、長田さんが嫌だなんて言う訳ないだろ。

「ほら。だいたい、フランスでは、ファーストネームで呼び合うなんて普通だろ？」

得意満面の顔で父が言う。

「ここは日本だろ？　日本人は奥ゆかしい、初対面から慣れ慣れしい態度をとってはいけないって教えたのは父さんだろ？」

「そんなこと、言ったかな？」

今度は開き直る。俺は頭に来て、一気にまくしたてるように言う。

「C'est avoir l'intention de pr  
?tendre ne se pas souven  
seu  
lement lorsque je dis donc. Es  
t-ce que c'est adulte . . . . .  
prendre la responsabilité? pou  
r sa chose que j'ai dit? Je re  
garde le pré, je corrèctement,  
et dit .」

つい、フランス語で……

長田さんは目を丸くして俺を見ている。父は呆れたようにため息をつき。

「翔真、父さんと話す時は、日本語で。母さんと、そうゆう約束だろっ?」

そう　俺はフランスで生まれ育ったが母さんの希望で、父と俺の間の会話は日本語で、それ以外の人　母、母方の祖父母などとはフランス語で会話するように育てられた。そのおかげで生まれて二十二年間フランスにおいて日本には数回しか来たことがなくとも、支障がない程度に日本語が話せる。

　　だけど感情が高ぶるとついフランス語で話してしまうのは、フランス語が一番慣れ親しんだ言語だからで……

「父さん、ずるいじゃないか……。日本語で言い合って、俺が父さんに勝てるはずがないんだ……」

ふてくされて言うと。

「くすくす」

　　つて、長田さんが笑っているから、俺は瞠目して言葉を失う。  
　　なっ……

「あつ、ごめんなさい。私の前ではいつも久我さんって大人っぽいのに、社長の前だと普通の子供みたいで……」

長田さんに、子供って言われてしまった……

「あの、悪い意味じゃなくて、久我さんにもそんな一面があるって知って納得しました。それにしてもいいですね、社長みたいなお父さんがいて。久我さんが羨ましいな……」

そう言った長田さんは、どこか切なげで……

まだまだ長田さんのことを、俺は知らないことが多いと実感した。

「この機会に、名前で呼び合ったらどうだ？」

いまだに、父はその話題を続行するつもりで、にこにこ人当たりのいい笑顔を浮かべている。

我が父ながら、この穏やかな気性が羨ましいと思う。俺のこの感情的になりやすい性格は母譲りなのか？

「葵生ちゃん、翔真って呼んでみたらどうだい？」

「えっ……」

話を振られた長田さんが、顔を真っ赤にして俯き。

「しよっ……翔真、さん？」

そんなことを言っつて、ちらりと上目づかいで俺を見るから

その表情が、仕草が、あまりに可愛すぎて胸がドキンとする。

あ

高鳴る胸の音を誤魔化すように、にこりと極上の笑みを貼りつける。

「なんですか、葵生？」

父さんが“葵生ちゃん”と呼ぶならば、俺は長田さんのことを“葵生”と呼ぶぞ。

平静を装って父に挑戦するように言った俺を、長田さんは目を白

黒させて見、父はふふつと余裕たつぷりの笑顔を見せる。

その笑顔にすべてを見透かされているようで、俺はまだまだ  
というか一生、父には勝てそうになくて、ぐるぐると乱れる心を抑  
えることで精一杯だった。

第24話 ラビリンス×ラビリンス（後書き）

翔真と社長の親子らしいやりとりを書きたくて、この話を書いてみました。

## 第25話 ハッピーシトラス 1

「素敵ですね。好きな人とずっと一緒にいられるなんて……」

赤坂店のスタッフが結婚し二次会を赤坂店のレストランでやることになり、手伝いに来ていた葵生がそう言った

“結婚”

そんなこと今まで考えたこともなかったが葵生のその言葉を聞いて、俺が結婚を考えるとしたら相手は葵生だけだと思っただし、隣に立つ葵生もそう思ってくれているといいと思った。

でもまだ今すぐにといいわけではなく、近い将来、いつかそんな風に少し考えただけだった。

あの手紙がくるまでは……

「葵生、僕と結婚してください」

七月末、付き合い始めて二年 その記念日に横浜に出かけ、夕暮れの大さん橋ふ頭で俺は葵生に言った。

暮れかかるブルーの薄闇の中に周りの建物が黒く浮かび上がり、ライトの明かりがキラキラと宝石のように輝いている。隣で埠頭の手すりから身を乗り出すようにして景色を眺めていた葵生に、俺は

一世一代のプロポーズをした。

こんなことを自分が言う日が来るとは思わなかったからすごく緊張して胸は飛び出しそうな勢いで跳ねるし、俺を仰ぎ見た葵生はなんだかいつもよりも綺麗で、視線をそらしたくなる衝動を必死で抑える。

葵生は大学三年の夏。これから就職活動や卒業論文で忙しくなる時期で、俺も本当はこんな時期にプロポーズする予定ではなくて、だから、断られる覚悟でこんな風にしか言えなくて、情けなくて。それなのに

「はい、よろこんで！」

返ってきた返事はなんとも予想外で、なんとも軽い感じで、俺は啞然とする。

「えっ、いいん、ですか……？」

思わず聞き返してしまうほどあっさりとおＫの返事をもらってしまったから、どう反応していいか分からなくて困ってしまう。

葵生は両手を胸の前で握り締めてウキウキとしている……ように見えるから、OKと言ったのは気のせいじゃないのか……？

「はいっ」

葵生はにこりと微笑んで頷く。

「それじゃ……一緒にフランスについて来てくれますか？」

「えっ……？」

俺の言葉に、キョトンと葵生が目を見開いて首をかしげた。

先週、フランスの旧友であるセドリックから手紙が届いた。セドリックとは家が近くて小学校から大学までずっと一緒に通った幼馴染というよりも兄弟と言った方がしっくりくるような関係で、大学では一緒に経営学を学び、いつか自分のレストランを持つのが夢だとお互いに話した仲で、そのセドリックから一緒にレストランを経営しないかという誘いの手紙をもらった。

セドリックが経営、俺がレストランのシェフ。気心の知れたセドリックとならやれそうな話だった。

父と一緒にレストラン経営をするというのが夢だが、それはいつでも出来るというか。

日本に来て本格的に料理を勉強し、経営と両立して……将来、俺は経営よりも料理人としてプロを目指したいと、最近感じ始めている。

父と一緒に クル・トゥ・ミエル Couleur du miel で働くのが嫌なわけではないが、シェフを目指すならいつかは自分の店を持ちたいそんなことを考えていた時にセドリックから手紙が届き、心が揺れていた。

何より、フランスに戻るといことは葵生と遠く離れてしまうこととで

日本で父と一緒に働き、葵生と一緒にいるか。

フランスで親友と店を持ち、葵生と離れてしまうか。

頭の中でいくつもの葛藤を繰り返して答えを出した。

一緒にフランスについて来てくれないか　そう言った俺に、葵生はしばらく考えさせてと言った。

葵生がついて来てくれるか、来てくれないか

どっちの答えだったにしろ、自分の答えはもう出ている訳で。

葵生にも、ちゃんと時間をかけて考えてほしくて、じっくり考えて一週間後に返事をくれるように言った。

フランスへの出立は二週間後。

父にはすでに俺の考えは伝えてあるから、レストランの仕事が終わると事務所には寄らずにすぐに家へ帰り、フランスへの荷造りを始めた。

一週間後、足りなくなつた材料を取りに従業員用のロッカールームに行った時、部屋の中から葵生の声が聞こえて、ドアノブにかけた手の力を止める。

「えっー、久我君にプロポーズされたの!？」

驚いた様子のマネージャーの声が聞こえる。

「それで何て返事したの？」

「はいつて即答してしまつて……」

「えー、おめでとう!　じゃあ、結婚するんだね!？」

「いえ、それが……」

そこで葵生が言いよどみ言葉を切る。

「久我さんに結婚って言われて、私の頭の中ではイコール社長がお父さんになるって考えにすぐに結びついてたんです。だから、はいって答えちゃったんですけど……」

「あはっ、葵生ちゃん、社長のこと本当のお父さんみたいに慕ってるものね」

「はい……それで後になつて“久我さんと結婚”って改めて考えたら、もう頭の中がパニックで、どうしていいか分からなくなつて。おまけに、一緒にフランスに来て欲しいだなんて 私どうしたらいいのか分からなくて……」

その言葉に、胸がざわりと騒ぎ出す。

「今更、プロポーズの返事を取り消すことも出来ませんし……」

葵生は沈んだ声で言い、語尾が小さくなる。

俺自身、どうしてあんなにあっさりとかの返事を貰えたのか不思議だったが、葵生は俺との結婚にOKしたのではなく、俺と結婚することで社長が父親になることが嬉しくて頷いただけだったんだ

衝撃の事実には俺は愕然とし、ドアノブにかけたままだった手に力が入り、ギィーと軋んだ音を出して扉が開いてしまった。

その音に振り返った葵生と視線が合い、俺は胸の内できすぶる感情をいつもの様に笑顔で隠すことも出来なくて、怒りの感情を露に眉根を寄せて葵生を見つめた。

「あっ……」

突然現れた俺に話を聞かれていたことに気付いて、葵生が泣きそうな顔で俺を見る。

苛立たしくて、悔しくて、切なくて　一言では言い表せない感情が胸に押し寄せて、俺はすつと葵生から視線をそらした。

視線をそらした瞬間、葵生が切なげに顔を歪めたのに気付いていたが、俺はそれすらも無視して、ロッカールームの椅子に座る葵生とマネージャーの横を無言で通り過ぎて奥の棚に向かい、必要な材料を取ってすぐに踵を返す。

「あつ、翔真、さ……」

瞳を潤ませて葵生が何か言おうとしていたが、聞こえない振りをして足早に部屋を出た。

今日、本当は仕事後に葵生と会いプロポーズの返事を聞く予定だったが、すでに答えを聞いてしまったし、今、葵生には会いたくない……

今会つと、さっきみたいに胸に燻る苛立ちを露にってしまうのは確実で、どんなにひどい態度をとってしまうか自分でも想像がつかない。それに、振られて落ち込んでいる無様な姿を見られたくない。葵生に簡潔に会わないとメールをして自宅にまっすぐ帰った。

はあー。

電気も付けずに自宅のリビングのソファに深く腰をかけ、両膝

の上に肘をついて上半身を前かがみにし、床を見てため息をつく。  
カーテンの開いた窓から月明かりが差し込み、薄っすらと室内を照らしている。

両手をぎゅっと握り、額に拳をつけたり離したりして、もう一度ため息をつく。

葵生と一緒に二年を過ごし、自分の中から気持ちが溢れるほど葵生を愛していたなんて……振られて、立ち直れないほど落ち込んで初めて気づくなんて、かつこ悪すぎだ。

愛しているのに気持ちを受け入れられないというのは、こんなに辛い事なんだな……

自分、葵生に会いたくない　　というか、会えないと思った。  
フランスへの出立まで一週間、荷造りもほとんど済ませ、後はレストランでの仕事をするだけだ。シェフに言えば、数日早くフランスに立つことも可能かもしれない。

合わせる顔がないのなら、早く、日本を離れたかった

そう思い立つたらいってもたっても居られず、シェフに連絡をするため、立ち上がり電話に手を伸ばした。

## 第26話 ハッピーシトラス 2

葵生の言葉を聞いてからなんだか投げやりに日々を過ごし、予定よりも二日早い便でフランスに戻ることにした。

俺は黒いスーツケースと手持ち鞆を左手に、右手には二十一時五十五分発パリ行きチケットを持って成田空港の四階、チエックインカウンターを目指して歩く。

時刻は二十時になるうとしている。

チエックインカウンターで搭乗手続きを済ませ、夕食でも食べようかと思った時、携帯のディスプレイが光っているのに気づく。

最近、葵生からの着信を無視するために、音もバイブレーションも切っているから、メールや着信があってもすぐには気づかないし、極力携帯も見ないようにしていたから、ぜんぜん気づかなかった。もしかして

その気持ちを隠して恐る恐る携帯を開くと、二件の着信と一通のメール。

八月五日十八時〇二分 着信 葵生

着信は予想通り葵生と、それよりも早い時間に……

八月五日十六時五十四分 着信 父さん

予想外に父さんからの着信だった。

父さん 何の用事だったんだ？

そう思いながらメールを開くと、そこに答えがあった。

From: 父さん

電話が繋がらなかったので、急ぎ、用件のみ伝えます。

さつき、葵生ちゃんが成田空港に向かうと言って事務所を出ました。

お前達、どうなっているの？ 葵生ちゃんは翔真がフランスに行ったらもう戻って来ないと勘違いしているようだけど、フランスには一週間だけ戻ると伝えていないのか？

とにかく、空港でちゃんと会って話しなさい！」

そんなメールで、色々と驚く。

あれ、俺、フランスに行くのは一週間だけって伝えてなかっただろつか……？

あっ、そういえば、フランスと一緒に来てとしか言っていないかも……

予想外にプロポーズに即答されて動揺していて、なんでフランスに戻るのかとか説明していなかった。

俺は立ち止まり、顔を伏せてぐしゃぐしゃと頭をかく。

ロビーを歩く人たちが、急に立ち止まった俺を不審な視線で見ながら避けて通り過ぎていくけど、そんな視線も気にならなくて。

あー。

上げた顔は情けないくらいにやけていて、緩んだ口元に手を当てる。

そうか、葵生が空港に向かっているのか……

会わなければ

そう思った時、手に持ったままだった携帯が着信を知らせて光っていることに気づく。

ディスプレイを見ると着信は葵生からで、急く気持ちとは裏腹にゆっくりと携帯を開き通話ボタンを押す。

「もしもし……？」  
『……………』

電話に出たのに返事がないから一旦携帯を顔から離し画面を見て、通話中であることを確認する。確かに繋がっていて、もう一度話しかける。

「もしもし、葵生？」

『……………、翔……………真……………さんっ！ 今どこですか！？ まだ出発ロビーにいますか？ もう奥に、もう……………っ！？ 私、今、空港に……………着いて……………』

突然大きな声が聞こえて、思わず携帯を耳から離す。

葵生の声から緊張感や切羽詰まった様子が伝わってきて、胸がぎゅっと締め付けられる。

俺がフランスに行ってもう戻って来ないと思って空港まで駆けつけてくれた 勘違いからでも、それだけで嬉しくて心が暖まる。

「まだ、出発ロビーにいますよ」

俺はふわりと微笑んで言う。

『いまっ、改札出てエスカレーターに乗ったので、そのまま……………そこで、待ってて下さい！』  
「ああ」

走っているのかはああ息をつきながら喋る葵生に対して、俺は穏やかな口調で頷く。

『私、翔真さんに言わなければ、きやつ……………』

葵生の悲鳴のような声の後、ガシャンと機械的な音が響く。転んだか……？

「葵生？ 大丈夫ですか？」

余裕だった気持ちに不安が生じ、一步二歩と立ち止まっていた足を動かし、終いには駆け出す。

おそらく葵生は電車でここまで来たのだろう。だとすれば、あのエスカレーターを登ってくるだろうと推測して空港を駆け足で移動する。すでにスーツケースを預けた後で手持ち鞆一つだけで身軽な俺は、一目散にエスカレーターを目指した。

ちょうど俺がエスカレーター降り場に着いたとき、葵生がエスカレーターを上ってくる姿が見えて、自然と頬が緩む。

「葵生……」

「翔真さん……」

葵生が泣きそうな顔でエスカレーターを駆け上り、その勢いのまま俺の胸に飛び込んできたから、俺は両手を広げて抱きしめる。

ふわり。

腕の中の葵生から甘酸っぱい匂いが香ってきて、思わずくすりと笑いが漏れる。

「葵生、今日は何をこぼしたの？」

そう言いながら、葵生の頭に顔を埋め、髪の毛の匂いをかぐ。

本当は、今はそんなことはどうでもよくてもっと大事な話があっ

たし、葵生に合わせる顔がなくてフランスへの出発を数日早めたとかいうことも忘れて、久しぶりに感じる葵生の温もりと香りに胸が締め付けられて、いつものような言葉のじゃれあいでも言わずにはいられなかった。

「なんだか甘酸っぱい香りがするけど……もしかして、レモンシトラスジュース？ 蜂蜜の次はシトラスを髪に付けてるの？」

葵生の頭から顔を離し、髪の一房を掴んで鼻に近づけてくんとかぐ。

その俺の行動に葵生は目を白黒させ、それから下を向き、どんと頭を思い切り俺の胸に当ててきた。

「翔真さんはずるい……ずっと怒ってて、私のこと無視してたくせに、そんな笑顔見せるなんて。勝手にフランスに帰ろうとするなんてずるいつ。私、いっぱい言いたいことがあって急いで来たのに、そんな顔されたら、何も言えなくなっちゃう……」

全体重を俺にかけるように倒れこんでくるから、俺は葵生を支えるように、もう一度抱きしめた。

あー、このまま誤解なんて解かないで、フランスに連れて行っちゃいたいな……

そんなことを考えてしまった自分に照れて天井を仰ぐ。

だけど今は、葵生が空港に駆けつけてくれたことだけで満足しなければいけないと思ったから。

俺は葵生の頭をぽんぽんっと優しくなでる。

「ごめん、ずっと無視してて。葵生に振られた情けない僕の姿を見られたくなくて、ずっと会えなかった」

「えっ………違っ………」

葵生が俺を仰ぎ見て、すごい勢いで首を振る。

「違います、私、振ってなんか……」

その言葉に、俺は首をかしげる。

「だけど葵生は、プロポーズの返事を取り消したと言ってしまったよね？ いいんですよ、それで。僕も時期が悪いと思っていました。今はこうして葵生が空港まで来てくれただけで嬉しいです」

あの日言えなかった言葉を、俺は葵生をまっすぐ見て言う。

「あと、一つ誤解しているようなので訂正させて下さい。フランスには少しの間戻るだけなので、帰ってきたら、また仲良くしてくれますか？」

そう言って手を差し出した俺から視線をそらした葵生は、下を向いて肩を震わせてるから、どうしたのだろうと思っている。

ぱっと上げた顔はりんごよりも赤く頬を染め、きつと意志の強い瞳で見上げてくる。

「嫌ですっ!」

その言葉が胸に刺さる

そうか、振られたのにまた仲良くしてほしいなんて、ずっずっしいお願いだったか  
そう思ったのに。

「あの言葉はっ！ プロポーズの返事を取り消せないですよね、っ

て言ったのは、私、ちゃんと翔真さんに返事をしてなかったから嬉しかったんです。確かに最初、結婚なんて現実味がなくて、翔真さんと結婚イコール社長がお父さんになるってことでうきうきしてたのは本当です、すみません。でも、後で冷静になってみると、翔真さんがどんなに真剣に想いを伝えてくれたかが分かって、それに対して私はぜんぜんちゃんと答えられてなくて……つまり何が言いたいかというと、返事はYESなんですっ！ 私もフランスに行きますっ！……」

頬を染めて上目づかいで言う葵生が可愛くてその言葉が嬉しくて

俺は葵生を抱き上げて、驚いた顔で見下ろす葵生を見て口角を上げて微笑んで、肩の高さでぎゅっと抱きしめる。

「ありがとうっ」

嬉しくて幸せで抱きしめて葵生から香ってくるシトラスフレバーが幸せの香りに感じて、俺はふっと笑いを漏らして言う。

「それでやっぱり、こぼしたんですか？ レモンシトラスジュース」

嫌味な感じに言った俺から、葵生がぱつと顔を離して唇を尖らせて言う。

「違いますっ。今日レモンシトラスジュースの発注があって飲んだことがないって言ったなら社長が試飲していいって言うから、飲ませてもらって……」

「その時にこぼしたんですね」

俺は納得したように頷き、抱き上げていた葵生を床に降ろして、にやりと笑う。

そんな俺を葵生がふてくされた顔で見上げてくるから、ぼんぼんと頭をなで、尋ねる。

「それで、僕の聞き間違いでなければフランスに行くって言ったように思いますが？」

「あっ、はいっ！」

「パスポートは持ってるんですか？」

「なっ、ありますよ。高校の修学旅行でアメリカに行っただんですから！」

「ほお、修学旅行で海外とは、近頃の日本の学生は豪華ですね」

「それよりも、あのっ、フランスに帰るのは一週間だけって……」

葵生が先を急かすように聞いてくる。

「ああ、ええ。旧友から手紙が届いたんでね、久しぶりに会おうということになりました。日本に来てから三年間、一度もフランスには戻っていませんし、祖父母にも挨拶　葵生を会わせたいと思ったのでフランスと一緒に来てほしいと言っただんです」

「あっ、なんだ、私はてっきりもうフランスに行ったら戻ってこないのかと……」

「誤解させてしまったのは、ちゃんと伝えてなかった僕のミスですね、すみません。でも冷静に考えれば、分かるでしょう？　葵生はまだ大学が一年以上残っているんです、そんな葵生をフランスに連れて行くこうなんて思っていないですよ？」

そう言って、俺はくすりと笑って葵生を見おろす。

セドリックからレストラン経営の話を持ちかけられて、悩んだ結果 俺はその話を断ることにした。とても魅力的な話だったが、まだまだ、自分の店を持つには勉強不足だと感じたし、このまま料理人としても経営者としても中途半端なままCouléur du クル・ドゥ・ミエール mielの仕事を放り投げることは出来なくて。

#### 料理と経営

いつかはどちらかの道を選択するとしても、もう少し時間をかけて迷ってもいいかもしれないと感じたから。

セドリックにはすぐに電話で断りの返事をしたが、断るにしても久しぶりに会って話しがしたいと言われ、フランスに戻ることにした。

フランスに戻るなら、ついでに祖父母と母に葵生を紹介したくな  
って

紹介するなら、“彼女”ではなく、ちゃんと結婚を考えている相手だと伝えたくて、付き合ってから二年も経つし、葵生にプロポーズをするに至ったのだ。

「とにかく、フランスと一緒に行くならチケットを急いで取りましよう。まだ席が空いていればいいですが」

そう言って俺は葵生の腰に腕を回して促し、チェックインカウンターに歩き出した。

俺の腕の中でほのかに香るハッピーシトラスの香りに包まれて、

海を渡り母国に

幸せの香りを運んでいく。

第26話 ハッピーシトラス 2 (後書き)

話的にはここでハッピーエンド・完結ですが、もう数話お付き  
合います(一一)m

## 閑話 空港から

成田空港三階十七番搭乗口付近の椅子に、翔真と葵生が座っている。

二人は色々な誤解が解けて 無事に葵生のフランス行きの手ケットも取れて、搭乗口前でエールフランスAF二七七便パリ行きへの搭乗を待つ。

出発時刻まであと三十分。

そんな中、翔真が左手に携帯を持ち耳にあて、右手は葵生の手を握っている。その葵生は頬を染めて俯きがちにちらちらと翔真を見る。

プルルルル……

携帯から発信音が数回なった後、声が聞こえる。

『はい』

「あつ、父さん……ですか？ 翔真です」

自分から電話をかけて、相手が父だと分かっているのに、照れくさくてそう言ってしまう翔真。

『ああ、翔真か。葵生ちゃんにはちゃんと会えたか？』

「はい、父さんが連絡してくれたお陰で、葵生とすれ違わずにちゃんと会うことが出来ました。ありがとうございます」

『よかったな。それで、誤解は解けたのかい？』

「ええ、まあ……」

そう言っつて、翔真が視線を葵生に向ける。

「フランスと一緒に行くことになりました。それで、事務所のバイトなんです……」

翔真は躊躇いがちに言葉を切る。

『ああ、心配しなくていい。事務所は私一人でも大丈夫だから、葵生ちゃんと一緒にフランスに行つてきなさい』

「はい、ありがとうございます」

『その代わり……私の分も母さんによろしく伝えてくれよ』

「はい……」

翔真は頬を染めて、静かに頷いた。

閑話 空港から（後書き）

シナリオ風、空港での「コマ」です。

## 第27話 すれ違いフェイク

振り返ると、嘘つき天使のスマイルでもなく、怒りを露に魔王のごとく怒った翔真さんが扉の前に立っていた。

「あつ……」

その表情から、今マネージャーと話していた会話を聞かれたんだと悟って、弁解しようと口を開いたんだけど、翔真さんの顔があまりのも怖くて、殺気に満ちていて 喉まで出掛かった言葉を飲み込む。

目が合っていたのは確かなのに、翔真さんはすつと視線をそらすと何も言わずに部屋を横切り用事を済ませて出て行くこととする。

その態度が、後姿が、決して私を見ようとしない姿勢が、すべてから怒っているのは分かって、もう一度声をかけたんだけど。

「あつ、翔真、さ……」

ちらりとも私のほうを見もせず出て行ってしまった。全身で拒絶され、私は顔をぐにやりと歪ませる。視界は滲み、頬を涙が伝う。

こんな態度の翔真さんは初めてだ。怒っていてもいつもはそれを笑顔で隠す人で

だから余計に、本気で怒っていることが伝わってきた。

「葵生ちゃん、大丈夫……？」

声を押し殺して泣いている私に、マネージャーが心配そうに顔を

覗き込みながら声をかけてくれる。

分かっている。悪いのは私で、翔真さんが怒るのも無理がない。それくらい酷いことを言ってしまったのだから

「はい……」

なんとか嗚咽を飲み込み、手のひらで涙をぬぐって笑ってみせる。

「久我君、ちょっと誤解しちゃったのよ。ちゃんと話せば分かってくれるよ。ね？」

マネージャーの優しさに堪えていた涙が溢れてきて、ただ何度も頷いた。

『今更、プロポーズの返事を取り消すことも出来ませんし……』

そう言ったのは、返事を取り消したいからじゃなくて

あの時はただ、結婚イコール社長がお父さんになるってことに浮かれてて

翔真さんと付き合い始めた頃に、そうゆう会話を社長としたことがあって、そのことを思い出して頭がトリップしてて、ちゃんと“翔真さんのプロポーズ”に対する返事を出来なかったから、もう一度ちゃんと、自分の気持ちを伝えたくて……

嬉しかった

まさか、翔真さんが私に結婚してくださいなんて言ってくれるなんて思わなくて。私との結婚を真剣に考えていてくれたとは思わなくて

でも、フランスに行くというのは……急すぎる。

一緒に行きたい　　気持ちはそうでも、実際、そういう訳にはい  
かない問題があつて。

明日から八月で今は夏休みで大学の講義はないけれど、九月にな  
つたらまた講義が始まるし、就職活動だつて始まる。フランスに、  
ただついていくだけなんて　　できない。

せめて、大学を卒業していたら。

そんなことを考えてみるけど翔真さんにも事情がある訳で、タイ  
ミングが悪かった　　そう言ったら、それまでだけど、事実そうゆ  
うことで……

それでも、誤解されたままなのは嫌だから、ちゃんと自分の口か  
ら話そう。そうすれば分かってくれる、翔真さんはそうゆう人だか  
ら　　そう思ったのに。

夜、会う約束をしていた翔真さんから。

『今日は会えない』

ただそれだけの素っ気なく短い文章のメールが送られてきた。

それでもちゃんと話がしたかったから、次の日、会えるかメール  
をしたけど返事がなくて、電話もしてみたけれど……まるで避けら  
れるように電話にも出てもらえなかった。

翔真さんとギクシャクしたまま五日が経ってしまった。横浜に行  
った日、フランスには二週間後に発つと言っていたから、二日後く  
らいには日本から遠く離れた地に行ってしまう。だから、その前に  
どうしても会って話したいのに、相変わらず翔真さんとは連絡が

取れないまま、私は事務所に来てバイトをして、どんどん日が経ってしまった。

どうしたら翔真さんと連絡が取れるか　そんなことを考えながら今日も事務所でバイトをしている。

プルルルル……

電話が鳴り、机の左横に置かれた固定電話に右手を伸ばし、背筋を伸ばしてから受話器をとる。

「はい、株式会社クル・ドウ・ミエルです」

「赤坂店の渋谷しほやです。葵生ちゃん？ さっきファックスした発注表なんだけど」

「ちよっと待っててください……」

いまだに会社にかかってくる電話に出るのは緊張するんだけど、マネージャーからの電話と分かって私は伸ばしていた背筋から力を抜いて、受話器を左手に持ち替え、机の右側に置かれた棚からさっき赤坂店から送られてきた発注表を取り出す。

「はい、どうぞ……はい、はい。レモンシトラスジュースの数が訂正ですね。わかりました」

私は左手に受話器を右手にペンを持ち、発注表に訂正を書き込む。

「それからね……」

言いにくそうな声でマネージャーが言うから、どうしたんだろうと思う。

「久我君、今日来てないからどうしたんだろうと思ってシェフに聞いたら、なんか予定を早めて今日の便でフランスに帰ることにした

らしいのよ」

「えっ……」

「やっぱり知らなかったのね……葵生ちゃん、あれからちゃんと話せたのかなって心配で……」

「知りませんでした……久我さんにはずっと避けられてて連絡がとれなくて……」

「ここ数日の久我君、レストランでもなんか様子が変わったわよ。ぜんぜん笑わないし、明らかに沈んでる感じで。だからちゃんと話した方がいいと思っただけ、避けられてるって……もう夕方の便で発つみたいだし……」

「夕方の便って何時ですか？」

「えっと私は詳しくは分からないんだけど……あっ、社長は知っているんじゃない？」

そう言われて、私は知らせてくれたマネージャーへのお礼もそこに電話を切り、社長席に駆け寄る。

「あっ、あの、社長。こがっ……翔真さんが今日フランスに戻るって本当ですか？」

切羽詰って早口に聞いた私に対して、ゆっくりと顔を上げた社長が、目を一回、二回、瞬く。

「ああ、そう言っていたね」

いつも通りの口調で、それが？　っていうように社長が首をかしげる。

「何時ですか？　何時の便で翔真さんはフランスに戻るんですか！

？ 私、ずっと翔真さんと連絡が取れなくて……」  
「ん？ 確か、二十一時五十分くらいの便だったか……」

私は、横の壁にかけられた時計に視線を向ける。時刻は十六時四十分を少し過ぎたところ。二十一時五十分くらいの便ということは、二時間前には空港について……二十時半くらいには搭乗手続きを済ませて出発ロビーの奥に入ってしまう。そうしたら、本当にもう会えなくなってしまう。

今から事務所を出て、一度家によってパスポートとか必要最低限の荷物を作って、成田空港に向かったら……ギリギリ、二十時半には空港につける。翔真さんが出発ロビーの奥に入る前にどうにか捕まえて

頭をフル回転して時間を計算し、早口にまくし立てるように言う。

「私、まだ翔真さんに言わなきゃいけないことがあるんです。まだバイト中だって分かっているんですけど、今すぐ空港に行きたいんです。このまま永遠にお別れだなんて……嫌なんです、お願いします」

私は勢いよく頭を下げ、社長にお願いする。

「いいですよ、でも……」

社長がまだ何か言おうとしていたけど、私はその声も耳に届かなくて、慌ててやりかけの仕事を片付けて、鞆を取って事務所を飛び出した。

ただ、翔真さんに会わなければ　という想いだけで。

**第27話 すれ違いフェイク（後書き）**

第25話と第26話の間の話です。

第28話 エターナル

「父さんが葵生に代わってほしいそうです」

成田空港の搭乗口近くの椅子に座って電話していた翔真さんにそう言われて、私は恐る恐る携帯を受け取って耳に当てる。

「もしもし、長田です……」

翔真さんがフランスに行つて戻つてこない　そう勘違いして慌てて事務所を出てきちゃつたのを思い出して、面目なくて。

『葵生ちゃんかい？　ちゃんと翔真と会えて誤解が解けたみたいだよよかったよ』

「はい……」

『私が、翔真がフランスに行くのは一週間だけと伝える間もなく事務所を飛び出してしまってしまつから焦つたよ』

そう言つて、社長がぐすりと電話越しに笑う声が聞こえた。

そういうえば　確かに社長は事務所をあわてて飛び出す私に何か言おうとしていたのに、私ったら最後まで話を聞かずに飛び出してきちゃつて　そう思い出したら恥ずかしくて、かぁーっと自分でも分かるくらい顔が赤くなる。

「すみません、すみませんっ」

目の前に社長は居ないのに、ぺこぺこ頭を下げながら誤る。

「おまけに……」

事務所のバイトがあることをすっかり忘れて、勢いに任せて翔真さんとフランスに行くことまで決めちゃって。

『ああ、翔真から聞いたよ、一緒にフランスに行くそうだね』

「はい……すっ」

もう一度誤ろうとした私の言葉に被さって、社長が穏やかな声で言う。

『事務所のことは心配ないから、楽しんできなさい。一週間後、翔真と元気に帰ってくるのを待っているよ』

そんなことを、そんな優しい声で言われて、私はじわりと視界がにじみ。

「社長……」

ぎゅっと目を瞑って、私は言っていた。

「大好きですっ。お土産買ってきますね」

『あはは、ありがとう葵生ちゃん。無事に帰ってくるんだよ』

社長の耳に染み入る優しい声に酔いしれていて。

『じゃあ、もう一度翔真に変わってくれるか』

社長の苦笑交じりの声で、はっと我に返る

瞑っていた目をゆっくりと開けて横を見ると

キラキラの、天使も慌てて逃げ出すような麗しく眩しい微笑みを浮かべて翔真さんがこっちを見ていて、私はびくつと肩を震わせる。携帯を耳から放し、受話器の部分に手を当てて翔真さんを仰ぎ見る。

「ん？ 代わるんですか？」

そう言っただけを受け取った翔真さんは立ち上がり、私達が座っている椅子から離れたところに行ってしまった。しばらく話した後電話を切り、携帯を片手に持って戻ってきた翔真さんの顔は相変わらず嘘つき天使スマイルで、私は体を縮める。

「葵生の大好きな父さんが、お土産はエスカルゴチョコレートよりもガレットクッキーがいいと言っていましたよ」

その言葉に明らかに棘があつて、私は苦笑するしかなかった。

「搭乗が始まっていますよ。パリまでは十四時間のフライトですからね、搭乗前にお手洗いには行かなくて大丈夫ですか？」

「あっはい、さっき行つたので大丈夫です」

「では行きますか？」

そう言っただけ翔真さんをじいーつと仰ぎ見ると。

「まあ僕は……一度も大好きなんて言われたことがないからって気にしてはいませんよ」

ぼそりとそんなことを言うから、思わず声を出して笑ってしまっ  
た。

イケメンでインケンで、怒りを隠して美しすぎる笑顔を向ける人  
で、その強烈な毒に、最初はドキドキしたりビクビクしていたけど、  
慣れると

真っ直ぐで素直で可愛くて

蜂蜜色のあまーい毒にどっぷりとやられてしまったみたい。

私は数歩先を歩いていた翔真さんに駆け寄り、ぐいっとな肩に手を  
かけて耳元で囁く。

“翔真さん、大好きよりももっと、永遠に、愛していますよ”

第28話 エターナル（後書き）

これにて完結です！

## あとがき

### ストーリーについて

この作品、私の中では最短で書き上げた、一番書きやすい話でした。

アイデアを思いついたのは、飯田橋からの帰りの電車の中。同じ年くらいの社会人っぽい女性が隣に座ってて、私がもし今頃働いていたら……そう回想したところから始まります。

私が大学四年から妊娠前まで働いていたのが、この話の舞台である飲食店の事務所。事務のバイトを探してて、“食事つき”という条件に惹かれて始めたんです。つまり、主人公のモデルは私……になるのかな。

まあ、私が書く作品のほとんどの主人公が、私の経験からもしああたったら、こうだったら……って妄想を膨らませたものだけ。

事務所の設定とか社長の設定とかほとんどが実話で、そこに久我翔真というキャラを足してこの話が出来上がりました。

### キャラについて

まず、主人公の長田葵生ですが。

この作品の登場人物の苗字はある地方の地名からつけることは決めてて、地名をずーっと眺めてて長田おひたを見つけた瞬間、これだ！  
っと思ったのです。敏達びたつ天皇の異名の訳語田おきたの表記を長田だと思っ

ていたので、即決しました。

長田が“ながた”と読むのが一般的とは後で気づきました……先人観って恐ろしい。

下の名前は長田に合う名前で、かわいいなと思っていた“ああ”で音を決め、漢字も以前からいいなあと思っていたもので決定。少し男の子っぽい感じにしてみました。

葵生は、樂觀的だが負けず嫌い、タイピングが早いのが自慢で、料理は苦手、食べるのが大好きな女の子です。幼い頃に母を亡くし、父子家庭で育ったためお父さんっ子。父も十四歳の時亡くし中学卒業までは祖父母の家で暮らし、高校から一人暮らしを始めました。早くに自立してるため、意思は強くて、何でも自分のことはやれるけど……料理は苦手、なのに食べることが大好きという設定でした。だから、食事つきのバイトに惹かれ、翔真の手作り料理で胃袋がちり掴まれちゃったんですね。

事務所では、年齢も同じ、雰囲気も似ている社長を父親のように慕っています。自立してもまだ十八歳、寂しかったんですね。

社長も娘のように葵生を可愛がり、本当の親子のような感じで事務所では過ごしています。

久我翔真について。

この人の初期設定は、社長の息子、社長代理、二十三歳、物言いがきつい（思っていることをはっきり言うタイプ）、蜂蜜色の髪、美形 とだけ。

とにかく、イケメン・インケン・蜂蜜色の髪、そのイメージだけで書き始めて、最初は髪の毛は染めている設定で、side2を書き始めてから日仏ハーフという設定になりました。

本当にいつも設定もそこに書き始めて、キャラが動く通りに書き進めて、最後に辻褄合わせをする感じで……キャラに誘導されています……

社長について。

名前は久我銀司。作中ではほとんど出て来なかった名前です。この人も色々設定はありますが、一言で言えば“優しい理想のお父さん”という感じ。

翔真のことも葵生のこともよく見てて理解し、二人の事を暖かく見守るお父さんです。

社長が登場する第23、24話は書いていて楽しかったです。

レストランの名前の*Couleur du miel*（クル・ドウ・ミエル）というのは、フランス語で蜂蜜色と言う意味です。

奥さんも翔真と同じく蜂蜜色の髪だったことと、蜂蜜色のようなキラキラした時間を過ごしてほしいという意味でつけました。

ちなみに、第24話で翔真が喋っていたフランス語。あれは

「そうゆう時だけ、覚えていないふりするのには卑怯だぞ。自分の言ったことには責任を持つのが大人じゃなかったのか？ 父さん、俺をちゃんと見て言っ

て。ということ話を話していました。翔真の子供っぽい一面を書きたくて。

## タイトルについて

タイトルは甘ったるい名前にしようと思い、そこから「ハニー」を付けるのはすぐに決まって、色々考えて、『美しい花には棘があり、甘い蜜には毒がある』という言葉から、甘い毒 ハニーポイズン 『HONEY\*POISON 甘い蜜には毒がある』とな

りました。

## 話の順番について

書き進めている段階で。

side : AOの第11話と第12話の間に、どうして翔真が葵生を好きになったのかという裏付けのために翔真視点を書いて、その順番で更新しようかとも思ったのですが、葵生視点は葵生視点だけ、翔真視点は翔真視点だけでまとめる方がすっきりするかと思つて、side : AO side : SHOMA side 2 : AO side 2 : SHOMA side 2 : SHOMA side 2 . 5 : AOの順番になりました。

side 2 . 5 : AOの第27話も、本当は第25話と第26話の間の話だから間に入れる予定だったけど、翔真視点でまとめて、第27話はカットしようかとも考えたのですが……入れて、ずるずると長くなつてしまいました。

最後もお約束の嘘つき天使スマイルの翔真に怯える葵生を書いて、楽しかったです。

## イメージソングについて

イメージソングというか、執筆中に聞いていた曲を紹介します。普段は無音の状態で小説を書くことが多いのですが、この話を書くときは、いくつかの曲を聞いていました。

『HONEY\*POISON』の雰囲気合っていると思います。聞いたことない曲は、ぜひ聞いてみてください。

DREAMS COME TRUE「WINTER SONG」  
作中は春々夏なので時期が違いますが、しっとり感が好きです。

赤西仁「eternal」

この曲もしっとりとしていてせつない感じが好きです。作品のイメージというよりは、執筆中の私的ブームの曲ですっと聞いていました。

for Thank you!

お互い愛情表現が不器用な葵生と翔真ですが、ゆっくりと時間をかけてもっと素直に相手を思う気持ち伝えられるようになるんじゃないかと、思っています。

一言でも感想を聞かせて頂けると嬉しいです。  
最後まで読んで頂きありがとうございます。  
本当に、たくさんの方に読んで頂き、感謝です！

2011・6・21 滝沢美月

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6321t/>

---

HONEY\*POISON 甘い蜜には毒がある

2011年8月28日02時13分発行